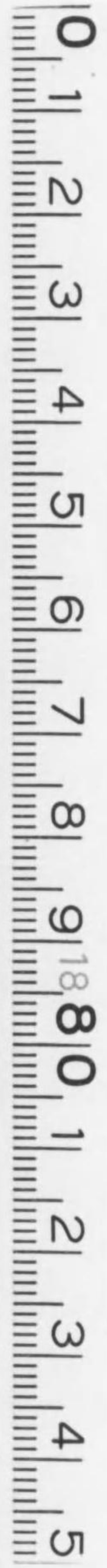


F83  
B14  
2

F83-B14-2ㄅ



1200500765281



始



30 12 22

2356  
H. БАЙКОВ

F83  
B14  
2

# 牝虎



著フコイバ・H  
譯進 脇上

密林の人々  
山小屋の女  
二頭の虎  
愛の犠牲  
仔をつれた牝虎  
牝虎の夜



## 密林の人々

「ほう！ そいつはいい！ 君もこれで、やつと一人前だよ！」

私の家族がロシアへ行つてしまつて、獨身者達の喜びさうな『臨時やもめ』になつたと聞いて私の舊友で狩獵家のバボーションが、かう言つて、大いに歓迎の意を表した。

「これから思ひきり羽が伸ばせるぜ！」ハンゾグオヘイヌ横道河子にある私の家で、彼は幅のある低音で、かう言つた。

「そこで、と。クリスマス休暇を全部つぶして、新年にかけて、一緒に出掛けようぜ。密林へ！ 有がたいことに、君の細君の邪魔がないからな！ 永いあひだ山の小屋へ行つて見ないから、様子を見て來なけりや。ことによると、雨や雪でぶツ倒れてゐるかもしれん！ なアにさうなれア、ゾートフの小屋まで延ばすさ。奴ア大分前から海林溪谷ハイリシの小屋へ行つてるんだ」

957  
227

かう言ひながら、その熊みたいな掌で私の手を握つてから、ニブード（八貫餘）もある袋を床につしんとおろした。そして、持つてゐたパイプに火をつけると、ぶかぶか吹かして、鼻にツンとくる臭ひで部屋を一ぱいにした。

私がためらつてゐるのを見て、この山男は、私には何も言はずに、つかつかと臺所へ出かけ、ボーイに向つて、かう言つた。

「おい、イワン！ 俺達アこれから密林へ出かける！ 準備を手抜きなく頼むぞ。アルコールト埋入れるのを忘れるなよ。おい、何だつて俺の面をそんなに見てるんだ？ 俺ア女の子やないぜ！ 色目なんざ使はんでもよからうー」

私のボーイのイワン・クージンは、典型的なヤロスラヴ人で、伶俐な若者だが、この「密林の熊」バボーシンを眼の前で「森の精」と呼んで、あまり好かなかつた。そして深切にしてくれるこの森の豪傑に對する輕蔑を、隠さうとしなかつた。

イワンは、聞くだけは聞いて、祿に返事もせず、私のところにやつて来て、ぶりぶりしながら言つた。

「旦那さま！ あの森の精は、まるで自分の家みたいに我が儘で困ります。あの人の言ひつけ通りしたくはございません。もし旦那様の言ひつけでしたら、その通りいたします！」

「イワン！」と私は忠實なボーイに言つた。「お前はバボーシンを知らん筈はあるまい！ 初めてぢやあるまいし！ 要るものを、すつかり用意しておけ！ 明日出かけるから」

イワンは「畏まりました！」と丁寧に言つて臺所へ去つたが、その途中で、のんびりした顔付でお茶を飲んでゐるバボーシンを睨みつけた。

日暮れ時分だつた。われわれは美味いシベリア肉饅頭で晩めしをすますと、床についたが、翌る朝、夜が明けるか明けない時分、横道河子驛から東南に當る海林山脈、密江河の溪谷を目指して、山道をすでに歩いてゐたのである。

重い荷物を背負うて、長い山道を歩いたので、すつかり疲れたわれわれが、山小屋に著いたのは、もう太陽が沈む前で、鋸の齒のやうな老爺嶺の高い頂に、やがて間もなく隠れようとする時分だつた。小屋は暗い松林の端で、花崗岩の崖を背負つてゐた。バボーシンの言つた通り、夏の大雨で倒されて、根本的修理をやらないと、とても住めさうになかつた。

仕方がないので、焚火を焚いて、野天で夜を明かすことにして、交替で起きてゐた。といふのは峠の方から、虎の吼える聲が遙かに聞えて來たからである。

虎が群をなして咆哮し、その物凄しい聲で密林の静寂を破る『野獸の夜』になつた。

「かうなれア、ゾーアの小屋へ行かなきやなるまい！」バポーシンは焚火の側に腰かけて、いつも手離したことの無いパイプで煙を吐きながら言つた。「此處から遠くない。まあ歩いて三時間だね！ 浅い谷を二つ渡つて、山の背一つ越したら、すぐよ！ グリーシャ（註・ゾーアの名）がこつちにやつて來たなア、よつぽど前だ。ニコラ祭（十二月六日）の日だつたよ。阿呆、女に絡みつかれてさ、ぐにやぐにやになつちまひあがつたんで、こいつ駄目だと思つて俺が密林へ追ひやつたんだが！ 多分女のことなどは忘れて人間らしくなつたことだらうよ！ だが、その女ツてのが大したもんでね、生娘だが、グリーシャに首ツたけなんだ！ 奴にしたツて、なアおい、何處へ出したつて恥しくない男だらう。腕力はあるし、男ツ振りは好いし！ あ奴にア娘といふ娘が夢中だよ。娘ツ子だけちやねえ、亭主持まで血道をあげてやがる！」私の友はかう言つて、ごろりと横になつた。が私はもう少し詳しく知りたことがあつたので、

かう訊ねた。

「まあ一寸待てよ。バポーシン！ 夜は長いぜ。あわてなくなつて、たつぷり寝られらアね。

……その娘が美人だツていふのに、何だつてグリーシャは結婚しちやいけないんだね？ そもその初めツから話してみろよ！」

「それなんだよ、問題は」と彼はまたパイプに火を點けて答へた。

「女の双親と兄達といふのが、グリーシャの名前を聞くのも嫌がつてゐて、娘を誘惑したら叩ツ殺してやる、と脅かしてるくらゐなんだ。ところがグリーシャの方ちや平氣なもんさ！ 熊みたいに腕力が強いがらね！ チュマコフ家の奴らが十人東になつて來たつて、へし折つちまアね！」

「また何だつてチュマコフの家ちや、グリーシャに娘をやりたがらないんだ？」これから行かうといふ小屋の主人の身の上を、もう少し知りたいと思つて私は訊ねた。

「至極簡単な話さ！」バポーシンは焚火にペツと唾を吐いて、拳骨で口を拭いて、低音で言つた。

「お婿さんが定まつてるんだ。金持の材木請負業者だが、もういい年で、男やもめでね。悪いところへ、ひよつこりグリーンシャが現はれたツて譯さ。娘はグリーンシャに惚れツちまつて、材木屋の面を見るのも嫌ツてことになつた。金なんか何にもならんさ！ チュマコフの奴らは、手を代へ品を代へて娘を説いて成金の嫁にしようと思へてるんだが、こいつは物になるまいよ。ナスターシャは、かうと思ひ込んだら他人の言ふことなんか耳を貸さない娘だからね。グリーンシャにしたつて馬鹿ぢやない、ちやんと心得てるさ。自分の女を何處の馬の骨とも判らんオツサンに渡すやうなことはすまい。いやどうも、若さ、といふ奴さ！ みんな莫迦けた下らん話さ！ 俺はこの女ツて奴ア見るのも眞ツ平だね、女なんてすつかり消えちまふといひんだ！ この世の中の悪いことは、みんな女が因だ！ 悪魔が自分の手で難しいと思つたところへ女を差し向けるんだ！ 女なんて唾を吐ツかけろ、祿なことはないぞツて俺はグリーンシャにいつてゐるんだが、あいつ、ふツと氣まぐれを起しちまつて——今ぢやもう、引き止める譯に行かん——なアに、抛ツたらかしときや、今に飽きちまつて迷ひも醒めるさ。ここんところ何いつたつて——糠に釘、だね！」

パボーシンは、感慨深さうにかういつて、パイプの灰を叩き出すと、蔑すむやうに焚火に唾をベツと吐いた。それから火の側近く、山羊の皮の上にくろりとなつて、やがて寝入つてしまつた。

私は眠れなかつたので、夜通し焚く薪を集めにかかつた。眠りに落ちた密林の静けさの中で響きわたる虎の聲は、東の空が白みかけて星の光が青褪める頃、やうやく聞えなくなつた。

友人が寝てゐる間に、ちよつと變つてゐるその風貌を描寫することにしよう。身體は七尺に近くて逞しいが、恰好はよろしい。大きな頭、廣い頬骨、青銅のやうな顔、鷲鼻、かういふ道具立は、どことなく原始的なものを想はせる。あまり大きくない褐色の眼は、凹んだ眼窩の中で炯々と光つてゐる。口髯と願髯は生えてゐないが、頭や顔に生える毛は、いつもポケットに入れて歩いてゐるペンナイフの折れたやつで剃つてゐた。

この男の服装は、手製の鹿皮のジャケットにズボンといふ恰好で、糞の皮で作つた長靴を穿いてゐた。この服装で夏多ぶツ通しだが、ただ夏になると、下著は無用の贅澤と稱して著なかつただけが違つてゐる。坊主頭にはいつも浣熊の皮の帽子を被つて、これをシベリア流に「マラ

ハイ」(註・耳覆つきの毛皮帽子)と稱してゐた。

この男の腕力は大したもので、蹄鐵を譯なく捻切り、指先で銅貨を折り曲げることが出来た。性質は至つて善良で、赤ン坊のやうに柔和だつた。そして自分の腕力を知つてゐるだけに、喧嘩の際などは決して腕力を用ひなかつた。だから、飲み仲間や仲良し連中は、彼がすっかり酔つ拂つたときに、よくぼかばか引つ叩いたりしたものである。

支那人や滿人は、彼のこの腕力とお人好しを尊敬して、『ロシア人バボーシカ』或は『チャンリ』即ち長い里程、と呼んでゐた。そしてまた、彼が人種的優越感を持たず、無慾恬淡なのにひどく親しみを感じてゐた。まつたく字義通り清廉無慾な男で、狩獵で随分いい金が取れるのだが、いつも金に困つてゐた。その癖金を賤んで、持つてゐると、みんな飲んで了ふといふ風だつた。

身體は熊のやうに頑健で、どんな寒さにも負けなかつた。極寒の最中、腕まくりしても、ただ皮膚が赤くなるだけだつた。どんな獣でも追ひ廻して斃して了ふし、八貫目あまりの荷を背負つたまま、一晝夜ぶつ通し山野を駆け廻ることができた。

狩獵にかけては、滿洲ちゆうでこの男の右に出るものはなかつたし、その秘藏する三連發銃は射損じといふことを知らなかつた。

酒は相當いけたが、泥酔したことはなかつた。密林に獵してゐる時は、一滴も酒を口にしなかつたが、その代り鐵道線路へ出たが最後、持つてゐるだけみんな飲んでしまふ。さういふ時は、誰でもかれでも、友人や飲み仲間だけでなく、初めて會つた人にまで大盤振舞ひをやるのだつた。

多くの人はこの癖につけ込んで彼にたかり、一文なしになるまで絞つてゐた。

彼は、動産、不動産の區別なく、財産といふものにまるで無關心で輕蔑してゐたが、獵銃だけは例外で、何よりもこれを貴重品視して大切に取扱ひ、びかびかするほど手入れしてゐた。

彼は密林から停車場に出てくると、先づ私の家に獵銃や彈藥を預けて、本人は何處かへ行方不明になるのが普通だつた。折々は一箇月以上も姿を見せないこともある。そして懷中が空しくなると、瘦せこけて、赤い無精髯を生やして、襤褸を著て、いやもうルンペンみたいな哀れな姿で、ふらりと現れるのであつた。



「さア、鼻眼鏡！これで済んだ！これから密林へ稼ぎに行くぜ！」  
いかにも懺悔した罪人、といつた顔付で、嘎れた聲で、かう言ふのが常だつた。

私の家の物置で（彼は部屋と認めてゐなかつた）休息し、熟睡してから、髭を剃り湯にはひつて、新しく小ざつぱりした『服装』をした彼は、もう斷然禁酒するよ、と私に約束して、密林へ去るのであつた。

しかし、今までの経験で、これは私に對する氣休めの言葉に過ぎない、といふことを、私は知つてゐた。

をりをり袋角（註・若い鹿の角、漢方の高貴藥）やその他の獲物を賣つた金を保管してくれ、と私に預けて、歸り際にかう言ひ置くことがあつた。

「俺が『遊んでゐる』ときは、斷じてこの金を渡してくれるな！金をくれと俺が言つたら――構はんから外へ突き出してくれ！」

ところが『遊んでゐる』ときだつたが、私の家にやつてきて『少しでもいいから飲み代を渡してくれ』と、まだ酔ひの醒めぬ眼に涙を浮かべながら哀願したことがある。しかし私が頑として

て聽かなかつたので、たうとう氣の毒に思つたボーイのイワンから、僅かばかりの金を借りたのである。

パボーシンは生れつき思ひ遣りのあるお人好しで、他人が金に困つてゐるのを見ると、誰彼の區別なく金を遣つたが、無論返して貰はうとは思つてもゐなかつた。

狩獵に行くときは、いつも一人で、連れを作らなかつた。そして獵犬は一匹も持つてゐなかつたが、狩獵先で偶然に一緒になつた人の獵犬を利用することはあつた。

「俺には犬は要らん」とこの老練な狩獵家は言ひ言ひした。「俺の鼻の利くことは犬以上だし、走ることだつて負けないよ！密ツと忍び足で行くときや、足跡の新しい奴を跟けるときなどは、犬なんかむしろ邪魔だね！」

彼の上品な性質を示すもう一つの例は、牝と仔に決して銃口を向けない、といふことである。これは狩獵仲間物笑ひの種になつてゐたんだが、當のパボーシンは別に氣にも掛けず、却てその連中を『皮剥ぎ野郎』とか『犬殺し』とか呼んでゐたものだ。

しかし、かういふ『皮剥ぎ』達が、猛獸の爪先で生命を落さうとするところを、パボーシ

に救はれたことがたびたびあつた。

ある時、犬に追はれてゐる傷いた虎が、経験のない若い獵師に飛びかかつて、踏み付けようとしたことがある。近くにゐたパボーシンは、咄嗟に駆け寄つて、短刀を虎の肩胛骨の邊りに突き刺した。すると、虎は若者を捨ててパボーシンを雪の中に轉がし、その恐るべき前脚で撲りかかつた、もし犬がゐて四方から虎に襲ひかからなかつたら、パボーシンは殺されてゐたかも知れないが、犬のお蔭で立ちあがつて、もう一度短刀を突き刺すことが出来たのである。

彼は今まで一人で十頭ぐらゐの虎を斃してゐる。これは犬を使はないで、單身ソツと忍びよつてやつつけたのだが、みんなと一緒に獵に出るときだけは犬を使つた。

匪賊や密林の住人たちは、パボーシンを超人的な存在として、その逞しい體格と腕力に敬意を表してゐた。

東部滿洲の奥地や密林では、非常に尊敬され歡待されてゐた。彼が行くと獲物がよくとれるといふので、何處でも歡迎されたものだ。

老爺嶺山脈の峠にある或る廟だが、香ひのいい蠟燭の燃えてゐる祭壇の上に、パボーシンを

描いて掲げてあつたが、この繪がまた頭が虎になつてゐる幻想的な巨人で、次ぎのやうな文句が漢字で書いてあつた。

「ロシア人、パボーシン。虎に命令する者。樹海における最も偉大にして力強い人間。偉大なる心臓と魂の持主なり」

パボーシンは、このことを知ると、すぐ峠の廟へ出かけて行つて自分の像を剥ぎ取り、口汚く罵つて唾を吐きかけた。

「祿でもないことを考へやがつて！」何百年も経つた朝鮮松の樹蔭に、彼の低音が響いた。「神の代りに俺を手前らの寺にぶら提げてやがる！それが似てでもゐれアまだしも！この頭は何だ。怪物の頭をくつつけやがつて！」

だが、何にもならなかつた。間もなく同じ峠の廟に、二箇所も像が掲げられた。

彼はそれを知つたが、たうとう片手を振つて「勝手にしあがれ！馬鹿野郎ども、そんなに畫をぬたくるのが好きなら！やらしとけ。まあ豚や驢馬でなくて虎の頭だから、まだましたつたよ！」と言つた。彼の口からユーモアの消える時はなかつた。非常に苦しい悲劇的な立場

にある時でも、をかした恰好をして冗談口を叩いたり笑つたりしてゐた。

意氣銷沈とか失望落膽とかいふものを、彼は全然知らなかつた。

いつだつたか、泥酔と亂行の咎で滿洲から追放される、と脅かされたことがある。すると、私の所にやつて来て威張つた。

「俺は誰だつて恐れやしないぞ！俺は罪人でもなければ流刑囚でもないんだ！皇帝と祖國に信仰と眞實をもつて仕へて來たこの俺を追放するとは、何事だ！やるならやつてみる！この俺を地球の外へ抛つぽり出す譯にや行くまいテ！外のことなら、平氣の平左だ！」

當局の壓迫から友人を救ひ出すために、私が保證することになつた。すると、當局は彼に構はぬやうになつた。といふよりも、手を焼いて、勝手にしろ、といふ風だ。

彼の正直さと無慾さとは、まさに聖人に近かつた。ある時、それは團匪事件の際だつたが、バポーションはその時東清鐵道の荷物運搬の護衛兵だつた。丁度五萬ルーブルの金貨のはひつた箱を運搬してゐたが、石頭河子驛附近で匪賊に襲はれたのである。交戦してゐるうちにロシア人は全部倒れてしまひ、胸に重傷を負うたバポーションは、石で箱を叩き毀して金貨の袋を取り

出し、それを背負つて密林の中へ逃げこみ、匪賊の銃床で殴り殺されるのをやうやく免れた。

それから二三日経つて出血多量と空腹のために疲勞の極に達した彼は、一面坡驛に辿りついて運輸事務所での金の全部引き渡したのだつた。そのとき謝禮として差し出された五百ルーブルを「いや、自分の職責をつくしたに過ぎないので」と言つて斷つた。ただ慰勞の意味で「遊ぶこと」を上役に願ひ出て「大びらに」五六日ぶつ續けに飲み廻つたのである。

その後、山市驛勤務のイズマイロフ憲兵大尉の許でボーイをしてゐた時だが、大尉は自分の寢臺の下に中隊の金庫を置いて、必要に応じて金を支出してゐた。大尉は勤務の關係で家を留守にすることが多かつたので、これ以上に好い保管の方法はなかつた譯である。當時その金庫の中には、二萬か三萬ルーブルに達する大金がはひつてゐたのだ！

私が一緒に東部滿洲の隅々まで、まだ黒龍江沿岸から朝鮮國境まで跋渉した狩獵家バポーションの精神的及び肉體的の輪廓は、大體以上のやうなものである。涯ない密林を歩き廻つたり狩獵に行つたりするのに極めて必要な實際的知識と有益な情報を、いろいろと彼に教へられたのである。

「おい、起きろ！ バボーション！ 起きろよ！」私はぐつすり寝込んでゐる狩獵家の横腹をつついて起した。「とつづくに茶が沸いてるぞ、まるで羽根蒲團の上に寝てる女みたいに、好い氣持で寝てるぜ！」

この古い密林の住人を起すにはこれだけ言へば澤山であつた。

糖酒のはひつた熱い茶を啜りながら、バボーションはやうやく口を開いた。

「小屋にグリーンシャが居るか居ないか、こいつは判らんよ！ 女の居る停車場へ、又候、この出かけて行つたんぢやないかと思ふんだが……何しろ女の愛撫に、ふらふらになつてゐるで、止めたつて止まるこつちやない。見掛けは堂々として、しつかりした人間に見えるんだがなあ——こいつはやつぱり心臓の問題だな。心臓の強い奴ア、いつもしやんと踏みこたへて、どつちからついても頑張り通すね。ところがグリーンシャときたら、氣が弱くて、すぐ襤褸ツ切れみたいになつて、突然居なくなつてしまふ。現に懇々と俺が説いて聞かしたら、奴さん、すつかり恥ぢ入つて、きつと女を捨てると約束までしたほどだが！ いくら言つたつて駄目さ！ 一度や二度ぢやないんだからなア……！」

「だがね、アキンチン（註・バボーションの名前）グリーンシャに女があらうと無からうと、君にとつちや、どうせ同じぢやないのかね？ 君に關係のないことぢやないか！」私は下に置いてあるコップに水筒の糖酒を注ぎながら、横槍を入れた。

彼はちよつと考へ込みながら、狡さうに片眼をつぶつて、かう答へた。

「仰せの通りだよ。君！ 俺に關係のない話で、グリーンシャに關係のある事だ。しかし、君の説に依ると、溺れかけてゐる人間に手をさし伸べちや、ならん、といふんだね？ だが、グリーンシャは俺の親友だぜ！ あいつが現に眼の前で溺れてゐるのを、黙つて見てをれるか！」それからわれわれは山道を歩きながらこの問題を長々と話し合つたがやがて、海林廟のある高い峠に出た。ここでわれわれは一ト休みすることになつた。

老爺嶺の山脈の素晴らしい景色が、ここから見わたされる。緑色の浪のやうな山の起伏が、すみれ色の霧に蔽はれて地平線まで擴がりながら續いてゐた。遙か遠くの間々も、澄み切つた冷やかな空氣の中に、くつきりと描き出されてゐた。

朝の太陽の薔薇色の光を浴びた大頭頂子の花崗岩の頂が土耳其玉色の空に聳え、針葉樹の茂

みに縁取られた岩の地肌が見られた。

この景色の美しさは、まったく素晴らしいもので、流石の古い密林の住人でさへ、時に突ツ立つたまま、すっかり見惚れてしまつて、私を顧みて、次のやうに言つたぐらゐである。

「なア君！ この美しさを見るよ！ まつたく造物主の偉大さを語つてゐるやうぢやないか！ 世の中には神の存在を信じない人々があるが、その連中をここに引つばつて来てこの景色を見せてやりたいね！ それでもまだ信じないときは、構はんから叩ツ殺してしまふ。そんなやうな人間は生きてゐる用も理由もないからね。奴らは生きてたつて何の役にも立たん、工場で働いてゐる連中は神を信じないが、何故かといふと、神の國の美しさを見たことがないし、小さい破屋と煙だらけの工場しか知らないからなんだ。密林に住んでる者は、しがたない水呑百姓だつて、自然や神に近い。だから魂が綺麗で頭が曇つてゐないんだ。早い話が、グリーンシカ・ゾートフだね、あの男は元モスクワ邊の職工で神を認めなかつたものだが、今ちや密林に住んで神の世界を見るやうになつてから、まるツきり人間が變つたよ。魂が目醒めたんだね！ あいつは元氣な好い青年だが、惜むらくは女に甘い」

「君はまた、莫迦に女を重要視するぢやないか、パポーシン！」と私は突込んだ。「まるで獨りぼつちの猪みたいに人々から遠ざかつて、それで女を罵倒するのは、女が君に對して無關心だからなんだ！」

狩獵家は皮肉な眼付で私をチラと見てかう答へた。

「そいつはまるで見當違ひだね。鼻眼鏡君！ 俺は君よりア女をよく知つてゐる！ 有難いことに俺はもう四十を越してゐるが、君はまだ乳呑兒だよ！ 俺が獨りぼつちの猪ツてのは、正にその通り。だがその獸だつて、牝の言ひなりにアなつてないからね！ だから、鼻眼鏡。事に關しては黙つてゐた方がいいぜ！」パポーシンはかう言ふと、煙草の煙を吸ひこみながら思ひに耽つた。

彼は私と近づきになつた當初から、私を鼻眼鏡と呼んでゐた。といふのは、私は近眼で、眼鏡か鼻眼鏡をいつも掛けてゐたからだ。この綽名は密林の住人全體に知れ渡つて、支那人たちも私を「ヤンチン」つまり眼鏡と呼んでゐた。

さつきの話をつづけて、私はパポーシンに答へた。

「大體において君の言ふ通りだが、人間をけだものと一緒にする譯には行かんよ。肉體は似てゐても精神的には格段の相違があるからな。生物學でさへ、理性を具へてゐる高級な存在として、人間を特別扱ひにしてゐるんだぜ！」

バボーションは私の言ふことを黙つて聽いてゐたが、パイプを廟の角で叩いて煙草屑をはたき出してかう言つた。

「とにかく出掛けよう。でないとお喋りばかりして、一日無駄にしてふぜ」それから獵銃を肩にし、袋の釣革を引あげて、鹿皮で縫つた大きな靴で柔かい雪を踏みながら、山の斜面を降りはじめた。

われわれは正午前に、ゾートフの小屋に著いた。小屋は二道海林河ツルギンの高い岸邊にあつて、朝鮮松の林の端になつてゐて、ここで落葉松林と檜林が終つて、これから先きは針葉樹の林になつてゐた。

小屋の煙突から出てゐる煙が、遠くの方から見えた。

「ははア！」冬の明るい陽射しを浴びてゐる遠くの方を、じつと透かして見ながら、バボーション

ンが言つた。「グリーンシヤの奴、獵に行かないで家に居るに違ひない」

間もなくわれわれは小屋に近づいたが、驚いたことには、犬がちつとも吠えなかつた。ただ年取つたズメイカだけが尻尾を振つて、くんくん鼻を鳴らして、脇の方へ離れた。

納屋には馬の姿も見當らなかつたので主人公は密林へ獵に出かけたんだな、と思つた。

ところが、小屋の中へ一步踏みこむと、うら若い女性の姿が眼にはひつたので、すつかり驚いた。

「あ、ナスターシヤ！ どうして此處へ？ 意外だなア！」バボーションはかう叫びながら、美しい女性に近づいて、小さいが丈夫さうな女の手を握手した。

私も側へ寄つて挨拶した。

ナスチャ(註・ナスターシヤと同じ)は、まつたく「何處へ出しても恥しくない」娘だつた。背がすらりと高く、色白の顔にはほんのりと紅味が差して、沈んだ青い眼をして、眉は黒くて長かつた。赤いリボンで結んである房々としたお下髪は腰の下まで垂れてゐた。

彼女はわれわれを見ると、どきまぎして、罌粟の花のやうに赤くなつたものの、間もなく落

著を取り戻して、慧しげに上品に振舞つた。

「ところで、グリゴリーイは？」そのうちに私の友人は旅行用の支度を脱いで、銃を壁にかけて、かう訊ねた。

「昨日獲物を賣りに停車場へ行きましたわ。あたしは家の仕事で残つてますの！」フライパンや薬罐が沸いてゐる竈の側で働きながら、ナスチャは答へた。

「ぢや何かい、ナスターシヤ。君はもう本當の主婦になつたんだね？ さうなんだらう？」バポーションは片眼を絞さうに細めて、かう質問した。

「いづれさういふことになりますわ、アキンチン・ステパノヴィチさん！」美しい女性は俯いたまま、指先で白いエプロンの襷を弄りながら答へた。

ナスチャは、蜂蜜入りの茶をわれわれにご馳走してから半毛皮外套を著て、斧を手にすると、戸外へ出た。

「おい鼻眼鏡！ どう思ふ？ ここでのうのうとしてゐる事もないな！ 獵に行かうか！ 夕方までは大分暇があるが！ 何か獲物があるかも知れん」

私はそれに賛成した。そして袋を小屋の中に残して、獵銃と弾帯と、乾肉少しばかりを身につけて、小屋の外へ出た。

その時ナスチャは薪を割つてゐたが、餘念なく働いてゐるその様子は、見た眼にも好もしくつた。彼女は重い薪を巧みに割つた。木ツ葉が音を立てて四散した。

「やア、別嬪さん、ご苦労さん！」

バポーションは煙草入れの煙草をパイプに詰めながら聲を掛けた。

「ありがたう」若い主婦はかう答へて、斧を抛り出すと、半外套の袖で汗ばんだ額を拭いた。

「何處へいらつしやるの？ 晝食の支度が出来てますのに！ それに、もう遅いぢやありませんかー」

「いや、行つて来るよ。夕方まで時間は十分だから……しかし、密林に獨りぼつちでゐるのが怖くなつたんぢやないのかね？」と彼は揶揄つて訊ねた。

「何も怖ありませんわ……」ナスチャは割つた薪を集めながら、白い眞珠のやうなニク並びの齒をチラと覗かせて微笑みながら答へた。「グリゴリーイは二、三日歸りませんの。ちつとも

怖かないわ。そんなに臆病ぢやないわ。匪賊だつて居ないし、獸を恐がるのは子供だけよ！  
ぢや行つてらつしやい！」彼女はわれわれに向つてうなづくくと、かう言つて薪を抱へたまま小屋の内へ姿を消した。

「あれもやつぱり女だよ、俺には判つてゐる！」バボーションは私と並んで、凍結した河の上を廻りながら、かう言つた。「あの女はどんなものだつて怖れやしないよ！ あの女にかかつちや悪魔だつて尻尾を巻いて逃げ出すぜ！ あの馬鹿野郎に至つちや、言ふだけ野暮だ！ 思ふ存分引すり廻されて、ぐうの音も出ないだらうよ！ グリゴリーがもう駄目になつたつてことは俺がちゃんと見抜いてゐる！ それに、あの、老ぼれの馬鹿野郎、材木請負の男も、無事ぢや済むまい！ 酷い目に遭ふぜ！ 大した女だ！ 何も言はんよ！ きつと何だぜ、あの女、双親のところから逃げ出して来て、それをグリゴリーが密林に引つぱつて来たんだぜ！ 判り切つた話だ、よくある事だ、俺は女に、我慢出来んが、しかしあの女は偉いよ。自分の意地を通して、侮辱されて黙つてないからね。グリゴリーのやつたことも當然だ。あれより外に出口はなかつたんだ！ ところで、これから何うなるか？ 女の双親が折れて出て、娘を許

す、といふことにならう！ 臭い物には蓋をしろ、さ！ だが、いづれにしても、グリーンヤは阿呆だよ！ 昔は人間らしかつたが、今ぢや、いやはや！」バボーションはかう言つて、いまいましげにベツと唾を吐いて、口汚く罵つた。

間もなく上り勾配になつたので、われわれは河を出て、暗い松林の中へはひつて行つた。すると、群を離れた猪の新しい足跡を見つけたので、忍び足で跟けはじめた。足跡に導かれてわれわれは松林を出て樅林にはひつた。そして二時間ぐらゐ行くと、風下にあたる方から猪のつひ近くに辿りついた。大きな獸の全身が山の脊越しにすつかり見えた。猪は、樅の木の下にしつらへてある胡桃の枝の柔かい寝床に横はつてゐた。さも満足氣な射と鼻聲が聞えてくる。一ト寝入りしてゐるところだつた。

「鼻眼鏡！ 君撃てよ。奴さん逃げ出すやうだつたら、俺がやつつけるから！」バボーションが私の耳に口を寄せて言つた。

山の脊に立つたまま發砲の用意をした。

われわれは猪の肩の邊りを狙つて、曳金を引いた。だーんと銃聲がひびいて、その反響が、



谷間や山峽を轉がつていった。猪は突き刺されでもしたやうに飛び上つて前のめりに倒れた。が、すぐ起き上つて、齒をがたつかせて、よろめきながら歩き出した。それをバボーションが追ひ撃ちして、息の根を止めてしまつた。傍へ寄つてみると、猪は呻き出したが、やがて最後の息を吐いて、静かになつた。これは白毛交りの剛い毛の生えた孤獨の老猪で、黄褐色の大きな牙は捻ぢ曲つてをり、耳は裂けて垂れさがり、永い一生の間にくぐつて來た闘ひの際に受けた傷痕が、横腹に残つてゐた。これは密林の老兵であり、若くて強い競争者のために、群を追はれた老指導者である。

バボーションは猪の死體に腰かけて、例のパイプを燻らしながら、また感想を述べはじめた。猪のいかつい額を撫でながら、こんなことを言つた。

「なあおい、氣の毒なご老體。生きてるうちにお前さんと實際ふ機會がなかつたな！ 俺達も群を追はれてるんだよ！ お前さんには最後の時が來たが、俺はかうやつて獨りぼつちで最後の日が來るまでぶらぶら生きてゐるんだ！ 間もなく俺にも最後の日が來て、何處か密林の中で往生することだらうがね！ それまでは年とつた浮浪者にも生きる道があるさ！ それ以上

のことは望んでゐないよ」

「バボーション！ また感想を述べ出したね！ そんなことよりは、臟腑を抜いて、それから山に登らう。向ふに虎の通路があるだらうと思ふんだが」

「ああ、いいとも。やらう！」と彼は賛成して、腰をあげると、毛むくじやらの逞しい兩腕を、肘のあたりまで捲くり上げた。

十五分も経つと、猪は臟腑を抜かれて、湯氣の立つてゐる内臟は横の方へ抛り出された。寒さが酷くなつて、われわれの手が凍りついたので、凍つた指を温かい血の中に突き込んで温めた。われわれの手は、肉屋のおやぢのやうに血塗れになつたが、密林ではこれがお化粧だから平氣だつた。

猪の腹の中に雪を詰めて、その上に枯枝や木の枝を被せて、鴉の襲來を防いで、われわれは、花崗岩の地肌も露はな嶮しい峰を攀ち登つた。そして虎が居所を變へるとき通る『虎の通路』を發見した。最近雪の降つたこの邊りに、ごく新しい三頭の虎、牝虎一頭と牡虎二頭の足跡が残つてゐた。これらの虎は、無論牝を先頭に雁行して歩いて行つたのである。

「どうだい、パボーシン！」私は夜前に通過した猛獣の足跡を指差して言った。「けだものさへ  
牝が牡の先に立つて引っぱり廻してゐるぜ！こいつは自然の法則で、どうにも仕様がないら  
しぜ！」

「ところが、俺はさうは思はない！」と密林の住人は反対した。

「猪や鹿や山羊の牡は、牝を追つかけて廻して、牝が自分の意に従はないと、酷い目に遭はせる  
ぜ！人間にしたつてさうよ。男は女の尻にくつついて歩かない、女が男の後から歩く！グ  
リーシャがナスチヤの尻を追つかけたんでなく、ナスチヤの方でグリーシャの小屋に飛びこん  
で来たんぢやないか！」

「君の言ふことは、矛盾してるぜ！」と私は揚げ足をとつた。「さつきは君、ナスターシャがグ  
リゴリーイを虜にして服従させてゐる、と言つておいて、今度は反対のことを言つてるぢやな  
いか！そこんところを説明してくれよ！」

しかし、パボーシンは何も説明しないで済んだ。といふのは丁度その時、何處か近いところ  
で虎が咆えたので、われわれはハツとして、その場に立ちすくんだのである。

「ほう！」友人は、獵銃の撃鉄をあげ、森の繁みをじつと見ながら言つた。「じつとしてゐる、  
鼻眼鏡！いよいよおいでなすつたぜ！」

猛獣の足音と、重い足に踏みつけられる雪の音が、はつきりと聞えた。

空地へ抜けると、臺地に出た。すると縦林の茂つた広い谷に沿つて視野が展げてきた。谷の  
向ふ側には、樺や胡桃の木が疎に生えてゐる険しい支脈が、盛り上つてゐた。

この支脈の傾斜面に眼を注ぐと、縦に並んで山腹を縫つて歩く三頭の虎が眼に映つた。先頭  
のは大きな牝虎で、それに続くのがまた一廻り大きい年老つた虎で、それを敬遠するやうに、  
後の方から若い虎が跟いて行つた。牝虎は、藪や倒れた木を避けながら、溝や低地を飛び越え  
ながら、振り向きもせず悠々と歩いてゐた。年取つた牡虎は興奮してゐるらしく、振り向いた  
り咆えたりした。若い虎があまり近寄りすぎると、年老つた虎は立ち止つて齒を露き出し、ま  
るで怒つた猫のやうに、ふうツと唸つた。

パボーシンは、虎までの距離を目測しながら言つた。

「歩數にして八百、といふところかな！残念ながら撃てない。ちと遠いからね。なアに大丈夫

夫さ！ 近路を通つて待ち伏せるから！ 遅れないやうに急がう！」かう言ふとバポーシンは、雪堆や草叢を突切つて、雪の深い斜面を降りはじめた。

私はやつと彼の後につづいて行つた。樹木の枝が跳ねて顔を叩くので、眼鏡や眼を用心して、をりをり手で顔を覆はねばならなかつた。

われわれは立止らないで懸命に走つた。が、険しい坂に差しかかると、われわれの速力が鈍つて、力が抜けた。疲労と緊張のせいで、私の眼の中が青くなつて、心臓は破れるやうだつた。が、バポーシンは、けろりとして、莫ひの強い安煙草をぶかぶか吹かして、煙を背後に残しながら、どんどん先へ歩いて行つた。

をりをり腰まで雪の中にはひる處があつた。すると彼は、大きくて巖疊な自分の身體で、衝角のやうに、雪堆をぐんぐん切り開いて突進して行つた。

私は、まあ早い話が碎氷船の後から行くボートのやうなもので、樂々と彼の後につづいた。私の友人は、歩くのに酷い難澁しながらも、相變らず朗かで、持前のユーモアを忘れなかつた。

「なアおい、鼻眼鏡！」大きな雪の山を前方へ押し退けながら彼が言つた。「人生においてもま

た、かくの如し。自分で道を拓いて行かねばならん。困難なほど良いんだ。なるほどこの雪深い處を避けて遠廻りすることはできる。しかし五露里（五キロ）は廻り道することになる。つまり向ふに著くのが一時間おそくなる。一番難儀な道を選ばなきやならんことが、人生にもまある。ところで少々ぐづついてゐたから、少し急がう。でないと獲物に逃げられる。逃げられたら、もうお仕舞ひだ」

かう言ひながら、バポーシンは除雪車のやうに動き出した。そして間もなく山の頂に辿り著いた。虎は此處に出て来る筈になつてゐたのだが、まことに残念なことには虎の方が一ト足先に越えてしまつたらしい。足跡がはつきりとそれを證明してゐた。

「大方こんなコツだらうと思つたよ！」バポーシンは凍てついた雪に薄く覆はれてゐる岩の上の、巨大な猫の足跡を眺めながら、残念さうに呟いた。「忌々しい、雪に邪魔されたんだ！ 雪さへなかつたら三頭とも捕まへたものをなあ！ なに、いいさ、どつち道、逃しツこないから。逃げやしないよ。それはいいが、もう晚いぜ。間もなく陽が沈むし、寝る處を考へなきやなるまい。谷へ降りよう。彼處の松林の中に凍つてゐない流れがある。野宿するには恰好の場

所だ。さ、行かう！ くづくしちやをれない！」大男はかう言ひながら私の肩を叩いて、安煙草の煙を吐きながら草むらや藪を猪のやうに掻き分け掻き分け、寝場所を目指して坂を降つた。

われわれは、小さな流の岸に恰好の場所を探し出して、枝の茂つた樅の木の下に雪を掻き退け、焚火を焚いて、薬罐をかけると、鹿の皮を敷いて、ごろりと横になつた。何處か樹海の密林の遙か彼方に残して來た世界のこと何も考へずに、至極のんびりした氣持だつた。

焚火に當りながら、ブリキのコップでお茶を飲んで、われわれは長閑な氣持になり、和やかな話は夜中過ぎまで續いた。

古い密林の放浪者を相手に、次ぎから次ぎへ、いろんな話に花が咲いたが、お仕舞にはやはり彼の好きな「女の話」に移つて行つた。

「なあおい！」濡れた長靴を火の上に掛けながら彼が言つた。「グリゴリーの小屋に泊らないで、此處で野宿してよかつたな。あそこには女があるからね！ 女ツて奴ア我慢出來んよ！ 密林の中でのびのびした方がすつと好い！ 獸だつて温い家なんかなくて、森の中や野ツばら

に寝るぢやないか！ 人間だつてご同様、何處だつて、森の中にだつて住める筈だよ。家だとか、温い部屋だとかいふものは——我儘、墮落に過ぎないよ！」

「おい、そいつは少々間違つてるぜ！」と私は異議をとなへた。「けだものや鳥だつて、巢だとか穴だとかいふ棲家を持つてるよ。ところが、君は、こんなものは我儘だといふ！ これは我儘でなく、あらゆる生き物の自然の要求だよ！ 現代文化は人間を自然から遠ざけておいて、その補整といふ形で、文化の意義の検討を不可能にするやうな幸福と特典を人間に與へたのだ！」

密林の哲學者は私の言ふことに耳を傾けてゐたが、ややしばらく考へてから、言葉をつづけた。

「君の言ふことは、多分みんな本當かも知れない。が、俺は學問も教育もない男だ。俺に判らんところもある。君は學問のある男で、いろんなことを知つてる。そこで訊きたいんだが、その知識は何の役に立つんだね？ 知識が人間を少しでも幸福にしたといふのかね？ 我が皇帝アレキサンドルが世を捨てて、人里離れたシベリアの密林の中へ隠遁したと、俺は信じてゐる

が、何故家出したのか、君は何う思ふ？ 地上の幸福は凡てその身に具はつてゐた人ではないか！ 多くの國と國民の上に立つ大ロシアの皇帝が、帝位を捨てて、フォードル・クジミツチと名乗つて、一介の僧侶として生涯を終へてゐる！ してみると君らの文化の値打はどうなるんだ！ いや、君、文化の辯護は止したがいい！ 第一、文化は女だ、詰らん。第二に、文化が與へるものは凡て一顧の價値もない！……」

その時、暗い夜空に流星が閃いて、明るい光世で空の底に線を引いた。

バボーションは、流星の消えた後を、しばらく見てゐたが、やがてまた口を開いた。

「あれは學者の話によると星が落ちるんださうだが、ここいらの女共は、正直な人の靈魂を天使が天帝のところへ拉れて行くんだ、と言つてゐる。だが、こいつは無論間違ひで、科學の方が本當に近いだらう。と言つても俺は、この地球だとか、いろんな星が、何も支へるものが無くて宙にじつとしてゐて、何處へも落っこつて行かない、なんてことは、どう考へても腑に落ちないね！ われわれは蕁麻について徹みたいにこの地球の表面を這ひ、生れ、生活し、死んで行く。そしてこの世界にはわれわれの外に何ものも居ないと考へる！ 何うして、何處に、

何故に、といふことを、君は残らず知つてゐるに違ひない。何も知らない俺に、すつかり説明してくれないか！」彼はかう言つて、パイプの中の灰をはたき出すと、頭の下に枕をおいて工合のいいやうに寝て、話を待ち受けた。

「君の言ふことを本當にしよう。アキンチン！」と私は友に答へた。「知識は人間の智能を啓發し、視野を擴げる。『學問は光明、無學は暗』といふ諺があるのも故あるかなだ。ところで神の世界はどうして作られたか、われわれの地球はどうして無限の奈落へ落ちないのか、宇宙とは何であるか、宇宙の根本法則はどんなものか、これから君に話して聞かせよう」

私がこの古い密林の住人を前にして、壯大な宇宙の繪巻物を繰りひろげてみると、彼はすっかり驚歎して、惘然としてしまつた。子供のやうに素朴で發達はしてゐないが、自然のままの強さを持つ彼の智能は、初等天文學の基礎的概念を、迅速に受け容れて消化したらしく思はれた。私の話が終つたとき、彼はながい間無言のまま恰も私の言葉の眞偽をためし、判らない問題の解答を求めるやうに無数の星が爍めいてゐる暗い空をためすやうな眼付で眺めてゐた。

私は彼の思考の邪魔をしないで纏まるやうにと思つて、お茶の用意に取りかかつた。それに

は、なんべんも雪を藥罐の中に入れて、溶かして火に掛けねばならなかつた。是が三十分以上もかかつた。パボーシンは無言のまま考へ込みながら、しきりにパイプの煙を吐いてゐた。

「君の言つたことは、みんな判つたよ、鼻眼鏡！」密林の放浪者は瞬きもしない眼で私をジツと見て、つひにかう言つた。「だが、一つだけどうしても俺の頭で考へられないのは「無限」といふことだ。どうしても想像出來ん！こいつは俺の頭ぢやどうにもならん。俺がもう少し賢いと、すぐ判るんだらうがね！」

「いや、さうぢやないよ、君……」あわてて私は慰めた。「そいつは君の頭のせぢやない。宇宙の無限大といふ想念は、貧弱な人間の智力では把握出來ないほど廣大なものだ！制限された人間の思考力の埒外にあるものだ。安心したまへ。君の頭が天文学者の頭に劣つてゐる譯ぢやない。その學者の頭脳も、無限大の奥へはまだ届かないんだ。君の頭と同じくやはり無力なんだ！」

「あのね、君。どうだらう？」私の言ふことに耳を傾けてゐたパボーシンが言つた。「俺は空の學問、君等の言葉で言へや、そのアストロノミア（天文学）だか、ガストロノミア（割烹

術）だかを勉強しようと思ふ。べらぼうに面白い學問だよ！學問の中の學問と言へるなア！どうだね、神の世界がどうして出來てゐるか、そいつを知る何かの本が、君の手許にないかね？」

「あるとも！」と私は答へた。「あるにはあるが、いきなり讀んだつてなかなか判るまい。君は數學をよく知らんからね。で、丁度君に手頃の本をハルピンのイワン・チホノーウイチ・シチエロコーフに注文してやらう。フラムマリオンの『通俗天文学』といふ奴で、これなら判りいゝ」

「そいつは有難い！」彼は私の肩を叩いて叫んだ。「イワン・チホノーウイチに手紙を書いてくれ。本を送つてくれるやうに、それからたまには獵にやつて來い、それともハルピンで意氣地なしになつて母なる密林を忘れたのか、と書き添へてくれ。俺は昔、あいつと密江河に雉撃ちに行つたことがある。元氣のいい若者で、物解りのいい愛想のいい男だ。獵となるといやもう夢中で駆け廻るのが好きで、傍に附いてなげやならなかつたものさ。フラムマリオンの天文学を持つてやつて來いと、書いてくれ」

パボーシンはかう言つて、旅行用の袋を頭の下に置いて、火の傍に丸くなつて、眠る用意を

した。

私は眠くなかつた。寒さが酷かつたからだ。そこで私は女の氣を變へようとしてこんな質問をした。「バボーションカ！ 君は故意と、アストロノミーア（天文學）と言はないでガストロノミーア（割烹術）と言つたのかい？ 知らないで言つたのかい？ 割烹術といふのは、食べ物、食道樂、食ひ意地の學問で、天文學は宇宙の學問、星に關する學問だよ」

「だが、學者が何と呼んでゐるか、そんなこと誰が知るもんか？」密林の放浪者は狡い微笑を浮かべながら言つた。「どうせ同じことぢやないか！ ロシアの言葉ぢやないからな！ いづれにしてもイワン・チホノウイチに、そのガストロノミーアのことを俺のために書いてやつてくれ。あいつは、事情を察して、バボーションカの奴、星を食らふつもりだな、と考へるだらう。だがまあ、そこは、いいやうに頼む……それはさうとしてもう寢る時分だぜ！ 君も横になれよ。羽蒲團は敷いてあるし、ベーチカは盛んに焚いてあるしさ！ ぢや、お寢み！」

彼はかう言ふと、また火の傍へにぢり寄つて、すぐ深い眠りにおちた。  
私もそれに倣つた。

真夜中に二人とも眼を覺まして冷え切つた體内を暖めるために、焚火に薪を添へて、お茶を沸かした。それから、バボーションが「氣狂牛から絞つた牛乳」と呼んでゐる糖酒の助けを借りることになつた。お茶を飲み終へると、和やかな彼の氣分を利用して、女に關する彼の好きな話題に移り、序に彼が決して觸れたがらないテーマ、つまりこの密林の男の生活に女がどんな役割を演じたか、といふことに話を移した。どうやらこの思ひ出は、まだ癒え切らない傷口に觸れて、嫌な氣がするらしかつた。

「ところで、君はいつも女を罵倒して、輕蔑してゐる。憎惡すら抱いてゐるが」と私はわざと痛いところを突くやうに言つた。「恐らく、何時だか知らないが、女が君に非常に嫌な思ひをさせて、それが残つてゐるんぢやないか！ どうも女ツて奴が君を脱線させ、君の生涯に運命的な役割を演じたに違ひないといふ氣がする、君を不幸にした女は何者か、白狀しろよ！」

これを聞いたバボーションは忽ちしやんとなつて、眠氣など拭き取つたやうになつた。彼は坐り直して、ゆつくり煙草を喫み出したが、つひに口を切つた。

「うむ、まさにお察しの通りだ。俺の生涯で女が或る役割を演じてゐる。お望みなら、小説家

の言ふ自叙傳てやつを、話して聞かさう。俺は生粋のシベリア人ぢやない。親爺は農奴解放後タンボフ縣から移住したんだ。俺達はイルクーツクの近郊に住んでゐた。俺は兵隊に行く前に結婚した。大きくなつて近衛聯隊にとられ、上等兵になつて除隊した。君、俺が隊の右翼に並んでゐたと思つちやいけない！俺は七尺に一寸五分足りない長身だが、第一中隊の左翼にゐたんだぜ！俺より背の高いのが三十人もゐたさ！右翼には、アルハンゲルスクの海岸育ちのヂエヂュウリンといふ兵がゐたが、こいつは七尺八寸、幅も大したもので、こいつの前に出ると、俺なんかまるで子供に見えたッけ！まったく見事な體格が、ロシアにはあつたよ。七尺もある兵隊ばかりで近衛聯隊の出来る國が外にあつたかい？俺は除隊になる時、文句の彫つてある銀時計を、露帝自身の手から頂戴して、そいつを非常に大事にしたもんだ。さて家に歸つて見ると、どうだい、子供がうようよと居るぢやないか！俺が兵隊に行く時は、子供なんて一人もゐなかつたんだ。女房の奴が、俺の弟と同棲してゐたことを白狀したときすんでのことに女房を叩ッ殺さうと思つたぐらゐだ。そこで俺は凡ゆるものに唾をひっかけ、密林へはひつてしまつたんだ。その後東清鐵道の護衛兵になり、團匪事件を取り鎮め、職を退いて

から、ちつと滿洲に居残つて、此處で獵をやつて、自分の運命に満足してゐる。女は要らない。女なんて勝手にしあがれ、といふ譯さ、これが俺のロマンスの全部だ！さあ、これでも寢さしてくれ。間もなく夜が明けるからね！

私は、その露帝に貰つたといふ時計が一體どうなつたか、それに興味をおぼえて、改めて訊ねた。

「その時計はどうしたんだ？ちつとも見掛けないやうだが！」

「無くなつた。浮世を渡り歩いてるだらうよ！無論友達が持ち出して飲んちまつたに極まつてるさ！もう話しかけるなよ、眠くてやり切れない！」

翌朝、足跡で判つたのだが、年老つた虎はゾートフの小屋の方向へ、若い虎はベイダヤンの方へ別れ別れに去つたらしい。

われわれが居ない間に、小屋では椿事が持ち上つてゐた。これは誰も豫期しなかつたことで、流石の密林の古狸バポーシンでさへ、思ひ及ばなかつたことである。



## 山小屋の女

チュマコフ一家の者は、グリゴリー・ゾトフが密林から停車場にやつて来て、賣却するつもりで澤山の獲物を運んだ、といふことを探知して、大膽にも危険なことを企てた。それはかうだ。ナスターシヤを山の小屋から盗み出して、海林驛へ連れて行つて、そこで請負業者のロジノフと無理矢理に結婚式を挙げさせる、といふのである。ゾトフはどうしても五六日町に滞在せねばなるまい、といふことを見込んで、ゾトフが小屋へ歸るまでに、何もかもやり上げてしまふ、といふ肚だつた。そのつもりでヨジノフはいち早く海林へ赴き、エーホ驛から牧師が招かれてゐた。ナスターシヤを連れ出すために、特別仕立の速い楫と、ヨジノフの厩でも選り抜きの逞しい馬が二頭準備された。

この仕事にとり掛つたのは、チュマコフの倅たちと、その飲み仲間の友人二、三だつた。

チュマコフの兄弟は立派な馬に乗つて、アメリカ製の騎銃を携へ、相棒たちはピストルと短

刀で武装した。

出發の用意は極めて秘密の裡に行はれて、連れて行かれる使用人たちすら、本當の目的を知らなかつた。チュマコフの兄弟が自分の使用人や知人に説明してゐた通り、植林の状態調査のために、密林へ遠乗りに出かけるのだ、と思つてゐた。

グリゴリー・ゾトフが町にやつて來た翌日の夜半に、一同は海林を出發した。

グリゴリーの方では、そんなことは夢にも知らず、ナスターシヤに危険など少しもないと思つてゐたので、獲物を賣り急がないでハルピンから來る好い買手を待つてゐたのである。

暇で退屈した彼は、ロシア市場にある安料理店に、ふらりとはひつて、好きな肉入りスープと蕎麥粥を注文した。

彼の逞しい風貌と無遠慮な動作は、すぐ安料理屋の常連の注意を惹いた。服装と獨得の外見で、密林の狩獵家と判つたので、みんなは先を争うて彼に尊敬と喜びを表さうとした。

だが、彼は一顧も興へず、ただ食ふことに餘念がなく、をりをり泡の立つたクワスを飲んでゐた。料理屋の亭主や二三の客に勧められたウオツカは斷つた。彼の頭の中は、自分の愛人ナ

スチヤを残してきた遙か彼方の密林のことで一杯だった。

食事を終へて勘定をすまして、往來へ出たとき、一人のルンベンが彼の傍に近づいて、呂律も廻らぬ口で、かう言つた。

「甚だ、その、不躰ですが、ゾートフさん！ 酒手をちよつぱり恵んで、くれませんか！ その代り、あなたにとつて、大事なことを、お耳に入れますぜ」かう言ひながら、見も知らぬ男は傍に寄つてきて、片手を差し出した。

ゾートフは追つ拂はうとしたが、このルンベンの言ふことを聽いてやれ、といふ心の囁きを聞いた。見ると、両手はぶるぶる顫へ、泪ぐんだ眼は鼠のやうにきよろきよろしてゐた。

ポケットを探つて、半ルーブル銀貨を取り出して「どんなことだね！」と訊ねながら、件の飲んだくれに渡した。

ルンベンは、酒臭い息を吐きかけながら、彼の耳に口を寄せて、嘎れ聲で囁いた。

「ありがたう存じます！ あなたの許嫁の身に、大變な危険が迫つてゐます！ すぐ、これから助けに行かないと、間に合ひますまい！ これ以上は、何も申しません！ 何も訊かないで

下さい。そして、これから、すぐ……」

これだけ言ふと、ルンベンはそばを離れて、群衆に紛れて見えなくなつた。

この言葉に愕然とし惘然となつたゾートフは、はつきりその意味を掴まうとして考へこみ、しばらくは身動きもせず立ちつくした。が間もなく事の真相が讀めて、どつちの方から危険が迫つてゐるのか、それに思ひ當ると、傷ついた獣のやうに、いきなり大きな聲で一ト聲叫んで馬や荷物を預けてある友人の家へ、飛ぶやうに駈け戻つた。

獵銃と彈藥を掴んで、良い方の馬に鞍を置いたゾートフは、馬を門外に曳き出した。そのとき、不意の出發を窓から見た友人は、戸口から出て來てゾートフに聲を掛けた。

「グリゴリー！ 何處へ行くんだ？ 獲物は何うするんだ？」

「何も訊かんでくれ！ 暇が無いんだ！ いづれ後で判る！ 犬を縛りつけて、俺が歸るまで出さないでくれ！ もし俺が歸つて來なかつたら——いいやうにしてくれ！」

後の方の言葉は、一つ處で躍り上つてゐる馬の背に跨がつてから嗷鳴つたのである。

村はづれへ出ると、ゾートフはチュマコフ兄弟の櫓の跡を追うてまつしぐらに山の小屋へ急

いだ。櫓の跡を調べてみて、二頭立の櫓で、その先頭に騎馬の者が二人あつて、櫓には二人乗つてゐる、といふことが判つた。それは、櫓から降りたときの足跡が語つてゐた。

麗かな冬の眞晝であつた。眩いほど白い雪は、太陽の光で銀のやうに輝いてゐた。抑へきれぬ憤怒に驅られた乗り手は、馬の脚がつづく限り容赦なく走らせたのである。

前の晩、密林へ向つて出發したチュマコフ兄弟はどうなつたらうか？

ゾートフの小屋へ行く道筋は、よく判つてゐた。で、日の暮れる頃、目的地に著いて、小屋に近い森で櫓や馬を降りると、番人を一人残し、それから徒歩で進んだ。

チュマコフの兄弟は銃を構へながら、面倒なことが起きないやうにと、背後から小屋に忍び寄つた。ズメイカ（獵犬の名）は身内の者だと知つて、吠えもせず、犬小屋へ戻つて寝てしまつた。

扉を開けて、兄弟は小屋の内へはひつた。その時ナスターシヤはテーブルに向かつて、肌著の破れを繕つてゐたが、兄弟の姿を見ると、咄嗟に不吉なことを感じて、何も言はず、壁に掛

けてあつた獵銃へ飛んで行つた。しかし、それと察した兄弟の一人が逸早く妹を後から抱き止めたので、どうにもならなかつた。もう一人の兄弟は、そのとき、彼女の腕を細引で縛りあげた。彼女は抵抗したが、役に立たず、床の上に轉がされ、赤ン坊のやうに包まれてしまつた。これはみんな無言のうちに行はれた。一味のものは、自分達のやるべきことを知つてゐたので口を利く必要はなかつたのだ。

すつかり仕事が済むと、ナスターシヤは猿轡をはめられて、櫓に積み込まれた。

最初に口を切つたのはナスターシヤだつた。彼女は最悪の事態が身に迫つてゐることを悟つて訊ねた。

「悪黨！ あたしを何處へ拉れて行かうといふんです？ 何故こんな勝手な眞似をするんです？」

「兄の方がこれに答へた。」

「何處へ行くんだか、今に判らあ！ おとなしく言ふことを聽かないから、お前に斷らねえで捕まへた次第さ！ 俺達の意見通りにするぜ！」

彼女はドレス一枚だったし寒さも酷くなつたので、彼はかう言ひながら、毛皮の外套を彼女にかぶせた。

「あんた達は私の兄弟だけだ」とナスターシャは泣き乍ら言つた。

「この裏切りは決して許さないから！ みんな呪はれるがいい！ あたしはね、決してお嫁なんかに行きやしないから、覚えてゐて頂戴！ 相手を見損なつちや困るわよ！ あたしの手が利くやうになつたら、あんた達のうち誰だつて、また、あんた達を買収して自分の魂を悪魔に賣つた悪黨のロジノフを締め殺してやるから！ 今ちやね、あたしはグリゴリーイの妻ですよ。あの人はあたしを誰にも渡しやしないから！ こんな悪事はやめたがいいわ。却て身の破滅だわ。あんた達は、グリゴリーイがどんな人間だか、知つてゐる筈だし、それに非はあんた達の方にあるんだから」

「判つてら。脅かすねえ！」と弟の方が煙草を吹かしながら言ひ返した。「俺達アお前だつてグリシカだつて恐れやしないよ！ お前は彼奴の女房ちやねえ。何もお前を引き止める権利はない筈だ！ 今にお前を結婚させて、お前が人妻になつたら、夫に泣き言を並べるだらうが、

俺達の知つたことちやねえぞ。悪いことは言はないから、強情を張らないで、運命に従ふことだ。力ッて奴が必要だからね！ 小娘の癖に自分勝手に亭主を選ぶ奴が何處にあるか！ 親の決めた通りに従ふもんだ！ なアに、そのうちに良くなつてくらあね！」

ナスターシャは櫓の上に横になつて眼を閉ぢ、迫害者達に一ト言も返事をしなかつた。彼女は、もうかうなつては何を言つても無駄だといふことを知つてゐたし、自分の無力を悟つてゐるからだつた。

お茶を飲み、馬に飼糧をやつたチュマコフ一味は、生きた荷物を積んで、また出發したのである。

彼等が朝鮮松の林を通り抜けて、樅の木や胡桃の木の林で覆はれた海林河の廣い谷に著いた時は、日がつぶり暮れてゐた。遙かに見える背達嶺の頂の上に満月が出て、星屑の散らばつてゐる暗い空に聳えた岩だらけの支脈や、雪に覆はれた野原に、銀色の光を浴びせてゐた。

海林驛までは少くとも四十露里（一露里は九町）はあつた。道が悪かつたので、どうせ著くのは朝になるだらう、とチュマコフ一味は考へる。ある處は雪の山が重なつてゐたり、或る處

は全然雪がなかつたりして、櫓がなかなか滑らなかつた。それに、疲勞した馬は元氣を失つて、やつと脚を動かしてゐた。

チュマコフの兄弟は、道案内しながら、先に立つた。その乗馬は、腹にとどくほどの雪の中に脚を踏み入れて、疲勞のあまり、よろめきながら歩いてゐた。

ナスタシーヤは、櫓の上に仰向けに寝かせられたまま、星空を見てゐた。彼女の想ひは、いとしいグリゴリーが歸つてゐる筈の密林や小屋の上にあつた。彼女は、最後にはグリゴリーに救はれる、といふ希望を失はなかつた。もし救ひ出されないとすれば、どうせ生きては居ないだらうし、自殺するだらう、と彼女は覺悟をきめてゐた。

彼女の兄弟たちは、全く別な考へから、氣が落著かなかつた。この計畫は極秘の裡に運ばれたものの、それでもゾートフの耳に絶對にはひらけないとは、信じ切れなかつたのだ。もし彼が意外に早く氣付いたら、衝突は避けられない。といふことは、破滅を意味する。そこへまた豫期しない故障が起きて暇どつたからだ。どうあつても馬を休ませねばならなかつたのだ。でないと、馬はみんな海林へ著かないうちに斃れてしまふ。

嫌々ながら途中で休息することになつた。

馬はやつと立つてゐるほどで、苦しげに喘いで、今にも倒れさうだつた。寒い風に凍えないやうに、焚火が焚かれた。休息の時間を延ばす必要があつた。月が高く登つた。遠くの方から馬の汗の臭ひを嗅ぎつけて、樂々獲物にありつくものと察した赤狼の吠える聲だけが、密林の静寂を破つて聞えた。

この時分、ゾートフはすでに山の小屋に行き著いたが、自分の住家が滅茶々に壊されてゐるのに吃驚した。戸は蝶番のところから拵ぎとつてあつた。これは櫓を修繕するために板が入用だつたからだ。

ナスタシーヤの姿が見えないので、てつきり連れ出されたに相違ない、と見當をつけた。一刻の猶豫も出来ない。急がねばならぬ。だが、馬をすぐに役立てる譯には行かぬ。やはり休ませねばならなかつた。はて、どうしたものだらう？ ちよつと考へたゾートフは、馬を曳いたまま徒歩で追跡することに肚をきめた。

ゾートフは、半時間ほど馬を休ませて、冷たい水を飲ませてから、櫓の跡を月明りで辿りな

がら、追跡をつづけた。

最初彼は馬の轡を取つてゐたが、その後手綱を長く伸ばして曳いて行つた。すると馬はだんだん後れて道が抄らなくなつた。そこで彼は馬をすつかり放すと、自分の足跡を追うて來させることにして、勝手に先へ歩き出した。忽ち間隔がひろくなつた。取り残された馬は、主人が行つて了ふのを見ると速足で追ひ付く、またのろろ歩いては駈けて行つて追ひ付く、といふ風で、主人の後からついて行つた。

一時間も経つと、馬も十分休息したことと思つて、ゾートフは馬に跨り、満月に照し出されて眼前に擴つてゐる雪溪を透して見ながら、道を急いだ。

海林までは、もう後半分の距離だ。橋の跡は全然新しい。

逃亡者達に追ひ付くのは間もあるまい。

つひに、遠くの方で火がちらつき出した。

「奴らぢやないかな？」グリゴリーはさう思つて馬を速めた。

近づくに従つて火は大きくなり、やがて、焚火とその傍に居る黒い人の群と馬が、はつきり

彼の眼に映つた。もう疑ふ餘地はなかつた。

「まさしく奴らだ」と思はず口に出た。そして彼は、さてこれから何うしようと、思ひ廻らしながら馬を停めた。

相手に氣づかれるといけないので、馬を近くの谷の樹につないで、ゾートフは、疎らな樹々に身を隠しながら、火に近づいた。

焚火に百歩ぐらゐの處まで近づいて、木の蔭から観察し始めた。焚火の側にゐるチュマコフの兄弟の姿や、馬をつけた橋が、はつきりと見えた。外に二つの人影があつたが、何者だか彼は知らなかつた。——ところでナスタシーヤは？ 恐らく縛られて橋の上に寝かされてゐるのだらう。さうでもしなければ連れて來れまい！

その時、谷間の方で馬の嘶きが聞えた。馬が淋しがつて主人を呼んだのだ。

焚火の近くにゐた馬が耳を欬て、同じやうに高々と嘶いた。

チュマコフの兄弟は、飛び上つて銃を握ると耳を澄ました。緊張した静けさが、しばらく續いた。その静けさを破つたのはゾートフの大きな聲で、近くの谷間や山峽に反響がひびき渡つ

た。

「やい、盗人、強盗！ 鐵砲を捨てて、横へ寄れッ！ さもないと、一人残らず皆殺しだぞ！ 俺あ、グリゴリー・ゾートフだ！ 何も言ふこたあねえ！ さつさとしろ！ ぼやぼやしてやがると撃ッ放すぞ」

自分の敵の凄惨な叫びを聞いて、これはとても駄目だと思つたチユマコフの兄弟は、雪の上に鐵砲を投げて馬に飛び乗ると、櫓の側に狼狽した體で両手を上にあげたまま立つてゐる二人の仲間を放つたらかして、海林を指して駆け出した。

ゾートフは隠れ場所から出て、焚火に近づいた。

彼が傍へ寄ると、ナスチャが頭を擡げて叫んだ。

「グリゴリー！ まあ好かつた！ 丁度いい時だつたわ！ でないと、あたし酷い目に遭ふところでした！ 早く解いて。こいつ等が繩で手足を縛つて、動くことも出来やしない！」

「ちよつと待つてゐてくれ！」とグリゴリーは彼女へ返事しておいて、両手をあげた二つの人影に近づいた。「まづ拳銃から頂戴するぞ。それから後のものをそつくり貰はう！」彼はかう

言ひながら見知らぬ男に近づいて、腰にさしてゐたピストルを取り上げた。

ピストルの彈丸を抜き取つて雪の中に投げすて、ピストルは櫓の上に置き、それから鐵砲を拾ひ上げて、同じやうに彈丸を抜きとつた。

それから彼は「やい、ごろつき！」と、罪人のやうな顔付をして立つてゐる見知らぬ男の方へ向き直つた。「命だけは助けてやるから、神に感謝しろ！ 足もとの明るいうちに、さつさと失せろ！ 早く行け！」

脅かしの言葉を二度と繰り返す必要はなかつた。「ごろつき」達は命拾ひして幸せとばかり、何も言はずに 興へられた自由を利用した。二人は忽ち雪の積つた青い溪の中へ消えてしまつた。

「さあ、いよいよ繩を解いてやるよ！」と彼は、縛られたまま待ち切れぬ思ひでじりじりしてゐるナスターシャの傍へ寄つてきて聲をかけた。

彼は繩目を切ると、幸福の餘り氣の狂つたやうになつてゐる彼女を、手早く抱きかかへてしやんと立たせた。

若い二人は抱き合つたまま、幸福のあまりただ咽ぶのみで、しばらく我に返ることが出来なかつた。そして遠くで馬の嘶きが聞えた時、やつと離れた。

「あれはワシカ(馬の名)が呼んでるんだ！ 獨りで淋しいんだらう、可哀さうに、曳つばつて来るからね！」グリゴリーはかういつて馬を連れに行つた。

かういふ風にして、櫓と二頭の良馬が分捕品としてグリゴリーの手にはひつた。

「これ、あたしの嫁入道具よ」とナスチャは焚火の傍で、櫓に残つてゐた食べ物やお茶の用意をしながらいつた。

自分達にとつても馬にとつてもそれ相當な休息をとることに決めて、一ト晩ちゆう焚火の傍で過ごし、やうやく東に空焼けが見えるころ、山の小屋指して歸途についた。

一ト晩ちゆう休息した馬は、威勢のいい馭者、ナスターシャの馴れた手綱捌きのままに、踏み固めた道を元氣よく走つた。

グリゴリーは愛馬ワシカの背にまたがつてゐたが、をりをり立ち停つては、しみじみと愛人に見惚れ、薔薇いろの頬に、幸福があふれてゐるのを認めた。

太陽が明るく輝いた。眩い光が、峻しい坂や山の背を覆うてゐる雪の中で、七色の虹となつて照り返してゐた。

ナスチャとグリゴリーの心は歡びに満たされ、胸は睦ましげに脈搏つた。

二人は、をりをり言葉を交しながら、馬の足を速めた。そして、遙か南の青空に、薄桃色に染まつた巖だらけの大頭頂子の頂が眼にはひると、彼女は、舊い友達に會つたやうに喜んだ。

「あれ、大頭のお婆さんだわ！」ナスチャは、馬を降りて手綱を引いてゐるグリゴリーに追ひ付いて呼んだ。「ねえ、グリーンシャ！」彼と並んで彼女は言葉をつづけた。

「あなたが發砲しないで、血を見ないで済んで、ほんとに宜かつたわ！ 兄達は卑劣な眞似をして、祿でなしだけど、それでも殺されるのを見たかないわ。みんなあの老ぼれの悪黨のロジノフが悪いのよ！ 父さんや母さんをそそのかしたのは、あいつの仕業なの。兄たちは莫迦だから引き受けちまつたんだわ。有難いことに、あたし達の愛は、血に汚されなくてすんだわねえ！」

「さうだ、僕もさう思ふ」グリゴリーは馭者臺の上に彼女と並んで腰かけ、彼女の腰に手を



廻して、かう答へた。「誰一人僕を撃たうと思ひ付かなかつたのがよかつたんだ！ 僕が撃てば射損じはないし、撃ち合ひを始めたら一人も助からないことを、奴等は知つてゐたんだよ。だが、ロジノフの奴にあ、まだ文句があるんだ。どうあつても許しちや置けん！」さう言つてからグリゴリーイは、ナスターシヤを抱き寄せて、接吻した。

ナスターシヤは、やつとの思ひで彼の抱擁から遁れて、相手から離れると、かう叫んだ。

「グリゴリーイ！ 氣でも狂つたの！」

「ほんとだよ。ナスチャ！」と彼は答へて馭者臺を降り、また馬に乗つた。

「僕は君が見つかつたんで、嬉しまぎれに氣が違つたんだよ！ もし奴等が君を連れて行つて、ロジノフと結婚式を挙げでもしたら、僕はね、奴を殺し、それからもう一人誰かをあの世へ送つちまつたかも知れないよ。まつたく危いことを仕出かす奴等だ。計畫が途中でフイになつて、奴等も仕合はせと言ふもんだ！ 僕もこれから氣を付けて、どんな事があつても君を一人残しちやおかんよ！」

「ねえ、あなた！」しばらく黙りこんでゐたナスチャが言葉をつづけた。「悪黨のロジノフに復

讐しないツて、約束して頂戴！ あなたが我慢しきれなくなつて、あのゲジゲジを殺しやしないかツて、それがあたし心配なの！ さうなると、あたし達、永久にお別れよ！ あなただつて唯では濟まない。流刑になるんだわ！ それに、あなたも知つてる通り、あいつは勢力があつてお金持よ。誰だつて買収してあなたを酷い目に遭はすことが出来てよ。それよりか、放つていた方がいいと思ふわ！ あいつだつてもう觀念して、あたしをどうしようツていふ望みを棄ててるだらうし、かなはないと知つて手出しするやうなことはないわ！ あいつ、あなたをよく知つてるし、ことさら衝突するやうな冒険はやらないわ。あいつもさうだけど、みんな評判の臆病者で、いのち惜しさにびくびくしてるのよ。だから、あんなものには、唾でも吐きかけるのよ。臭くなるといけないから、觸らない方がいいわ！」

「君、なかなか旨いことを言ふね」グリゴリーイは手綱を引締めながら返事した。「だがね、その約束は出来ないよ。僕の騎士的義務といふ奴が、復讐でなけりや挨拶をさせるんだ。こんなべら棒な話をこのまま放つて置く手はないよ。勿論無鐵砲な眞似はしやしないさ。君のために慎重にやるがね。ロジノフは身に相當した酬いを受けるだらうよ。僕のことには心配しなかつた

つていい。いくら僕だつて肩の上に頭がのつかつてゐるからね。それも満更低能といふほどでもないさうだから」

こんなことを語りひながら若い二人は、二道海林河の上流、『大林』の樹海の入口にある粗末な山小屋を指して、西へ西へと道を辿つて行つた。

パボーシンと私は大頭頂子の麓のあたりで、北の方へ虎を追ひながら、小屋のある二道海林河の上流にやつてきた。この、南側の山腹にある樫ノ木林に野猪が置いてあるので、虎はそいつを覗つてこの界限に目をつけ、永い間うろろしてゐたものらしい。虎が遠くへ行かないことを知つてゐたので、われわれは一ト先づ小屋へ向つた。一ト休みしたかつたし、心細くなつた食糧を仕入れるつもりもあつたが、それよりも犬を連れて来たかつたのだ。犬が居ないと、どうも巧く行きさうになかつた。しかし、小屋の中にナスターションヤが居ないので、非常に驚いた。小屋の様子や雪の上の足跡を見て、何者か襲撃して女主人をさらつて行つた、といふことが判つた。だが何者だらう？ われわれは散々頭を絞つて考へた擧句、襲撃した奴はまさ

しくロシア人で、ナスターションヤを海林へ連れて行つたに違ひない、といふ結論に達した。しかし、それと同時に、その連中の後を追跡したらしいグリゴリーイの足跡を見つけた。

誰の仕業か、その一部はわれわれにも推量出来た。そして小屋の内に落着いて、次に起る事件を待ち構へてゐた。

「チュマコフの奴等がナスターションヤを連れて行つたに違ひない！」

パボーシンはパイプを吸ひながら獨言のやうに呟いた。

「しかし、結局骨折損だ。グリゴリーイに追ひ付かれて取り返されるからなア。もし追ひ付かなかつたら、さア、事だね！ グリゴリーイはカツとなる性質だから、大變なことになるぜ！ うつかりすると殺人沙汰だぜ！ 無論俺は女のことであつた真似はしないが。しかし、チュマコフは襲撃してグリゴリーイを侮辱したんだからね。これは密林の掟に従ふと、血で洗ひ清めることになつてゐる。チュマコフ一味は氣の毒と思はないさ。あれア人間ぢやない、泥に過ぎんからね。ただ、こんな汚らしい事件に巻き込まれたんぢや、グリゴリーイが可哀さうだ！ 肝腎なのは、何から起つたか、といふことだ！ 女が原因だ！ ちえツ、

女なんさア、失せやがれ、だ！」それから二三、筆にもかけない悪態をついたバポーションは、横を向いて、ベッと唾を吐き、チュマコフが毀した扉の修繕に取りがかった。

「それに、また、何だつて、ドアなんかを、毀したんだらう！」彼は板に釘を打ちつけながら、ぶつぶつ呟いた。「アレキサンダーといふ、傑い奴が、マケドニアに居たが、あいつはドアを毀さなかつた。學者が何かそんなことを言つてるだらう？」

「さうぢやない、違ふよ、アキンチン！」と私が答へた。「アレキサンダー大帝が毀さなかつたツて話は、ドアでなく、椅子のことだよ！」

彼は上眼使ひで私をチラと見たが、狡さうに片目を閉つて言つた。

「ドアであらうと椅子であらうと、同じことぢやないか！ 奴さんは兩方とも毀さなかつたんだからね！」

日が暮れた。太陽はすでに山の端に隠れて、朝鮮松の林には夜の影が立ちこめた。オホミミヅクはその陰氣な歌を唄ひ出した。たらふく茶を飲んで、串焼の猪肉を食べたわれわれが、さて寝ようとしてゐた時、戸外で馬の嘶きと人聲が聞え、ズメイカの嬉しさうな鳴き聲がした。

われわれが半毛皮外套を著終へない時、扉がさつと開いて、嬉しさうに興奮したナスターシヤの姿が、闕の上に現はれた。その眼は燃え、房々とした髪は覆髪頭巾の下から喰み出し、兩頬は紅潮してゐた。

彼女はわれわれには見向きもしないで、聖像の懸つてゐるつき當りの隅へ、眞直ぐ歩み寄り、膝まづくと、祈りに餘念なかつた。三度ほど頷いて、心からなる十字を切ると、彼女は起ちあがつて、かう言ひながら、やつとわれわれの方に近づいた。

「有がたいことに、グリゴリーが命を救つてくれました。まるで、二度この世に生れたやうなものです！ ほんとにあのロジノフつて憫れた悪黨だわ！ 他人に骨折らして旨いことしようと思つたのねえ！ もし、グリゴリーでなかつたら、あたし、身の破滅だつたわ……」それから彼女は、われわれの居ない間に起つたことを掻い摘まんで話した。その間、バポーションは、ちよいちよい話の腰を折つて註釋を加へたり、キツカケを作つたり、ナスチヤの掠奪者達を『下品な』言葉で罵倒したりした。

そのときグリゴリーは馬の始末をしてゐた。凍つた雪の上を踏む馬の蹄の音と嘶きが聞え

てきた。

バボーションはナスチャの話をお終ひまで聴かずに、

「やあ、こいつはどうも。グリゴリーの手傳ひをせすばなるまい！ 可哀さうに、一人で苦勞してゐるわい！」と言ひながら小屋を出て行つた。

私はナスチャと二人だけ残された。竈が冷えて湯沸しが空になつてゐるのに氣付いて、彼女は臺所の世話に取り掛り、夕食の支度を始めた。

「まあ、あたしとしたことが、何だつてお喋りをしたんでせう！」彼女は主婦らしい眼付で臺所の様子を見ながら呟いた。「お話だけちやお腹はふとくならないわねえ！ 寝るまでには何か食べなけや！」

私は別に反對せず、バボーションにつづいて外へ出た。彼はそのとき暗闇の中でパイプを吹かしながら、馬を曳き入れてゐた。

それから一時間も経たぬうちに馬を裸にして納屋に曳き入れ、われわれは小屋の内へはひつた。見ると食卓の上には温かい晚餐が湯氣を立てて、胡椒酒の壺が氣取つてをり、密林の住人

にとつての親友なるブリキの煤けた湯沸しが、竈の上で愉しげに音をたててゐた。

戶外では、眠りについた大地の上に、冷やかな素晴らしい星月夜があつた。

x

翌る日、私はバボーションと二人、事件の二日前に撃ちとめた野猪を運ぼうと、櫓に馬をつけた。目的地に著くまでに、ひどく時間を食つてしまつた。といふのは雪溜りだとか、葡萄、蔦かつらの茂みだとか、倒れた樹だとか、険しい岩だらけの坂だとか、さういふ障碍を突破せねばならなかつたからだ。馬はすつかり疲れて、雪堆が登れなくて、その場にへたばることが間々あつた。するとバボーションが馬を曳き起して、馬と力を合はせてもつと平らな場所へ櫓を曳き出すのだつたが、そんな時も彼は口からパイプを離さず、正體の判らないこの災難の責任者をしきりに罵倒してゐた。

私が手傳つて櫓を動かす氣で曳綱に手をかけると、彼は腹を立てて、森ぢゆう響き渡るほど聲を張りあげて呟鳴つた。

「やい鼻眼鏡！ そんな真似は止せ！ 君は馬ぢやあるまい！ そんなことよりあ、轡を握つ

て馬を曳け、俺が後から押すから！」かう言ひながら彼はその強い肩を當てて、櫓を持ち上げ氣味に押した。そのとき馬は雪堆から這ひあがつて直ぐ離れた。この男の力は馬並で、この男が居なかつたらどうにも仕様がなかつたらう。

正午過ぎ、馬もわれわれも、へとへとになつて、やつと目的の場所まで辿りついたものの、いまましいことには、野猪は影も形もなく、その代り頭蓋骨と蹄だけが残つてゐて、後はみんな虎に食はれてゐた。

掠奪者は二頭——牡虎と牝虎で、まさしく前の晩われわれが大頭頂子から北へ追つたあの虎だつた。

「まつたくいましいけだものだ！」パボーションは帽子を脱いで牡牛のやうな後頭部を掻きながら罵つた。「森中に仔豚が居ない譯でもあるまいに！俺達の猪を食つちまひあがつた！一體何のために俺達は馬もろともにえらい苦勞をして此處まで辿り着いたんだい？よし、待つてろ！只ちや濟まんぞ、やい、王大（虎のこと）神聖扱ひされてるなア、伊達ちやあるましょー」

われわれの馬は恐るべき猛獸が、何處か近くに居るのを嗅ぎつけて落着かなくなり、耳を立てて鼻を鳴らし、胸震ひを始めた。で、馬を落着かせるために、休息場所を變へねばならなくなり、半露里ほど降りた深い低地で、黄色い水に覆はれた氷上噴水のある小川の岸に場所をきめた。ここで大きな焚火を拵へて休息することにし、十分に茶を飲んでから、交替で櫓の上に寝ることにした。

馬も立つたまま眠つたが、をりぞりぶるツと身震ひして、森の繁みの中から聞えてくる物音に耳を欬てた。

「おい、鼻眼鏡、起きろ！」私の耳の上で、パボーションの低いパスが聞えた。「こんな處でぼんやりしてたつて仕方がない！このまま引つ返さう！此處で夜を明かすのは止さう。これ以上どうにも仕様がなからな！馬を小屋へ曳つばつて行つて、身輕になつたところでまた虎を追つかけようぢやないか！奴さんたち、われわれのご馳走にすつかり満腹して、どうせこの邊の山の中で一ト休みしてゐるだらうから」

それから休息してゐる馬を急いで櫓につけ、さつき來たときの櫓の痕跡を辿つて、歸途につ

いた。

馬は勢ひよく走つた。そして、近くの藪で怪しい物音がするたびに、本能的に危険を感じて、耳を立てたり、神経質に身を顛はしたりした。

とある浅い谷まで来ると、突然馬が立ち止つて足踏みをはじめ、いくら吠鳴つても鞭を加へても、頭として動かなかつた。氣がついてみると、虎がこの道を横切つて、その足跡が雪の上に深くはつきりと残つてゐた。一時間前に此處を通過して、その獨得の體臭がまだ空氣の中に残つてゐたらしい。この臭ひが總ての動物に恐怖を起させるのである。

「何でもないよ、何でもないよ。馬鹿だな、大丈夫だよ！」私の友は怯えてゐる馬の背中を手網で叩きながら宥めた。「お前達はもうチュマコフのものぢやない。ゾートフ家のものだ。ピクつくなんてふさはしくないぞ！」

「大丈夫だ。馴れるさ！」バボーションは火の消えたパイプを口から外して、私を振返つた。

「俺のところに馬がゐたがね、こいつは斃された虎に近よつて、隙を覘つては前脚の蹄で蹴飛ばしたものだ。虎の足跡など、ちつとも怖がらん。犬みたいに足跡を嗅いで脚で踏み躪つた

ものだが、それでもたうとう虎にやられてしまつたよ。代馬溝附近で起つた話だが、當時俺はあの邊で獵をやつてゐた。俺は休息場所に馬を残して、手負ひの虎に抜き足差し足近よつて行つたところ、虎の奴、俺を巧く撒いてしまひ、俺の足跡を辿つて休息場所にやつてきて、馬を襲つたもんだ。ところが馬は後脚で蹴ッ飛ばしたんで、虎は仰むけに引つくり返つたよ。それから虎は横ッ腹に飛びついて襟ッ首に喰ひついたんだ。俺はそのときはもう、つい傍まで来てたんで、虎は藪に逃げ込んでしまひ、たうとう追つつけなかつた。だが、夜中にまた候のこのこやつて来たんで、馬の死體の傍で仕留めた譯だが。いや、まつたく、ワーシカ(馬の名)は可哀さうだつたよ！豪膽な馬でね、密林向きの大した奴だつた。ああいふ馬は値段もつけられんぐらゐ貴重なものだ！……しーッ！早く家へ歸らう！歸つたら一服して、主婦さんが一杯つけるだらうぜ！空手で歸るんだから、一杯でもないだらうがなア！」

馬は、バボーションの大きな掛聲を聞くと、吃驚したやうに左右を見廻しながら駆け出した。われわれは寄木細工のやうに滑らかな密林の川、二道海林河の氷上を物凄ひ勢ひで滑つて行つた。

「なあ、おい！君はどう思ふか知らんが、虎ツて奴は、外の獸とは全然違つた、特別なもん

だと思ふなア」急なカーヴに差し掛ると轡が傾くので、強い腕で馬を締めつつパイプを吹かしながら、バボーシンが話を續けた。「支那人が神聖なけだもの『王』と考へてゐるのも無理はないよ！ 勿論虎の身體に偉大な人間の魂が宿つてゐるとは、俺だつて信じちやゐないさ！ こいつは馬鹿げた話だ！ がしかしこのけだものが利口で狡猾だ、といふことあ本當だ。あいつの風貌とか習性とかいふものは、みんなアジア人的なもんだ！ ところで熊だが、こいつはわれわれのけだもの、ロシアのけだものだ。ロシア人はこいつをミハイル・トプツイギンと呼んでゐる！ この熊も虎を好いてゐないし、力のある癖に、虎を恐れてゐる。尤もこの場合、力とは関係のないことで、ミーシカ（熊のユーモラスな呼び方）は虎の利口さと狡さを知つてゐるので、それを恐れてゐるんだ！ 俺は世の中に恐ろしいと思ふものはないし、死を目の前に見たことが一度や二度ぢやない。しかし、虎が尻尾を廻しながら飛び掛かる姿勢を整へて、凝つと此方を見詰める眼差といふものは、魂の途中で沁み通り、心臓を凍らせる。虎の眼の中に、死そのものが見られ、先づ人間の生命は一筋の髪にぶらさがつてゐるやうなものだ！ 倒すか倒されるか、だ！ こいつが俺は堪らなく好きなんだ。自分の生命を賭ける、ほら、賭博で

言ふ、「一六勝負」さ！ 運よく俺は今まで無事に生残つたが、尤も虎の爪が拵へてくれた奮闘の印は持つてゐるがね……」

「ところで、なあおい！」私は相手の言葉を遮切つた。「そんな魅力は何といふかと言ふと、それこそ本當の賭事だよ。つまり君は生れつき、賭博師みたいに、自分の生命を一ト勝負に賭けたがる賭事好きの男だ！ しかしまあ、バボーシン、運よく君は牝虎に出ツ喰はしてゐない。牝虎は君を臍腑ごとく忽ち食つちまふぜ！」

「なあに、牝虎だつて平氣だ！」と狩獵家は大粒の齒並みを見せて反對した。「牝虎を斃したことも一度や二度ぢやない。尤も息の根の止まるやうな平手打ちを喰つたことが、一ぺんあるがね」

「さういふ意味ぢやないよ！」私は答へた。「僕の言ふのは、スカートをはいた牝虎、つまり女のことだよ！」

「案外洒落たことを言ふぜ」友は笑ひながら森ちゆうに響き渡るやうな聲で言つた。「このバボーシカを食つちまふやうな、そんな女はまだ生まれてゐないよ！」

ここでわれわれは話をやめた。といふのは、融けた雪の凍つた急な坂に、櫓が突き當つたので、われわれは降りて、馬の口を執つて引き上げねばならなかつたからだ。

われわれが山小屋に着いた時は、とつぷり日が暮れて、小屋の二つの窓が猛獸の眼のやうに闇の中で輝きながら、われわれに道を指し示してゐた。

われわれの話聲と馬の嘶きを耳にして、グリゴリーが、カンテラを提げて出てきた。

「獵の歸りかい？」小道の曲り角に立つて、爪先上りの足もとを照らしながら呶鳴つた。

「王大と王大の奥方がわれわれの安全に氣を付けてくれて、われわれのご馳走を遠慮なく召し上つたよ！」バボーシンが櫓をおりて、手綱を私に渡しながら答へた。「俺達の猪が、突然失くなつたんだ！ 綺麗に平げちまつて、痕形も残つてない！ まあいい。猪なんか惜しくないさ。その代り、虎はもう、こつちのものだから。腹がくちくなくなつたら遠くへは行かない！ 明日は奴らの追撃！ と出掛けよう！ もう二日ぐらゐは憩んでゐるだらうよ。それも遠方でなく、十露里か、多くて二十露里かな！（註・二里半か五里）牡の方は大物で、十五ブード（註約・七十貫）見當、マダムの方も、似たやうなものだな！ 大した獲物だぜ！」

「いいよ、馬の始末は俺がやるから、君らは小屋へはひつて一服しなよ。くたびれたらう！」

すぐ晩めしにするから。ナスチヤがすっかり支度してる筈だ！」かう言ひながらグリゴリーは馬具を外しに掛つた。私はバボーシンと小屋の中へはひつた。中では、ナスターシヤが晩食の用意をしてゐた。

われわれを見て、彼女は笑ひながら言つた。

「今晚は、獵師さん達！ 獲物を待つてましたわ！ 澤山獲れました？」

「ああ獲れたとも！」バボーシンは食物のはひつたフライパンや皿や果實酒の壺を見やりながら、外套を脱いで、かう返事をした。

「虎が猪を平げちまつたが、明日はわれわれが虎を平げちまふんだよ！ 或るものが或るものを食ふ。その食つた方も今度はもつと強い奴に食はれる、といふ工合に世の中は出来てる！」

われわれだつて何かに食はれてしまふのさ。獸か人間でなけりや、まあ死神かね！ とまあ、言つたやうな譯だ。ところで別嬪さん。あの騒ぎ以來、氣分はどうだね？」

「ええ、別に何とも！」ナスターシヤはカマドの下に薪を入れながら答へた。「ただ手足がね、



縄で縛られてたんで、まだ本當ぢやないんですの！でも、大したことぢやないわ。すぐ癒るわ！」かう言ひながら彼女は戸外へ出て行つた。戸外ではグリゴリーが馬を水飲み場へ曳いて行くところだつた。

元氣のいい二人の話聲が、しばらく続いたが、やがて、グリゴリーは馬に水を飲ませて、納屋の内に閉ぢ込め、愛人と腕を組んで小屋にはひつてきた。

われわれはその様子をしみじみと眺めてゐた！眺めない譯には行かないではないか！青春！健康、力、美といふものが眼の前にあつたのだから！いや、それにもう一つ、愛だ！幸福になるのに、これ以上何が必要であらうか？

夕食のときバボーションは大分飲んだが、酔はなかつた。そして、平生に似合はず、あまり喋らなかつたし、沈み勝ちだつた。われわれの冗談や問ひに對しても、嫌々ながら返事してゐた。どうやら何か心配ごとか、氣の滅入ることがあつたらしい。

話が明日のことに移ると、自分も獵に行く、とグリゴリーが宣言した。すると、少し果實酒を飲みすぎたナスターシャが、みんなにとつては意外だつたが、かう言ひ出した。

「あたしもグリゴリーと一緒に行くわ！行つた方がいいって、心が私に囁いてるわ。昨夜夢見が悪かつたから、グリゴリー一人やりたかないもの。それに、犬がないでせう。犬なしぢや虎狩は危険だわ！だから、あたし、あなたの獵犬になるわよ、グリーンシャ！」かういふと、彼女は愛人の首に飛びついて……同じ言葉を繰り返した。

「ねえ、あたしも行くわ！行くのよ、ねえ！思ひ切らさうたつて、駄目！どつちにしたつて、あなた一人だけやりやしないから！」

「お聞きよ、ナスターシャ！」グリゴリーは彼女を赤ん坊のやうに自分の膝に載せて言つた。「馬鹿なことを言ふもんぢやない！俺は獨りで行くんぢやないぜ、バボーションと一緒にだし、それにズメイカ（註・獵犬の名）も一緒だ。ズメイカは年こそ取つてゐるが、老練だし、何べんも虎狩に行つてゐる。それに、俺は子供ぢやないし、お蔭でたびたび虎を撃ちとつてゐるんだ！」

「いいえ、グリゴリー、いくら言つたつて駄目！」と彼女は彼の力強い胸を身體で押しながらか言ひつづけた。「聞きやしないから！あたしが、かうと決心したら、その通りするんだか

ら！ あたしお側について行くけど、お邪魔はしないわ！ あなた知ってるでせうが、あたし  
これでも西伯利亞ツ子よ。密林をよく知ってるし、射撃だつて出来るわ！」

「ぢや、いいよ！」グリゴリーイは、たうとう折れて答へた。「しかし誰が小屋に残るんだ？  
財産があるぜ。先づ第一に馬だ！」

これには彼女もぐつと詰まつて何と答へていいか判らなかつた。そして當惑した顔付でわれ  
われの方を見詰めたが、返事を求めてゐるらしかつた。

パボーシンは彼女の視線をじつと受けとめて、かたくなに黙り込んだまま、パイプの煙を吐  
いてゐた。やがて返事を促してゐるやうな彼女の視線が、私に向けられた。私はその視線に應  
へるより外に仕方がなかつた。ちよつと考へて、私は言つた。

「好いですよ。ナスターシヤの希望を満足させるために僕が留守番させよう！」

「有難い。恩に著るわ！」彼女はグリゴリーイの膝から飛び降りて手を叩きながら叫んだ。「あ  
たしが、どんなに感謝してるかッて判つてくださつたら！ きつとご恩返しするわ！」

パボーシンは、無言のまま陰氣な顔をしてゐた。ナスチャの質問に對しても、言葉すくなく

返事した。間もなく、われわれは彼に構はずに寝る支度を始めた。ナスターシヤはカマドの傍  
の煖爐の上に場所をとり、われわれは床の上に熊や鹿の皮を敷いた。密林の中は非常に寒くて  
川の氷の割れる音や樹の裂ける響きが聞えたが、小屋の中は暖かかつたので、われわれは何も  
被らなかつた。

寝る前に私はパボーシんと、戸外の空気を吸ひに出たが、折を見て訊ねた。

「パボーシン！ どうしたんだ？ どんな蠅に刺されたんだい？ (註・何を怒ってるんだの  
意)」

パボーシンは、パイプを吸つて臭ひの強い煙を吐きながら答へた。

「今どき蠅が居るかい。面白くないのは、ナスチャだよ。何だつて獵に行くんだ！ 女の出る  
幕ぢやないぢやないか！ グリゴリーイはあの通り、ポロツ切れた！ 女に會つちやぐにやぐ  
にやさ！ どうせ女の氣紛れだらうが、それも事によりけりで、虎は雉と違ふ、利口な獸だ  
ぜ、冗談ぢやない！ ナスターシヤは仕事をぶツ壊すばかりで、何の役にも立たんぜ！ グリ  
ゴリーイもちやんと知つてるんだが、斷れんだ！ 女がはひつてくると物事は駄目になる。」

之は本當だ！ 俺は今まで女と密林にはひつた事はない！ 行くなら行かしたがいいさ。だが俺は別な方面へ行く！」

私は別に反對しなかつた。といふのは、主義から言つても彼と同じ意見だつたし、如何に彼女の好い點を集めても、虎狩に行くといふ決心には賛成出来なかつたからだ。

バボーションは、パイプを吸ひ終へると、拳骨で吸ひカスを叩き出して、小屋の内へ、寢に歸つた。が私はまだ戸外に残つて、幽玄な密林の夜を眺め、無限の廣さの中で無数の星が神祕的に輝いてゐる暗藍色の空に見入つた。遠くの方でコノハズクが啼いた。それに狼の聲が應じた。その甲高い聲が、嚴寒の澄み切つた空氣の中で響いた。

私が小屋にはひつた時は、みんな自分の場所に横はつてゐた。グリゴリーとバボーションは、被物を頭から被つて寢てゐた。ナスチヤは容易ならぬ危険な狩獵を明日に控へて眠れないらしく、蠟燭の燃え残りの明りで、聖書を讀んでゐた。何か重大な時機にさしかかると、彼女はかろするのが常であつた。

バボーションと並んで私は横になつたが、受けた印象が強かつたので、なかなか寢つかれなかつた。そして本の上にかがみこんで苦しい人生の問題を探求してゐるロシア女の眞剣な美しい顔を、夢うつつの間に、眼の前にぼんやり見てゐたのである。

x

朝早く、明けるか明けないうちに、眼が覺めた。その時、もうナスターシヤは朝食の用意を整へて、われわれが身支度した頃は、食卓の上で、熱い茶のはひつたコップや、焼いたばかりのカスタードや、煮た肉などから、湯氣が立ちのぼつてゐた。

「さあ諸君！ 出發の前に先づ元氣をつける必要がある！」グリゴリーが、聖像に十字を切つて、食卓に向ひながら言つた。

二度と繰り返さなくとも好かつた。われわれは勧められなくとも自分のなすべき事はちやんと心得てゐたし、その時マカドの邊りで食器の音をさせながら忙しさにしてゐたナスターシヤの料理に、然るべき注意を拂つてゐたからだつた。

半時間も経つと、狩獵家達は出發の用意が出来た。ナスターシヤは狩獵服を著込んだが、房々とした垂髪を何處にも隠しようがなくて皮帽子の下にはみ出さしてゐた。もしそれがなかつ

たら、少年としか見えなかつたらう。

彼女は興奮してゐたらしく、頭に震へが感じられた。

グリゴリーはその様子を見て訊いてみた。

「いいかね、ナスタシーヤ！ 無理に君を連れて行くツて、誰もいつてないんだぜ！ もしも怯ち氣ついたか、それとも自分の身が保證出来なけりや、——行かない方がいいぜ！ 君がゐなくたつて俺は大丈夫だ！ よく考へたがいい！」

すると、ナスタシーヤはバツと顔をあからめ、眼がきらきら輝いた。そして物問ひたけな眼差でわれわれをちらと見て、かう答へた。

「私が怯ち氣ついたツて、何處から思ひついたんです？ 飛んでもないわ！ 私が興奮してゐるのはね、臆病のせゐぢやなくて、危険な獵にあなたと一緒にけるツていふ嬉しさからです！ アキンチンが私に不満だツてことは知つてます。でも、女だつて男の仕事も出来るツてこと、あたしが證明してみせます！ あたしがこの方の女性觀を屹度變へてみせるわ！ さあ行きませう、愚圖々々しないで！」彼女はかう言つて私の獵銃をとり、彈藥帶を肩にかけて、

戶外へ出た。われわれもそれに續いた。

「取りあへずこの鐵砲を試して見たいわ！」彼女はグリゴリーを顧みて言つた。

「すまないけど、壘を櫓の馭者臺に置いて頂戴！ あたし五十歩離れて撃つてみるわ！」それから五十歩ほど離れて、二連發銃に裝填して射撃の用意をした。

その時グリゴリーは、小屋から空壘を持つてきて、それを頭上に翳したまま、櫓の傍に突立つて動かなかつた。

銃聲が響いて、壘は木ツ葉微塵に飛び散つた。

グリゴリーの手には、壘の頸だけが残つた。彼はその頸を宙に抛り上げて、自分の獵銃でパーンと撃つた。

「ブラヴォー！ ブラヴォー！」パボーシンは自分の毛皮帽を上へ上げてかう叫ぶと、彼女は近づいて行つた。「大した腕だ！ 一流と言つていい！ 女がこんなに巧く撃つてようとは思はなかつた！」

「なるほど考へ違ひしてゐた！ これなら片ツばしから虎が撃てる！」

彼女は彼に一瞥も與へないで、彼が曳いてゐたズメイカを、さり氣ない素振で愛撫した。

82

「あたしの彈丸で手を怪我するんぢやないかッて、心配しなかつた？」彼女は表情に富んだ眼を細めて、グリゴリーに訊いてみた。

「また、そんなことを言ふ！」グリゴリーは、パボーシンからズメイカを受けとりながら答へた。

「俺は君の腕を信じてゐたよ。それに君が當てずっぽうに撃たうとは思はないからね。さ、行かう！　ぐづぐづしてゐても仕方がない！」かう言ふと、彼は犬を曳いてだらだら坂を降つた。ナスターシヤは、黒い皮帽子の下から喰み出した思ひに委せぬ髪を直しながら彼に續いた。

彼女との間に或る間隔を置き、パイプ煙らして、烟の環を背後に残しながら、パボーシンが歩いて行つた。

間もなく彼等の姿は曲り角に隠れた。そして川岸の灌木林と藪の間で、彼等の姿が折々ちらついた。

明るい太陽は、もう森の梢を離れ、金色の光線が小屋の内に射しこみ、窓硝子の氷模様の中

で七色に輝いた。

私は、カマドに薪を一ぱい入れ、湯沸しと菜汁のはひつたフライパンを掛け、毛の深い熊の皮を床に敷いて、ごろりと横になつた。そして間もなく、カマドの火の單調な唄やベーチカの焚口の戸の音を聞いてゐるうちに、眠つてしまつた。

私は長いあひだ眠つたが、獵から歸つて來たパボーシンの胴間聲に起された。パボーシンは二道海林河畔の谷の縁に聳えてゐる禿山で撃ちとめた山羊を背負つてゐた。

「何だつてそんなに早く歸つてきたんだい？」友が冷えきつた手を擦り合せながら小屋にはひつて來たとき、私は訊ねた。「若い連中は、どうしたんだ、何でまた二人をほつたらかしたんだね？」

「俺は一緒に行かない、と君に言つたらう！」パイプに煙草を詰めながらテーブルについて彼は答へた。「女の居るところは、パボーシンの居るところでない！　成程、あの女は射撃は下手ぢやないが、やはり女は女だ！　獸は女を好まない、だから獵が巧く行く筈がない！　俺は丘まで五露里ほど送つてから山の方へ外れ、野山羊、君等の謂ふゴラルを撃つたといふ次第

83

さ。もう一匹獲れるところだつたが、可哀さうで、やめた！ 肉が入用になつたらまた取りに行つてくる。夕方ごろ二人は歸つてくるだらう。野宿はあまり好いもんぢやないからなあ！」

バボーションは、そんなことを語りながら、外套を脱いで、茶を飲み始め、十杯目を空にしてから茶汁とカスタードに取りかかり、半時間の後には、食べ物が何一つ残つてゐなかつた。

物凄いい食慾が満たされると、テキパキ話す元氣がなくなつて、床に敷いた熊の皮の上にごろりとなつた。

古い密林の住人は、すつかり好い氣持になつて、ぶかぶかとパイプから煙の輪を吐きながら何やらぶつぶつ獨り言を言つてゐたが、はつきり聞きとれなかつた。ただ「女」だとか「グリシカ」だとか「虎」だとかいふ言葉が、きれぎれに耳にはひるだけで、これは彼も無意識に呟いてゐたらしかつた。

日が暮れかけてきた。太陽は遠くの山の頂に落ちて、朝鮮松の林の中は影が濃くなつてきた。大頭頂子の頂は赤味を帯びた光に燃え、細いレースのやうな頂の積雪が、暗紫色の空にくつきりと浮き出してゐた。

四邊はしーんとしてゐた。ただ、遠くの方から、丁度荒天の時の海の遠鳴りのやうな、得體の知れぬ響が聞えてくるばかりだつた。これは古い密林が昔ながらの歌を唄つてゐるのであつた。

「バボーションは何處へ行つたのかしら？」二人が朝鮮松の林を抜けて、ハイリンの峻しい斜面を覆うてゐる桤林に出たとき、ナスターションヤが訊ねた。

「判らんよ」グリゴリーイは立ち止つて、かう答へると、嵐で倒れた桤の幹に、腰かけようと勧めた。「一ト足後れたんだらう。ひよつとすると、横道へ折れたのかも知れん。あれはああいふ男だからね？ 他人と一緒に獵に行くのを嫌がるんだ！ 君疲れてるらしいね？ ここで憩んでつたらどうだ？ 俺はズメイカを連れてその邊を偵察してくるから、犬の奴何か嗅ぎつけたとみえ、くんくん鼻を鳴らしてるぜ！」

實際、ズメイカは落着かなくなつて、曳紐をぐいと曳つぱつて、宙を嗅ぎながら、前へ駆け出した。

「俺の口笛を聞いたら、やつておいで、待つてゐるから」かう言ふと、グリゴリーイは犬の後

を追うて間もなく檜の灌木林の中へ姿を消した。

獨り残されたナスターシャは、あたりを見廻して、銃を膝の上に置き、化粧崩れを直し始めた。量の多い彼女の垂髪は、皮帽子の中にはひりきれないで、いつも氣ままにはみ出して、彼女の動作を邪魔した。で半毛皮外套の内側で後に垂らさねばならなくなつた。

密林の中は静かだつた。何處かでエゾヤマドリがびいびい啼いて、氣忙しい啄木鳥が枯木の幹を突ついてゐた。太陽は紺碧の空高く昇り、その明るい光は、敷布のやうな白い雪の上で、虹色にきらきら輝いてゐた。

## 二頭の虎

しばらく休息して、密林の中を苦勞して通り抜けたために亂れた身なりを、きちんと整へたナスターシャは、グリゴリーの合圖を待たずに、彼の後を追うた。

樂に坂道が登れるやうに、彼女は檜の枝の杖を切り取り、それをついて道を急いだ。

合圖を耳にすると、彼女の足は一層速くなつた。間もなく、雪の上に残された何かの足跡の上に踏みこんである『忠實な家來』と彼女の呼んでゐる犬の姿が眼にはひつた。

ズメイカはグリゴリーの傍に居たが、姿全體が興奮と衝動と不安を表はしてゐた。背中の毛並は逆立ち、耳はひつきりなしに動いてゐた。獸を嗅ぎつけて、その足跡の臭ひが、犬の本能と狼の子孫の狩獵情熱を掻き立てたのである。

「二頭の虎の新しい足跡だ！」深い雪にしるされた小徑の上を指して、グリゴリーが言つた。「通つたばかりだ。ひよつとすると一時間かそこいら前だ！俺一人だつたら追跡するんだが、君が居たんちやさういふ譯にも行かぬ。君の身が心配だからな！犬一匹で虎二頭を相手にするのは、ちつと骨だよ！俺一人で行くから、君は谷川の方へ降りてつて、彼處で待つて方がよい。すぐ片付けてくるから。虎は遠くへ行つてない。あの斷崖だ。彼處に晩方まで隠れてるだらう」

「まあ、一體あなたは」彼女は勢こんで答へた。「あなたが虎と闘つてゐる間、のうのうと待つてゐるために、あたしが一緒に來たと思つてらつしやるの？あなたは、あたしといふもの

を好く知らないのね！ どうしても、あたし、一緒について行くわ！」

「ぢや、来るがいいー！」彼はかう言つて、ナスタシーヤを抱いて、バラ色の頬に接吻した。「ただ断つて置くが、俺より先へ出ないやうにしてくれ。離れて、後から来るんだ。でない俺の邪魔になる。君のことを考へてゐると、何か間違ひをやらかして了ふからだよ。いよいよといふ場合でなけりや、撃つちやいけないぜ！」

二人は寄り添うて、お互の眼を見ながら、しばらくは立つたままだつた。何も言ふ必要はなかつた。白髪の捲毛のやうな雪の堆積に覆はれた古い陰氣な密林は、二人を見守りつつ素朴な山の歌を靜かに唄つてゐた。明るい太陽は、水晶のやうに澄み切つた嚴寒の空氣の中で輝きながら、黄金色の光を雪に投げてゐた。

「澤山だわ！ もう行かなきゃー！ まあ、あなた！」彼女はグリゴリーイの抱擁を逃れてかう言ふと、主人達のやる事が理解できず、訝しさうに見上げてゐるズメイカの頭を撫でた。

「さ、出掛けようー！」グリゴリーイも彼女につづいてかう言ふと、銃を肩にかけ、猛獸の足跡を辿つて坂を登りはじめた。

解き放されたズメイカは、前へ駆け出して草叢に隠れた。グリゴリーイとナスタシーヤは、虎が隠れてゐると思はれる前方の斷崖を見ながら犬の後からゆつくりと深い雪の中を歩いて行つた。猛獸の方は斷崖にじつとしてはゐなかつた。斷崖の草叢に一寸と寝てから、松林に出てきて寢場所を探したが、恰好な場所が見つからなかつたので、近くの山へ登つて行つたのである。ズメイカは、森の物音に用心深く鋭く耳を澄まし、冷めたい空氣を嗅ぎながら、何處までも虎の足跡を跟けて行つた。

一時間もたつと、ズメイカが心配さうな顔付で引返してきた。そして尾をふりながら笑顔をを見せて、跟いてこいといふ素振をした。

「虎が隠れてゐたんだー！」グリゴリーイは利口な犬の頭を撫でながら言つた。「ズメイカはそれを知らせに來たんだ。これからわれわれを案内するだらうから、跟いて行かう。ぐづぐづしちやをれんぞー！」彼はかう言ひながら、いつでも撃てるやうに銃を構へて、犬の後から進んだ。

犬は用心深く足跡をつけながら、曲り角で後を振り返つたり立ち止つたりした。

松林を抜けると、白樺と樺の茂つてゐる険しい山になる。



山の背の胡桃林でズメイカは立ち止り、注意深くグリゴリーイを見てから、ゆつくりと足跡を跟けた。

グリゴリーイはナスチャを振り返つて、彼女の決意を確かめると、犬を追うて、草藪の中へかくれた。

彼女は彼に後れなかつた。虎が隠れてゐると彼に言はれた場所から眼を離さず、銃を構へながら進んだ。

小丘を登りきると、グリゴリーイは立ち止つた。ズメイカは立つたまま身動きもせず前方を見つめた。全身が顫へ、背中の毛は逆立ち、齒ががたがた鳴つて、極度の不安と興奮を表はしてゐた。

密林は、明るい眞晝の陽の光を浴びて静まり返り、その静寂を破る物音は一つもなかつた。

虎は間近にゐた。グリゴリーイは、犬の素振り、長い間の経験で鍛へられた感で悟つたのだ。

猛獣は、隠れて、彼の動作を見守つてゐた。

「ズメイカ！ 前へ！」グリゴリーイは片手を犬に觸れて、小聲で言つた。

犬は物言ひたげに彼の顔を見たが、五六歩いて、また立ち止つた。

この時、何處か近くで木の枝がぽきッと折れる音がした。で、その方を振り向くと、地べたに伏して跳躍の姿勢をとつてゐる牡虎の頭が彼の眼にはひつた。牡虎の大きな圓い二つの眼は人間に催眠術をかけた。

切端つまつた危機一髪の瞬間だつた。

グリゴリーイは銃をあげて曳金を引いた。鞭で叩くやうな乾いた銃聲が響いて、森ちゆううに反響した。

頭に致命傷を受けた牡虎は、その巨大な背丈一ぱいに後脚で立ち上つた、と思ふと、ぱつたり雪の上に引くり返つて、身震ひしたり、呻めきを洩らしたりした。

ナスターシャは二歩ほど離れて彼の後に立つて、發砲の用意をしてゐた。

そのとき、ズメイカが吠えながら藪の中へ飛び込んだ。そこには、横合ひからグリゴリーイに飛び掛らうとして、牝虎が腹匍ひになつてゐた。

ズメイカは牝虎の注意を外らさうとした。しかし牝虎は、弾力のある逞しい全身の肉を鋼鐵の塊りのやうに締め、今にも跳躍するばかりのところだつた。

グリゴリーイはこれに気が付かず、倒れた牝虎にばかり氣を取られてゐた。死にかかつてゐる虎でも危険な場合があるからだ。

ナスターシヤは警告しようとして、

「グリゴリーイ！ 牝虎が横から！」と叫んだ。

しかし、この警告は彼に取つて運命的なものだつた。といふのは、彼はナスターシヤに危険が迫つたのかと思つて、振り返つたからである。丁度その瞬間、牝虎がその重い全身をもつて彼の頭上に崩れかかつた。そして自分の身體で彼を押しつぶして、鋭く曲つた七首のやうな爪を持つ強い脚で、恐るべき打撃を加へ始めたのである。

猛獸の下敷になつたグリゴリーイは、頭を敲られては助からないと悟つて、両手で頭を防がうと懸命だつた。

ズメイカが最初に、主人を救ひ出さうと飛び出して、虎の尻尾に噛みつき、引き離さうとしたが、結局駄目だつた。牝虎は尻尾を左右に振り廻して犬を跳ね飛ばしてしまひ、血みどろの制裁をつづけた。

ハツと我に返つて、遁れられぬ彼の死を見たナスターシヤは、虎のすぐ側まで近寄ると、廣い虎の額に銃口を向けて、曳金を曳いた。銃聲が響いた。が、弾丸は頭に當らず、頸に當つて氣管を碎いた。

新しい敵が眼の前に出現したのを見て、牝虎はこれを一撃の下に倒した。だが、自分もまた最初の犠牲者の上に、どうと倒れた。

その一撃を胸に受けたナスターシヤは、意識を失つてグリゴリーイの傍の雪の上にはつたり倒れた。

彼女が意識を取り戻すまでに、長い時間が経つた。彼女が我に返つたのは、ズメイカの愛撫のお蔭だつた。ズメイカは、自分の主人達が寝たきり動かないのを見て、良くない事があつたなと感じ、傍へ這ひ寄つて、眼を覺ますまで彼女の顔を舌で舐めてゐたのだつた。

「あ、ズメイカ、お前か！」彼女は叫んで犬の頭を撫でた。

「だけど、グリゴリーイは？……」その時、これは夢でなくて、悪夢のやうな現実であることがやうやく判つた。

やつとの思ひで立ち上つて、烈しく胸が痛むのも構はず、彼女はグリゴリーイに近寄つた。グリゴリーイは、雪と胡桃の枝に埋まり、その上に牝虎の死體が横はつてゐた。

彼女は渾身の力を絞つて、巨大な猛獸の身體を脇へ曳きすつて、雪に埋まつた彼の身體を引き出しにかかつた。

彼の顔は死人のやうに青褪め、すたすたに破れた半シユーバは血に浸つてをり、生きてゐる兆候が少しも認められないので、彼女は、彼が生きてゐようとは期待しなかつた。

彼女は彼の胸に耳を押しつけて、弱々しい心臓の鼓動を聴きとつた。生命を取り留める應急手當を施さねばならなかつた。虎の爪で受けた傷口は深く、出血が多かつた。身體の下になつてゐたところの雪は、血で眞赤に染まつてゐた。

彼女は咄嗟の思案で、上衣をかなぐり捨ててシャツを脱ぐと、それを引き裂いて繃帯を作り、胸や腕の傷口を出来るかぎり巻いてやつた。

グリゴリーイはなかなか意識を回復しなかつた。だが、彼女を狂喜させたことには、つひに眼が開いた。が、まだ意識が朦朧としてゐて、瑠璃色の空をぼんやり眺めてゐた。空には、夕陽に照らされて淡紅色を帯びた青白い雲が動いてゐた。

グリゴリーイの傍に膝をついてゐたナスタシーヤは、彼の眼を凝つと見てゐたが、悲しみと喜びの涙が、青褪めた彼女の兩頬をつたうて流れた。

「グリゴリーイ！」彼の青白い額に片手を置いて彼女は低い聲で言つた。「あたしの聲が判る？ あたしおそばにゐるんですよ！」

「ナスチャ！」傷ついた男は彼女に頭を向けて、聞き取れない位の聲を出した。「俺は、牝虎のために酷い怪我をして、血を澤山失くした。夜明けまでは、とても持つまい。今、夕方で、もう晩い！俺を此處に残して、小屋へ歸つてくれ。俺はどうせ死ぬんだから、もし君が、俺と一緒に残つてゐたら、凍え死んで了ふ。小屋は遠い。夜中までには、小屋に著くから、夜が明けてから、此處にやつて来て俺と虎を運んでくれ。バボーシンは、お前を見捨てやしない。あいつは俺の親友だから！」

「まあ、何んてことおつしやるんです！ あなたを獨り森の中に置いて行けると思つてらつしやるの？ あたしはあなたを、どんなことをしても小屋まで運ぶか、でなければ、と一緒に死にます！」彼女は愛人の頭を抱へて、かう答へた。

「それはいけない、ナスチャ！ 俺を運ぶには及ばない！ それより君の身が大事だ。俺の運命はもう極まつてゐる……」

それから、グリゴリーは謔言を言ひはじめた。彼女は熱い彼の頭に絶えず雪を載せた。をりをり彼は我に返つて、家へ歸るやうに勧めたが、彼女は返事する代りに思ひ迫つた接吻をするのだつた。

さうかうするうちに、暗い密林の夜がきた。寝る處を考へねばならなかつた。でないと烈しい寒さで二人とも凍死する惧れがあつた。

彼女は、周圍に大きな焚火を起し、非常に骨を折つて、やつと虎の死體を焚火の傍らまで曳きすつてきて、羽蒲團みたいに、その温いけだものの死體の上に、グリゴリーを寝かせてから、食べ物と茶の支度にかかつた。

グリゴリーは食べ物を斷つて、茶をくれと頼んだ。ひどく咽喉が渴いてゐたのだ。それから彼女は、子供のやうに彼の頭を自分の膝にのせて、一ト晩ちゆう茶を飲ませてゐた。

十二月の夜は果もなく長かつた。彼女は愛人の生命をつなぎ留める希望をすつかり失つてしまつた。彼を温めてやらうとして自分の毛皮外套を上からかけてやつたり、彼が震へてゐるのを見て息を吐きかけたり、自分の肌を押しあてたりして温めてやつた。彼女は薄いフランネルの上衣一枚きりだつたが、愛人の命を救ひたさの一念で寒さも感じなかつたのである。

ズメイカは、事の様子を知つてか、グリゴリーの足もとに横はつてその足を自分の身體で温めてゐた。

眞夜中過ぎ、月が出て、青白く森を照らした。

一刻も猶豫は出来ない。一秒一秒が貴重なのを知つてゐたナスターシャは、怪我人を背負うて運ぼうと決心した、が、それには綱引が要る。彼女は咄嗟に思案して、自分の房々とした垂髪を剪ると、それで丈夫な眞田紐を編み、紐を赤ン坊のやうに彼の身體に掛け、背負つて運び始めたのである。

グリゴリーは意識不明だったので、自分の生命をつなぎ留めるために、どれだけの價が支拂はれたのか知らなかつた。

彼女は護身用として銃を持つた。それがため、何しろグリゴリーが人並優れた脊丈で體重があるし、合はせて六ブード（約二十六貫）といふ力不相應の重さのものを運ばねばならなくなつた。

彼女は信じられぬほどの困難に打ち克たねばならなかつた。それに、背負うてゐたグリゴリーの兩足が雪の上に溝を作つて、働きの邪魔になつた。二百歩も歩くと、彼女は立ち停まつた。自分も一息つき、怪我人を休ませるためだつた。といふのは、運ばれることが怪我人にとつては非常な苦痛だつたからだ。そして、何べんも繻帯を結び直さねばならなかつた。繻帯が緩んで、傷口が露き出しになり、また血が流れはじめ、怪我人が苦しさのあまり呻き出すからだつた。

とりわけ困難だつたのは、峻しい山の背を越えることで、深い雪に全身が埋まつたり、岩や倒れた木を攀ち登つたり、深い野葡萄の藪をくぐり抜けたりしなければならなかつた。

見る見るうちに、彼女の力は失はれて行つたが、大事な人の生命がこれにかかつてゐるのだといふことが念頭にあつて、極度に意志を緊張させて、最後の力をふり絞つたのである。

が、いづれこの力は長く續かない、といふことを感じて、悲しい結果と、人里離れた密林の雪の中に於ける免れがたい二人の死を、豫想してゐたのだつた。

山の背まで來ると、すつかり力が盡きてしまつた。そこで、大事な荷物を雪の上におろして息をついてゐるとき、神に救ひを求める氣になり、膝まづいて、どうぞ神様、お恵みとお救ひを與へて下さいまし、と心から祈つた。彼女の双の眼から、怪我人の血と混り合つた涙が流れて、火照つた頬をつたうた。

祈りで元氣づいた彼女は、身體を起すと、新しい不可思議なエネルギーをもつて、大事な荷物を再び擔いだ。

ズメイカは頸垂れながら、彼女の後に従つた。犬はこの苦難な状態をよく理解して、己れの無力を悟つてゐた。ナスターシャはさかしげな犬の眼の中に、悲しみと不安を見た。

彼女が最後の山の背を越して、やつとの思ひで深い雪溪に降りた時は、もうすでに太陽が出

かかつてゐた。ここから小屋までは五露里（註・一里九町）もない。だが彼女の力はまったく盡きはてて、疲労困憊の極、意志の力も失くなってしまった。そこで、グリゴリーを注意深く雪の上におろして、血の氣が失せて青褪めた彼の唇に接吻すると、動かなくなつたその身體を抱くやうにして、彼女は雪の上に並んで横はつた。

太陽は明るくなつた。密林は、寂として音もなかつた。

ところが、ズメイカがそわそわし出したと思ふと、ガバと身を起して吠え出した。近くの藪の中から赤狼が現れたからである。

狼の群は、容易に手に入る獲物を嗅ぎつけて、ナスターシヤの背後をすつと跟けて來たもの、生きてゐる人間に飛び掛る決心がつかなくなつたのだ。それが今、二人とも死にかけてゐて抵抗する力がなくなつた、と信じたのである。

狼に似た犬が、飢えた狼の群の食慾をいやが上にそそつて性來の臆病さを取り除いた。狼は約二十四匹だつた。

狼群は人間をぐるりと取巻いて、約五十歩ほどのところに坐つて、リーダー格の狼の襲撃合

圖を、今か今かと待つてゐた。

リーダーは、人間がまだ生きてゐて戦闘力を失つてゐないことを知つてゐたので、躊躇してゐた。

手持無沙汰で痺れを切らして、狼群は唸りはじめた。最初はてんでに唸つてゐたが、やがて一齊に唸り出して、リーダー格の年取つた牝狼が、その音頭をとつた。

この唸り聲に、附近の森から鴉が飛び立つて、近くの樹々に羽を休め、生々しいと馳走にありつく番が廻つてくるのを待つてゐた。鴉の啼聲が狼の唸り聲につづいた。これらの聲が密林の谷間の静寂を破つて、遠くの方へ響いていつた。

x

熟睡してすつかり骨休めした私とバボーシンは、夕方ごろ『お天氣を見るべく』戸外に出た。そして、近くの丘で吠える狼の聲を耳にして、萬一の用心に銃を執つて、様子を確めに出かけた。狼は晝間滅多に吠えないものである。

「なあおい！」友は私を顧みた。「野郎共の吠えてゐるのは、只ごとちやない！何かあるんだ

ぜ！死體か、獲物かだ。おや、何かけだものが走ってくるぜ、狼のやうでもあり、犬のやうでもあり！や、ありあズメイカだ！犬が主人の傍を離れる以上、好い事ぢやないぞ！」

バボーションの指す方を見ると、なるほど草叢を越して全速力で走ってくるズメイカの姿が、眼にはひつた。

われわれを見ると、犬は、自分に躓いて来てくれ、といふ素振で、いま来た道を取つてかへした。

ズメイカの後を追うて低い山の背を越えると、谷へくだつた。狼の聲はだんだん高くなつた。鴉の啼聲が聞えた。間もなく、雪の上の黒いものに近寄つて行く狼の群を認めた。

われわれが近づくと、狼は吠えるのを止めて、附近の雪溜りで暗くなつてゐる松林の裾の方へ、じりじりと退却しはじめた。ズメイカはすでに現場にあつて、嬉しさうに吠えながらわれわれを待ち受けてゐた。鴉はぱつと飛び立つて、けたたましく啼きながら、森の上を舞うた。

近づいてみて、われわれは豫感が的中したのを感じた。グリゴリーとナスターシャが、生きてゐる氣色も見えず、雪の上に並んで横はつてゐた。

バボーションが先つナスターシャの傍に寄つて手を執つた。

「生きてる！まだ息がある」手を離して、訊ねるやうな眼付で私を見ながら言つた。

その時、私はグリゴリーの脈をとり、臉を開けてみた。

「悪い！」彼の胸に耳をつけて心臓の音を聞いて、私は答へた。

「脈搏はあるかなし、呼吸は微弱だ！二人とも直ぐ應急手当をしなければ！」

雪で頸顚を擦つてゐると、ナスターシャは間もなく氣がついたが、ひどく弱つてゐて口も利けなかつた。ただ、グリゴリーの手当を頼むかのやうに、眼を彼の方へ動かしてゐるだけだつた。

グリゴリーの意識を回復させることは、われわれには出来なかつた。しかし、頸顚を雪で擦つてゐるうちに、いくらか脈搏が強くなり、呼吸がはつきりしてきた。彼は呻いて、ぶるぶる震へてゐたが、悪感に襲はれてゐたらしい。

「君！」バボーションは私の方を向いた。「君は此處に居てくれ。俺はすぐ小屋へ飛んでつて馬をつれてくる！すぐ家へ連れて行かないと、これア駄目だ！」

私の返事も待たないで、彼は飛び出したが、すぐ姿が見えなくなつた。

大きな焚火を起して、私はグリゴリーとナスタシーヤを火の傍に運んだ。氣持のいい暖かさのお蔭で、二人はだんだんと意識を取り戻してきた。

グリゴリーの口から出た最初の言葉は「水」といふ言葉だったが、手許に水がなかつたので、一滴の水も飲ませることが出来なかつた。で、雪で我慢してもらつて、彼はその雪を食うやうに呑みこんだ。

間もなく彼女はすつかり我に返つて、起き上らうと頑張つたが、つひに力及ばず、また雪の上にはつたり倒れた。

「情ないわー 立つことが出来ないー 身體ちゆうが痛くて、胸が、ナイフを突き刺すやうですわ」彼女は弱々しい聲でかう言つた。すると、青ざめた頬を大きな涙が流れた。

「グリゴリーは、どう？」ちよつと黙つてゐた彼女が訊ねた。「あの人のことが心配です！ 出血が多かつたので死ぬかも知れないわー その時は、あたしも死にます！ あの人は生きて行く氣がしません」

「興奮しちや駄目ですよ、ナスタシーヤー」

雪の塊を彼女に渡しながら私は言つた。彼女はその雪を、いかにも満足さうに呑みこんだ。

「大丈夫、グリゴリーは助かります。何もかも巧く行きますよー 今は何も考へないことです。あなたの代りに、他の人達が考へてくれます」

彼女は横はつたまま眼を閉じた。眠つてゐるな、と思つた私は、ソツとしておいた。

何處かで狼の聲がした。獲物のことがまだ思ひ切れないうで、その邊をうろろしてゐただ。

二時間ぐらゐると、バポーションが櫓を曳いて戻つてきた。そこでわれわれは二人の怪我人を櫓にのせ、小屋へ向つて出發した。張り切つた馬は元氣よく疾走して、三十分も経つと小屋に著いた。

グリゴリーの容器が重いので、小屋で煖めて一服したら、二人を横道河子驛へ運ぶことに話をきめた。ナスタシーヤは肋骨を二本折つただけで傷は軽かつたが、極度の疲労のために日頃丈夫な身體も減茶減茶になつてゐるので、身體全體の様子が、やはり危険を思はせた。起ち



上つて歩いてみたが、やつと立つてゐられるぐらゐだつた。

グリゴリーは、つひに意識を回復せず、昏々と眠つてゐた。熱が酷かつたので、破傷風になるのではないかと、われわれはあやぶんだ。

「ナスターシャ！ 君の垂髪は何處へやつたんだ？」とバポーションがコーヒー皿を手に持ち添へて茶を飲ませながら訊ねた。彼女は力がなくてコップを手に持てなかつたのである。

「紐がなかつたので、髪を剪つて、それで紐を編んで、グリゴリーをくくりつけたんです！ さもなきや、運ぶことが出来なかつたでせうよ！ それア大きくツて重いんですもの！ もしあたしの垂髪がなかつたら——二人ともあれツきりだつたでせうよ」彼女は顔を赧らめながら頬笑むで答へた。

「で、これから髪なしで、どうする？ いつそ斷髮娘になるか？」バポーションは彼女の悲しみを紛らはせようとして、冗談を言つた。

「まあ、あんなことを！」彼女はいよいよ赧くなつて答へた。「グリゴリーの命を救ふためなら、髪だけでなく、身體全體捨てますわ！ この先、生きられたら新しく生えますもの。その

方が結構ですわ！……ですけど、どうお思ひになつて？ アキンチン・ステパームイチ。グリ

ゴリーは助かります？ ほんたうの事をおつしやつて！ 好い加減のことを言はないで」

突然彼女は彼の手を握つて、試めすやうな眼差で凝つと見詰めながら訊ねた。恐らく彼女の頭の中にあつたのはこの想念だけで、それ以外のことはすべて、彼女にとつて、存在しなかつたことは明らかである。

「なアに、勿論助かるとも！」バポーションは、熊のやうな掌を彼女の頭において、斷言した。

「グリゴリーみたいな男が、さう易々と參るものか！ 牝虎が一撃で殺せなかつた以上、助かるさ！ あいつは元氣な男だ。引ツ掻き傷ぐらゐで死んで堪るかい！」

彼女はさも満足さうにそれを聽いてゐたが、安心して眼を閉じた。すると、長い睫毛に大粒の涙が光つた。

もう夜になつてはゐたが、グリゴリーの容體が危険だつたので、夜の明けのを待たずに、怪我人を停車場へ運ぶことに決めた。

われわれは、二人を櫓にのせて毛皮で包み、馬を櫓につけた。

バボーションが馭者臺に坐つた。そして、萬一の用心に装填した鐵砲を傍に置いた。

「ちや氣をつけて、な！」と私は叫んだ。張り切つた馬に曳かれた櫓は、踏みならした麓の山道を亡つて、やがて曲り角で見えなくなつた。

馬を驅り立ててゐるバボーションの聲が、夜の静けさの中で、時たま聞えたが、やがてひっそりとなつた。

空は雨雲に覆はれて、荒れた海のやうに、密林は風に騒いだ。すこし暖かになつた中空に、雪屑がちらついた。

「吹雪になるかなー」小屋の戸をびつたり閉めながら、私は思つた。

「何とかして停車場へ著くだらうなア！」

獨りになると、私は、時間潰しのつもりで炊事にとり掛つた。それにはカマドを焚きつけ、水のはひつた湯沸しを掛け、猪の肉を切つて鍋に入れねばならなかつた。

一時間の後にはすつかり支度が出来て、たらふく晩めしを食べた。それから寢臺にごろりとなつて、空想や追憶に耽つた。

ナスターシヤの行爲は、まづたく英雄的なものであつて、ロシアの女性にはどんなことが出来るか、彼女等の本質がどんなものであるかを示してゐる、と思つた。

女性のヒロイズムと自己犠牲の實例は、史上少くはないが、自分の愛人を救ふために、己れの生命を賭けたナスターシヤの行爲ほど強烈な印象を與へたものは、ただの一つもない。彼女は死の危険を冒して彼の生命を救ひ、その後弱り切つた自分の肩に彼を背負つて、困難さから言へば、巨人にとつてすら容易ならぬ十五露里の道程を辿り辿つて、密林からやつてきたのである！

この行爲は、肉體的には弱いが精神的に強い女に、どんなことが出来るか、といふことを示してゐる！

そのとき私は、何處かで讀んだ次ぎのやうなことを、ふつと憶ひ出した。それは、ずつと昔の話だが、或る富裕な人口の多い都が包圍されて、勝利者が「男子は全部殺すが、女は自分の大切なものを皆持つて都を出て行くことを許す」と宣言した。ところがどうだらう！ 女達は自分の夫や父や兄弟を背負つて都を出て行つたといふのである！ 昔の女性のヒロイズムのこ

の歴史的事実は、女性の愛と自己犠牲の標本として人類の記憶に残つてゐるのだが、しかし、虎の爪から夫を救つたばかりでなく、自分の肩に背負うて密林から運び出し、その際、自分の大切な髪を犠牲にし、極度の疲労で生命を失ふ危険を冒したナスターシャの行爲とは比較にならない。

彼女は出發する前に、悲惨な虎狩のいきさつや、傷ついたグリゴリーをどうして曳つばつて來たか、われわれにかいつまんで話した。

私の賞め言葉は不適當で貧弱だと思つたので、その時私は黙つてゐたが、バポーシンはたまりかねて言ひ切つた。

「ナスターシャ、君は女ぢやあるが、立派な、本當の英雄だといふ事が、今こそ、判つた！ どんないかに、情ないかな、われわれ男の中にも女に劣るのがゐるからなア！ なに、心配しなさんな、大丈夫。身體がすつかり快くなつたら、俺を教父にしろよ！ 赤くならなくたツて好いさ、別嬪さん！ それが物の順序といふもんだ！」

いま、これらの言葉が憶ひ出され、ナスチャの面影が輝かしく目前に浮かんだ。わが友バポーシシが輕蔑を含めて呼んでゐる「をんな」とは全然違ふ、と思はれた。

私は、うとうとしながら、煙突に當る風の唸りを聞いてゐたが、ひよつとすると、獲物を嗅ぎつけた赤狼の吠える聲だつたかも知れない。

密林はさわめてゐた。吹雪は酷くなつていつた。床の下やペーチカの裏で鼠が嚙ちり、頭の眞上で、油蟲がさわさわ音を立ててゐた。

x

ゾートフの小屋で、私は二日ほど獨りで暮さねばならなかつた。で、無聊のあまりズメイカを連れて、その邊を歩き廻つた。ズメイカは私を相手に隠れん坊をするのだつた。ある時、ズメイカが小屋のつひ傍まで牡鹿を追つて來たことがあるが、私はまったく偶然に、川の氷上でこれを殺した。それはかういふ譯だ。

人間の住家を見て、鹿は引返して、川の氷上へ走つた。ところが氷に滑つて倒れる拍子に、前脚を折つてしまつた。ズメイカは吠えながら鹿を追つた。私はその吠える聲を聞いて戸外に

出てみると、可哀さうな光景が眼にはひつた。寄木細工の廊下のやうに滑々した氷の上で、脚を折つた鹿が、何とかして起き上らうと藻掻いてゐた。脚が左右に滑つて足掛りがなく、突張れないのだ。

鹿は私を見ると、一層狼狽したが、駄目だと感じてか、横向きに寝たまま呻めいた。私が傍に寄ると、枝のある角で飾られた頭をあげて、私を見た。私はその眼差をまだ忘れることが出来ない。その眼の中には、動物的恐怖の外に、祈りと哀願があつた。鹿は、私が耳を覗つて銃の曳金を曳くまでながい間私を見てゐた。

可哀さうだつたが、外に方法がなかつた。何しろ脚を折つたのでは、晩までは生きられないのだ。狼の餌食にきまつてゐたからだ。

私は鹿の皮を剥いで、胴體を幾つにも切斷して、みんな小屋の物置へ運んだ。この物置には、食糧に當ててある獲物が、しまひ込んであつた。

その晩、眞夜中ごろである。私は、ズメイカの物狂はしい吠え聲と、不安さうなグリゴリーの乗馬の嘶きに眼を覺ました。そこで銃を執り、半シューバを引つけて戸外へ出てみた。

ズメイカは物置の蔭にかくれて、そこから吠えてゐた。私が呼ぶと、すぐ駆けてきたが、それから何ものかを追うて向ふへ走つて行つた。犬の後に蹤いて行くと、川へ降りる斜傾のほとりに、毛深くて長い尻尾をもつた大きな野獣の姿が見えた。これは豹であつた。犬が傍まで來るのを待つて飛びかかる構へをしてゐたが、ズメイカは遠くの方から吠えてゐた。

私の撃つた弾丸は外れた。豹は飛びあがつて逃げた。初め急ぎ足だつたが、中途から疾走して川岸の灌木の藪へ逃げ込んだ。私は出鱈目に撃つた。といふのは、突然のことで、眼鏡を掛けるのを忘れたため、さつぱり覗ひがつかなかつたからだ。

翌る朝、豹の足跡を調べると、ズメイカを襲ふ肚だつたことが判つた。これが失敗して、次に馬を襲はうとしたが、これも同じ結果に終つたのだ。

三日目の正午前になつて、やつとパボーションが、グリゴリーの二頭の馬で、横道河子から戻つてきた。この馬は、獲物を積んだ最後の馬として残されてゐたのである。

「ところで、鼻眼鏡！ 腹がべこべこなんだ！ 朝から何も食はずさ！ 有リツたけのものを、食卓へ運び出してくれ、みんな食つちまうから！」彼は馬具を外してパイプを吸ひながら、私、

の顔を見るなり、かう聲をかけた。

半時間の後、われわれは食卓につき、のんびり話しながら、並べられた料理を、片つばしから平げていった。

バボーションはウオツカを五六杯引つけて、満足さうに吐息してかう言ひ出した。

「さて、これで君の好奇心を満たし、順序を追うて最初から話すことが出来るぜ。だが、いいか、話の最中に口を入れないでくれ。話がこんがらかつて間違ふといけないから！ 俺達は恙なく驛に到着した。著く前に酷い吹雪になつてね。グリゴリーが凍えるのを心配して、ナスチャは、奴を自分の膝にのつけて温めたんだか、接吻で温めたか何で温めたか、よくは判らん。著いたのは朝で、すぐ病院へ運んだが、助手の野郎、一般の患者は引受けんと言ひやる。そんな奴は相手にしないで、グリゴリーを抱きかかへて病室へ運び、空いてゐる寝臺の上に寝せつけたんだ。野郎、悪口を言ひ始めたが、俺が拳骨を見せると、何も言はんでも判つたとみえ、温順しくなつたツケ。醫者が呼ばれて来て診察して、破傷風らしい、出血多量で、腕の骨と鎖骨が折れてゐる、もともと丈夫な身體だから、餘病が併發しない限り癒るだらう、

血液を補ふために、すぐ輸血する必要がある、といふのだ。それから醫者はナスチャーを診察したが、牝虎の一撃で肋骨が二本折れてゐる外は、別にこれといふ傷はないが、身體が非常に疲労し、心臟が弱つてゐる、といふ話なんだ……

輸血さへすればグリゴリーの生命が救はれると知つたナスチャーは、自分の血を取つてくれと申し出たが、身體の状態から言つて、とても輸血は不可能だ、と醫者は警告したんだ。すると彼女は躍起となつて、どうして不可ないんです、グリゴリーの身體の中に、私以外の他人の血を入れることは、私が承知しません、といふんだ！ 早く言へば、ほら、例の意地だよ！ 翌る日、輸血が行はれて、それからグリゴリーの方は好くなつたが、ナスチャーの方が衰弱して、醫者でさへ吃驚して、もう駄目だと思つたほどだが、大丈夫、取り止めるらしい。尤も醫者は、はつきり保證は出来ないと言つてはゐるがね。なアに、大丈夫、二人とも癒るさ！ それにしても、ナスチャーは、えらい女だ！ 平然として自分の血をグリゴリーに與へたんだからなア！ まつたく女傑だよ！」

言ひ終つてバボーションは口を噤んで、パイプをふかし始めた。その暇を利用して、私が興味

を持つてゐた二三の問題について質問した。彼は、八合あまりはひつてゐた大コップの茶をすつかり空にしてしまつてから、やうやくそれに答へた。

「明日、虎を運びに出掛けよう！」空になつたコップの底に砂糖のカスを残したまま言つた。

「でないと、臟腑が抜いてないから、駄目になつちまふ！ 死んぢやあるが、悪戯するけどものは一匹もゐないだらうが、しかし毛皮の腐る心配がある。物が物だけに腐らすのは惜しい！ 二千ルーブル手にはひりア、結婚式の費用には餘るくらゐだ！——さて、俺は寝よう。眠くてやり切れん。昨夜寝ないんだ。同郷の奴が名付祝ひをやつて、そのお祝ひ騒ぎでね！」

五、六分も経つと、彼は、私が殺したばかりの鹿の生皮を床に敷いて、その上でもう麝を立ててゐた。

睡眠の邪魔にならないやうにと、私はシューバを着て外へ出た。馬に水を吞ませ、飼料をやらねばならなかつた。これは日暮までの暇潰しに、私がいつもやつてゐたのである。

夜おそくなつても、起すのが可哀さうだつたので、私は獨りで晩食をすまし、灯を消して横になつた。

私が眼を覺ましたのは晩かつた。太陽はもう高く昇つてゐた。私の友は傍に突立つて、有名な「朝早く彼女を起すな」といふ小唄を唄つてゐた。

「起きないか、鼻眼鏡！」私の被り物をめくつて言つた。「茶を飲んで、出掛けよう！ 馬の用意は出來てる！」

熱い茶を一杯急いで飲み干すと、彈帯と銃を持つて戶外へ出た。もうバボーシニングが、パイプを銜へながら櫓の上で待つてゐた。

からりと晴れた好い天気だつた。太陽は、この古い山男が、愉快さうに言つた通り「全速力で」照らしてゐた。

ナスタージヤがグリゴリーを背負うて運んだ足跡を辿つて馬を速め、一時間半も経つと、虎の死體が雪に埋もれて横はつてゐる場所に著いた。

勇敢な女が、傷ついた友を避けがたい死の爪から奪ひ返して、その安全を護りつつ、恐ろしい一夜を明かしたのは、此處だ！

われわれは、その時の光景をまさまさと心に描いて、彼女の大膽さと機轉とに驚歎したのだ

つた。

その附近は、狼やその他の小猛獣の足跡だらけだったが、死んだ密林の王者の傍まで、敢て近づいたものは一つもない！ この恐ろしい猛獣が、すべての動物に與へてゐる幻惑と、恐怖は、それほど大きかつたのである。

王大（註・虎のこと）が死んだといふ報せが樹海全部に擴がると、その噂が本當であるか否かを確かめるため、力強い人間の手に斃された恐るべき山と森の支配者を見ようと、密林に棲むすべての動物が遠くからやつて來たのだつた。

二頭の虎は並んで横はつてゐた。羽蒲團のやうに温いこの死體の上にグリゴリーは休んでゐたのだ。多分そのお蔭で凍死を免れたのであらう！

調べて見たが、腐敗の兆候はすこしも見當らなかつた。死體は骨のやうに凍り固まつて、黒天鵞絨の縞のある黄褐色の毛の密生した毛皮は、陽を受けて金色に光つてゐた。

これを運ぶには、傍まで櫓を持つて行かねばならなかつた。だが、馬は恐ろしい猛獣の臭ひを嗅いだので、脚を突ツ張つて、どうしても言ふことをきかなかつた。眼を塞いでみたが、こ

れも駄目だつた。後脚で立ち上つて、鼻を鳴らし氣狂ひのやうになつた。仕方なしに櫓から解き離して脇へ連れて行き、われわれの手で櫓を虎の傍まで曳いて行かねばならなかつた。

牡虎は非常に重く、十五ブード（註・約七十貫）ぐらゐで、われわれ二人がかりでやうやく持ち上げて、櫓にのせた。牝虎の方はいくらか輕かつたが、それでもわれわれは大汗をかいたほどである。

われわれが驚いたのは、ナスタシーヤが友のために柔かくて温かい寢床を作るとき、深い雪の中を、どうしてこんな重いものが曳つばつて行けたんだらう、といふことだつた。

「愛してりやア、どんなことだつてやつてのける」皮帽子の下から逞しい頸へ流れる汗を拭き拭きバボーションが認めた。「いや、まつたくだ！ 女傑だよ！ グリゴリーといひコンビだ」馬の眼に猛獣が映らないやうに、上から袋を被せ、櫓を馬の側まで曳いて行つて、やつと馬を櫓につけることが出來た。

猛獣の臭氣は相當強く、われわれの嗅覺は大したこともないのだが、それでもそれと判るぐらゐだつた。

この臭氣があらゆる動物に非常な恐怖を起こさせ、神経が麻痺したり、身體が凍んだりすることも稀でない。

われわれはナスタシーヤが怪我人を背負うて歩いた道を通つて歸途についたが、雪の堆積、倒れた樹木、やつと通れる藪、峻しい岩石の急坂、深い谷などを征服した彼女の異常な困難といふものを、われわれは現場で判断することが出来た。

われわれは逞ましい馬に乗つて、これらの密林地帯を辛うじて前進したのだが、彼女は六ブード（註・約二十七貫）の荷を負うて、しかも夜、これらの箇所を越えねばならなかつた！

これは肉體的には不可能と思はれるが、彼女の場合は肉體よりも精神の力が強かつたのである。激情と意志の力、恐らくそれに愛の力が加はつて、肉體に對する精神力の勝利を齎したのである。

パボーシンは自己流にこれを解釋して、パイプを離して、かう言つた。

「ところでだね、いいか。女は弱いものと言はれてゐるが、ナスタシーヤのやつたことは、男だつてみんながみんな、やれることぢやない！ 何故といふに、それは、あの女の精神は大き

くて強いが、精神の小さい奴には、大きな事が出来ないからだ！ 俺は女は嫌ひだが、ナスタシーヤは別だ。あの精神なら、男に生れるべきだつた！ 俺はああいふ女を生涯に二人知つてゐる。ナスタシーヤと俺の母親だ。俺達の居たシベリアには熊が多くて、始終家畜がやられたもんだ。いつだつたか、或るとき、俺の家の牝牛のブーレンカの悲鳴をおふくろが聞きつけて、熊に虐められてゐるな、とすぐ悟つたんだ。で斧をとつて助けに行つたんだが、見ると、熊がブーレンカを捕まへて、今にも引き裂かうといふところさ。母親は斧をもつて熊に近よる、熊は牝牛を捨てて母親に飛び掛つたんだが、ところが、どうだ！ 熊の頭に、ぐわんと食らはして打ち殺しちまつたんだぜ！ その熊といふのがでかくて二十ブード以上（約九十二貫以上）もあらうといふ奴だつた。一人で斧を持つて熊に向ふのが恐ろしくなかつたか、と後で訊かれると、恐ろしくないことがあるか、非常に恐ろしくなかつたんだが、大事なブーレンカを黒い厄病神（我々の地方では熊のことを、かう言つてゐた）に呉れてやる事が出来なかつた、と返事したもんだ」

ハイリンの背を越えるとき、われわれは櫓を降りて馬に力を貸さねばならなかつた。坂が峻



しくて木が倒れてゐたからだ。峠からは、踏み固めた道を速歩で辿りはじめ、パボーシンは母親の話が続けた。

「いいかね。俺の親爺は（彼の冥福を祈る―譯註・故人の名を口にすると、言ふ言葉）酒が好きでね。酒癖が悪かつたが、母親は驚かなかつた。親爺を叩きのめして縄で縛り、酔が醒めるまで小屋の内に抛り込んでおいたものだ。子供は十四人もゐたが、みんな母親の手一つで育てられてね、お蔭でみんな結構にやつてゐる！」

間もなくわれわれは谷間へ降つて、二道海林河の氷上を滑つて、小屋を目指した。小屋にはズメイカが待つてゐて、嬉しさの餘り尻尾を振り、馬の鼻面に飛びついた。

暗くなつてきた。太陽は樹木の茂つた老爺嶺の峰に隠れ、岩だらけの大頭頂子の頂は、夕焼の光を浴びて、鮮かな薔薇色に染まつた。

パボーシンは馬の始末にかかり、私は晩食の用意に一ト肌脱ぐことになつた。

寝る前、われわれはしばらく語り合つたが、話題の中心は無論ナスターシヤのことだつた。で、最後に私はかう訊ねてみた。

「ねえおい！ アキンジン！ 君はナスターシヤに對して無關心ではない、少くとも、彼女のことを好んで語り、あの女を悪く呼ばない、といふ風に今感じるんだがね！」

彼はちよつと思案して、パイプを口から離し、臭い煙の雲を吐きながら答へた。

「もしも、さう感ずるならば、考へなほしたがいい。それが第一。第二には、かういふことに、就いちや君は全然何も判らん、といふことを君に言はねばならぬ。考へて見ろ、この俺がよ、女の機嫌を取るやうな男に見えるかね！ 有難いことに、俺はもう四十を越したんだぜ！ 君！ 君は物事を針小棒大に考へてるんだ！……あの女は俺の娘としてなら丁度似合ひだし、俺も娘のやうに思つてるんだ。なるほど、あの女は好きだよ。それは本當だ。しかし女としてでなく、人間としての話なんだ。あの女みたいな人間は少い！ あのグリーンシカは丁度似合ひだ！ 二人並んでゐるところは見ても氣持がいい！ 俺は思ふに、二人が結婚式を挙げたら、ナスターシヤは密林の中で一緒に暮すだらう。町の生活と町の人間には倦き倦きしたと、自分の口から俺に言つたことがある。これは體内の血の叫びだ。といふのは、彼女の母親は樺太の流刑女囚で、まだ服役中の話だが、當時看守をしてゐたチュマコフが……母親といふのはその

頃、評判の美人でね、自分を欺して棄てようとした許婚者を殺害した咎で、徒刑に處せられた譯だ。ナスターシヤは、その母親をつくりだよ！ 愛にも、憎しみにも、冗談といふことを更に認めない！ 以前グリゴリーイは女蕩しだつたが、今は堅くなつてる。そんな事もなからうが、萬一ナスターシヤを裏切りでもしてみろ。生きちや居れまいよ！……第三に、なあ鼻眼鏡！ もう寝る時分だ！……おやすみ！」

バボーシンはかう言ふと、灯を消して、少しでも暖かいやうにカマドの傍に横はつた。間もなく元氣な彼の鼾聲が、小屋ちゆうを震はせ、松林から聞えてくる赤狼の吠える聲を、掻き消した……。

私は、バボーシンが戶外へ出て行つて、パイプをふかしたり、太い低音で馬に聲を掛けてゐるのを夢うつつに聞いた。

x

朝早く私が眼を覺ました時は、わが友は影も形もなかつた。横道河子驛へ虎を運んで行つたのだ。三日経つた夕方近く、やつと戻つてきた。

「やあ今戻つたよ！」彼は、はひつて来るなり外套を脱ぎながら嗷鳴つた。「何もかも片づけた。これで一ト休みだ！ 虎は支那人の藥屋に千五百ルーブルで賣りつけた。代金はグリゴリーイの名で預金してきた。これで結婚式も何のそのだ！」

「で、二人の容態は？」元氣がなく、話を續けたがらない彼の様子を見て、私はかう訊ねた。

彼はパイプを吸ひ終ると、コップに茶を注いで、氣乗りのしない風で答へた。

「なアに、だんだん好くなつて行く！ ただね、ナスターシヤが悪いらしく見えるんだ！ けつそり瘡せてね、レモンのやうに黄色くなつてゐる！ あの美しさは何處へ行つたんだらう！ グリゴリーイは若々しくて、薔薇色の頬をして、髯も眞黒だ。ナスターシヤはいつも沈み切つてゐる。ただ、グリゴリーイが優しくすると頬笑むのだが、その様子がまた悲しい佻しいもので、彼女の顔を見ると、こつちが泣きたくなるぐらゐだ。醫者の話では、彼女の容態は大したことはない、重いものを運んで筋を違へ、それに輸血のために、すっかり衰弱してしまつた、といふんだがね」

「君はすこし誇張してるやうに思ふが！」と私は彼の話を遮ぎつた。

「根が丈夫で健康な彼女のことだ。結局若さが物を言つて、美しさと健康を取り戻すだらうよ」

「いや、俺はさう思はぬ！」彼は二杯目の茶を注いで、くるくるに刺つた頭の大汗をタオルで拭きながら、反対した。「以前彼女が持つてゐたものは、もう戻つて来ない！それはみんな生命を救ふためにグリゴリーに與へてしまつたんだ！俺はすつかり見抜いてゐる、俺の眼は晦ませない！醫者も俺と同じ意見だ。だから、こいつは、どうにも仕方がないさ！ナスチヤを見るのが可哀さうでね、それほど變つてしまつた！まるで別人だよ！前の美しさで残つてゐるのは、ただ沈んだ大きな眼だけだ。まつたく（この世のものすべて移り變り、月の下に永遠のもの更になし）と學者がいつてる通りだ！」

言ひ終つてパボーシンは口を噤み、すつかり駄目になつた靴の修繕にとりかかつた。

私はまだ澤山の問題に興味を持つてゐたので、パボーシンの傍を離れず、かう訊ねた。

「もうどのくらゐ入院して、いつ小屋に歸つて来るんだね？」

パボーシンは、すぐには答へなかつた。吃驚したやうな眼で私を見たが、靴の縫糸を整へな

がら言つた。

「いつ退院するか、そいつは誰にも判らぬ！いづれにしても、一ト月以上はかかる。ナスチーシヤはすこし早目に退院出来るかも知れんが、グリシカの附添ひとして残ることになるだらう。彼女は乳母代りに彼の面倒を見てゐるが、忠實な犬のやうに彼の顔色ばかり見てゐるんだ。彼はそれを有難がつてゐるらしいが、どうして彼女を喜ばしいか知らないんだ！始終女の手に接吻する。女は彼の頭を撫でる。それでゐて眼には涙を浮べてるんだ。俺は、その涙を知つてゐる。彼女の悲しみを知つてゐる。昔はもう歸らない。グリゴリーは彼女から離れて行く、といふことを、彼女は心臓でもつて感じてゐるからだ！」

それから、ちよつと黙り込んだが、また言葉をつづけた。

「彼女の悲しみが判るかね？彼女は自分の健康、自分の美しさ、自分の愛を一人の人間に與へて、その人間の生命を救つて、今では彼女のところには何も残つてゐない。そしてお恵みや施し物を乞ふやうに、その人間の愛と情を待つてゐる！グリゴリーは當分そんなことは考へずに以前通り彼女を愛するだらう。だが、彼女は女として、その感情の儂さを意識してゐ

て、將來を危ぶんでゐるのだ。俺は心から可哀さうと思ふが、どうすることも出来ない！ 歸  
る時、お別れに病院へ寄つてみた。グリゴリーは寢臺で眠つてゐた。ナスチャは傍に腰かけ  
て本を讀んでゐたが、俺を見ると喜んで、それからしばらく話した。彼女はまた瘦せて小さく  
なつたやうな氣がした。斷髪にして、まるで少年みたいだつたが、まったく可哀さうな女だ！  
歸るとき、俺の手を固く握つて『バポーシカ！ あなたはグリゴリーの只一人の親友だつて  
ことあたし知つてます！ いろいろのこと、有難いと思ひます』と言つたよ。俺は何も言へな  
かつたので、ただ別れのしるしに片手を振つただけさ』

かう言ふと、彼は自分の仕事に没頭して、話は途切れた。どんなに話しかけても駄目だつ  
た。口からパイプを離さず、返事の代りにうんうんと唸るだけだつた。

馬に水と飼料をやつて小屋に戻ると、バポーシンはもう大きな駝をたててゐた。そして、寢  
言で誰かの名前を呼んだ。私も寢るより外に何もすることがなかつた。

ある時、近所の小屋に住んでゐる支那人の獵師を留守番に頼んで、バポーシンと二人、南に

當る『皇帝狩獵の森』へ、四五日の豫定で出發した。ここは昔支那皇帝自らも加はつて壯大な  
狩獵が行はれた處である。この狩獵の思ひ出は傳説として今日まで残つてゐる。

この地方の群山は、土地の住民の間で『モチヤリン』即ち『空を支へる山』と呼ばれてゐる。  
これらの密林地帯の多くは、未開で近づき難く、自然は原始的性質を保つてゐた。そしてこ  
れらの森林は禁獵區に數へられ、山の靈、即ち『ベイダヤン』の名で知られたこの群山の中央  
に棲んでゐる王大ワシタ（註・虎のこと）の保護の下にあつた。

これらの群山の頂上は大部分秃山で、苔や地衣や矮林が生えてゐるだけだつた。

ここに住んでゐるのは山の靈だけでなく、強い大鷲も住んでゐて、非常に高い絶壁の上に巢  
を作つてゐる。野山羊やゴラル（山羊の一種）も洞穴に棲み、ここで草を食べる。これらは滿  
洲の秃山の子供たちである。

われわれはかういふ山の頂に登つて、周圍の山々の壯大なパノラマに、しばらくは見惚れ  
て、その印象を語りながら、斷崖の端に立つてゐた。ふと、氣が付くと、バポーシンが私の顔  
をまじまじと眺めてゐる。やがて彼は靜かに言つた。

「鼻眼鏡！ 鼻を擦れよ。凍傷になるぜ。白くなつてるぢやないか！」

私は自分の鼻を押へた。まるで感覚がない。凍つてゐたのだ。そこで、雪をとつてしばらく鼻を擦つてゐた。この位の高さで風があつたら、寒氣は格別にこたへる。

「おい、そんな生優しいことぢや駄目だ！」

古い密林男はかう咎めて、熊のやうな掌で、白くなつた私の鼻を擦る手傳ひをはじめた。「その鼻をこつちへ出せ。ちよいと擦つてやるから。でないと、酷いことになるぜ！」

彼の「優しい」擦りかたのお蔭で、眼から火花が飛び、不幸な鼻は紫色の大胡瓜に變つてしまつた。

「何でもないさ。すぐ元通りになる！」と友は慰めた。「その代り鼻は無事に取り留める！ 鼻つてやつは、無いと工合が悪いからなア！ 女だつて好いてくれないよ！ 鼻つてやつは、われわれにとつて一番大事なものだ。この鼻を見て、女たちは男を見分け、性質を判断する。女同士ぢや耳で判るんだが、男は鼻だ。俺は眼と言葉で女を見分ける。女ツてやつは揃つてお喋りで、つまり言葉で罪を犯す。樂園でアダムを誘惑して林檎を食はしたのは誰だい？ 女のイ

ヴにきまつてる」

私の鼻を蘇生させる苦しい手術がすむと、われわれは深い溪谷へ降りた。谷底には、寒氣が作り上げた厚い氷の下を、谷川が音を立てて流れてゐた。

険しい岩だらけの川岸の凸凹に沿うて曲つてゐる細道へ出ると、獵師福蔡フクサイの山小屋の窓から洩れる灯が、ちらちらとわれわれを招いた。われわれが強いラムや甘い砂糖入りの茶をご馳走することを知つてゐる小屋の主人は、われわれが泊つたので大喜びだつた。福蔡フクサイの方では、栗鼠やエゾヤマドリの肉で拵へた旨いスイギョウザをご馳走した。

パポーシンは熱いギョウザを味ひながら、例の辯で、各國民の料理技術を比較しながら、理窟を並べ出した。そのとき、シベリアほど美味しいものを食ひ、美味しいものを飲むところは外にないと言説して、はつきりシベリアの肩をもつた。

「シベリアの人間は食ひ方を心得てゐるし、食物の味も知つてゐるが、麥粥とクワスのロシアの弱蟲なんか問題ぢやない！ それにシベリアとロシアでは、材料そのものが既に違つてゐる、魚と肉を例にとつてみてもさうだ！ いやもう比べものにならない。どうしてかといふと、

シベリアは、耕されていない自由の土地だからだ！」

われわれがお喋りしてゐるうちに、老獵師は間もなく麝香猫の皮を被つて寝てしまった。われわれもまたいつの間にか、有名な詩人達の表現を借りると、夢の神の懷に抱かれたのだつた。

われわれが老爺嶺の峠へ通じてゐる野獸の通路を辿つてゐる時、バイダヤンの處女雪が日光を受けて黄金いろになつてゐた。

ある曲り角で、老練な狩獵家は立ち停つて、雪を念入りに調べたが、私が近づくと、

「昨夜、虎が通つたんだ。腹がへつてゐたとみえ、足跡が深くない。すぐには寝ないだらうから、これから急げば追ひ付ける。おいバンドをもつと締める。早く。相手は腹が空つてゐるから、獲物を搜して、道を外れるぜ。外れたら最後、見つからないぞ！」

かう言ふと、彼はパイプをポケットに納め、彼の言ふ「ノッポの大股」で歩き出したので、私は急ぎ足で、やつと跟いて行つた。

四、五町も行かないうちに、胡桃の若木林のある小さな空地が、われわれの眼の前に現はれた。

その端まで行つたとき、一ト息入れるために足を停めて、あたりを見廻した。虎の足跡は依然として路の上に續いてゐる。

鷹のやうなバボーシンの眼は、前方に何か発見したらしく、全身が緊張した慎重さを見せた。

「おい、君！」彼は私を振り返つて低い聲で言つた。「ほら、あの向ふの樫ノ木にミーシカ(註・熊のこと)が登つてゐる！ こいつは意味深長だぞ！ あいつ今、木の上でどうにも出来ないんだ！ そつと近づいて、よく見よう！」

かう言つて彼は小徑を進んだ。私もそれに續いた。

百歩ほど進んでから立ち止つて、眼を凝らした。

すると、驚いたことには、その樫ノ木の上にもう一つ黒い影が見えたのである。これは熊ではなく人間であつた！

人間は熊の下の枝に腰かけてゐた。そして熊と人間はお互には少しも注意を向けなくて、両方とも頭をさげて、下の方をじつと見てゐた。

「なるほどね！」バボーションは銃を構へて、雪の詰まつた遊底を掃除しながら言つた。「支那人と熊が木に登つてゐる！ どういふ譯だ！ 虎を怖れてゐるんぢやないかね！ きつとさうだぜ！ 虎が樫ノ木の根元に頭張つて、恐ろしさのあまり木から轉げ落ちるのを待つてゐるんだよ！ 俺も永いあいだ獵をやつてゐるが、こんな珍しい事件は初めてだ！」

私もこの珍しい三つの影の組合せを認めた。そして行動に移る用意をしたが、バボーションが私の鐵砲の銃身を脇へ寄せて言つた。

「熊を撃つのは止さう！ 今の場合無意味だ！ 虎の方を覗はう！ 熊はいづれ自分から銃口の先へ現はれてくる。君は熊の眞下邊を覗へ。俺は正確に虎の頭を撃つから。一緒だぞ！」われわれはすぐ發砲の用意をした。そして彼の合圖で、曳金を引いた。

銃聲に交つて耳も聾するやうな、傷いた獸の咆哮が起つた。彈丸の當つた横腹を噛みながらくるくる廻つてゐた虎は、間もなく氣力を盛り返して、草叢へ立ち去つた。

銃聲に驚いた熊は、囊のやうに木から轉げ落ちて、雪の上に悪臭を残しながら、後も見ない

で逃げて行つた。

木に登つてゐた支那人は、遠方の山小屋に住んでゐる獵師で、寧古塔ニウグータの歸りだつた。われわれを見て木を降りたが、恐ろしさの震へがまだ止まらなかつた。虎に出喰はしたことを、木に登つて命拾ひしたが、その木の上には大きな黒い熊が先きに來てゐたことを、われわれに語つた。

運の好い獵師と、そのまま別れて、われわれは傷ついた猛獸を夕方まで追跡した。そして、老爺嶺の高峰の峠に風除けの岩蔭を見つけて、そこでに野宿することになつた。

夜中に大吹雪が荒れた。濕つぽい雪が吹きこんで、われわれの焚火は危く消されるところだつた。寝るどころの騒ぎではなかつた。そこで、ろくろく夜も明けないうちに出發したが、雪に覆はれて、猛獸の足跡を見出すことが出来なかつた。

明けがた、吹雪が歇んで天氣が晴れ、きらきらした太陽が遠方の背達山の高原から姿を現して、ひろびろとした牡丹江ムダンキヤウの盆地や、草原や島や、その間に散在してゐる滿人の農民小屋などに眩ゆい光を浴びせてゐた。

遙か彼方に、働んだ森と草叢に圍まれて、鏡泊湖が白い斑點に見え、その向ふに、密林に覆

はれた長白山脈のうす暗い支脈が、雷雲のやうに盛り上つてゐた。

地平線上、黄金いろの陽光を浴びた煙霧のやうな連山の間に、滿洲に於ける最高峰、神聖な山と言はれる白頭山、朝鮮讀みにすればバクツーサンがボンヤリ見えた。この死火山の噴火口は海拔二千五百メートル以上の高さまで登えてゐる。

この山の頂上に湖があつて、滿洲の傳説によると、山の中に龍が眠つてゐるといふことを知つたバボーションは、遠くの方を見ながら、かう言つた。

「いつかそのうちに、あの頂邊に登つて、龍の鼻の孔を探つて、嚏さしてやらう！面白いぞ！森も山も踊り出すぜ」

われわれは、自分達の目的もすつかり忘れ、昨日の朝から何も食はずに腹が空いてゐるのも忘れて、眼の前に繰り展げられたパノラマを、しばらくは恍惚と眺めてゐた。

「なに、それは問題ぢやないよ、君」友は私の前へ歩いて来て、パイプから煙の輪を吐きながら言つた。「君が俺によく言つたぢやないか。ほら、人はパンのみにて生きるものにあらず」とな！」

われわれは、南へ南へと進むうちに大頭頂子を背後に残し、青空高く尖峰の登えてゐるベイダヤンの密林地帯へ踏みこんで行つた。

ここで、俗に「龍の頸」と呼ばれてゐる或る谷間だつたが、われわれは古い小屋、といふよりは寧ろ、切り立つたやうな花崗岩の崖をくり抜いて作つた洞穴、と言つた方が適當な住居を發見した。

小屋の主人は、老いぼれてはゐるが人の好ささうな滿人の年寄りで、石で出来たやうな顔をしてゐた。彼はわれわれをこの原始的な住居に泊めてくれ、支那皇帝が治めてゐた昔の時代や、昔、老爺嶺にあつた禁獵區に於ける壯大な狩獵などについて、いろいろな興味ある面白い話を聞かしてくれた。

老人はロシア語を知らなかつたが、バボーションが支那語で話した。老人はわれわれの質問に對し快く返事をしてくれて、祕事に屬する支那宮廷生活を、二三洩らした。

この地方の獵師や匪賊は、この老人を非常に尊敬してゐて、この「大林の古老」の言葉は、彼等にとつては掟であつた。



若い時分老人は満洲の「旗」の軍隊に勤めてゐたし、皇帝の狩獵にも加はつたのだから、老人がいろんな事を知つてゐて、深い皺の刻まれた年老いた山男の頭の中に、歴史的事實や追憶が少なからず保たれてゐることは、驚くに當らない。

あるとき、朝鮮松の巨木の傍を通るとき、老人は足を停めて、苔に覆はれた外皮を杖で叩いて、やうやくそれと判る切れ込みと凹みを指し示して話し出した。木の根元には石塊が積んであつて、それに苔や草が生えてゐた。

「丁度この」と密林の古老は言つた。「木の根元に、ある『旗』の軍隊の士官と、知名の官吏の女房が、法を犯した咎で縛りつけられて、虎の餌食に與へられたことがある。二人は愛し合つてゐたが、皇帝は死刑にせよと命令した。虎は夜中に引裂く咎であつた。朝になつて、刑罰が終つたかどうかを確めに、裁判官と證人が、現場に来てみると、罪人はすでにその場になかつた。だが、木の根元に細切れと、血の痕と、それから雪の上に、虎の足跡が見つかつた……」

これは、罪人達はその罪に相當する刑罰を受けて、虎に引き裂かれたことを語つてゐる。その印に偉大なる山と森の靈に祈りが捧げられ、慣習に従つて、石塊が積み上げられたのである。

しかし實際はさうではなかつた。狩獵が終ると、皇帝は從者をみんな引きつれて北京へ歸り、「旗」の兵隊達はそれぞれ己れの兵舎へ別れ別れに歸つた。

そのときわれわれは、士官と官吏の妻は怪我もなく生きてゐて、ウラヂウオストークへ行く途中だ、といふことを知つた。あの晩二人は細を解かれて逃れ、血の痕を残すために、ナイフで自分の身體に傷をつけたのであつた。これは皇帝みづからの命によつて行はれたことを、われわれは知つてゐた。皇帝は善良な人で、若い者達を死なしたくなかつたのである！ しかし法はどういふことがあらうと守らねばならなかつた！ 皇帝でさへも法を曲げることは出来なかつたのである！」

年取つた満人の物語を私に通譯しながら、バポーシンは、腹の底から笑つたが、その笑ひ聲は大喇叭のやうに山々に響きわたり、禁獵林の物々しい静けさを破つた。「そいつは解る！」彼の強いパスが響いた。

「狼も満腹、羊も安全といふわけだな！ 支那皇帝えらいぞ！ 健在を祈るよ！」

彼はかう言つて、老人の曲つた背中を掌で叩いた。それがため老人は餘計に腰を曲げて、適

當な距離まで離れた。

そこから十露里くらゐのところ、山嶺の臺地にあつた宿營の址と、天子が此處に腰かけて、霞んだ地平線の遠景の中に緑色の浪となつて溶けこむ廣漠たる樹海の見事なパノラマを見るのが好きだつたといふ大きな石を、老人がわれわれに教へた。

この近くの樅ノ木林の中に皇帝の天幕が張られたが、今、残つてゐるものといへば、樅や胡桃の木が生えてゐる低い土壘だけだつた。

そこから離れた傾斜面のすぐ上に、曾つて皇帝が祭壇を設けて、血を流さぬ犠牲を王大に捧げたといふ場所があつて、そこにこの地方の獵師達が神を祭つてゐた。

老人はわれわれの傍を離れて膝まづき、筋だらけの干からびた兩手を天に差し上げて、熱心に祈りはじめた。

われわれは老人をそのままにして歩き出し、一時間の後、洞穴の小屋に歸りついた。昔皇帝の狩獵があつた禁獵林をさんざ歩き廻つて疲れたので、そこで休息した。

それから三日ばかり経つと、われわれは家——ゾートフの小屋にゐた。そして、あちこちで

焚火の傍に寝たために、焼穴が出来たり、鍵裂きをこしらへたりした獵服の手入れをしたのである。

## 愛と犠牲

その後、私は勤務の都合で葦沙河驛へ歸らねばならなくなり、そこで秋まで暮した。パポーションは數回訪ねて来て、グリゴリーとナスターシャに關して、興味のあることを、いろいろと話してくれた。

春の初め、密林の雪が解けて、その中からアネモネや待雪草が咲き出す頃、二人は退院してその翌日、土地の寺院で結婚式を挙げたのだが、彼女の希望によつて式は質素に執り行はれ、式が済むと、その足で密林の小屋へ新婚旅行に出發したのである。

彼女の兩親は仕方がないと諦めて、その結婚を祝福したが、あの晩にグリゴリーに脅かされて逃げたチュマコフ家の兄弟達は、自分達の敗北と恥辱を許すことが出来ず、實を結ばなか

つた花婿のロジノフと肚を合はせて、秘かに奸計を巡らしてゐたのだつた。

請負師のロジノフは、土地の支那人達と、直接に仕事の上の關係があつたので、彼等と或る秘密な相談を行つたのだ。

バポーシンは、密林の住民や匪賊達の間で尊敬され親しまれてゐたので、そのイキサツを詳しく知つてゐた。で、身邊に迫ってくる危険をグリゴリーに警告したのだが、性來の無頓著さからしてこの噂を一笑に附して、大林の裾にある山小屋で、若い妻と暢氣に暮してゐた。

ある時、十人ぐらゐの匪賊たちが小屋にやつて来て、型通りの挨拶がすむと、首領がグリゴリーを隅へつれて行つて、かう言つた。

「グリゴリー！ お前さんは善い人間で、心の綺麗な男だつてえこたあ、おいらは良く知つてるんだ。だがお前さんはロシア人の中に敵を持つてゐなさる。奴等はお前さんに向つて、良くねえことを企らんであがる。奴等に用心して、氣を許しちやいけねえぜ！」

それから、グリゴリーはみんなに茶をご馳走して、そのまま歸した。

ナスターシャは別にその話を小耳に挟んだのではないが、彼に危険が近づいてゐることを女

性の本能が彼女に囁いたので、どんなことがあつてもグリゴリーの傍を離れず、回復しきらないでよろよろしてゐる彼女の健康では無理であるのに、鹿の袋角取りにも一緒に蹤いて行つたものである。

袋角取りは巧くいつて、非常に高價な角袋を五六獲つた。これを賣るには横道河子驛まで持つて行くのであつて、そこで一日二日滞在せねばならないことが間々あつた。

ある日、やはりその用で出かけた時だが、賣買が好都合にすんだ後、グリゴリーは、飲み食ひする氣で料理店に足を入れたのである。するとそこで仲間の獵師達に逢つたが、獵師達はゾートフが袋角を高く賣つたことを知つて、かうした場合の慣例になつてゐるご馳走をせがんだのだつた。別室で酒宴が始まつた。最初は禮儀と上品さが保たれてゐた。その酒宴に女達や獵師の細君連が加はり、やがて、ジブシイ女の女主人の發議で、ヴァイオリン二つ、手風琴一つからなるジブシイの樂隊が呼び込まれた。酒が廻り氣分が昂まるにつれて、酒宴は遊蕩的な性質を帯び、何處からともなく、ジブシイ女のコーラスが現はれ、その中心は女主人の娘で、色の淺黒い美人のフェーニヤだつた。

獵師の細君連は、酒宴が自分達の家庭的團樂の健全さを脅かしさうになつたのを見てとり、嫌がつて反抗する自分達の亭主を急き立てて否應なしに外へ連れ出した。後に残つたのは、一團の若者達と、グリゴリーとパボーションだけだつた。

ゾートフは女主人の娘の氣に入つたと見えて、彼女は特別な注意を彼に向けてゐた。ロシアダンスが始まるやうになると、グリゴリーはフェーニヤと最初に組んだ。彼女はグリゴリーがすつかり夢中になるぐらゐの情熱をこめて奔放に踊つた。

彼はフェーニヤにシャンパン酒を飲ませて、自分の膝に載せた。

パボーションはもうすつかり酔拂つてゐたが、グリゴリーの振舞ひを見ると酔が醒めてしまひ、傍へ近づいて耳元に囁いた。

「グリシカ！ 氣でも違つたのか！ それア一體何の眞似だ？ しつかりしてくれ！」

グリゴリーは、酒に酔つて情熱に燃える眼付で、自分の友を振り返つたが、片手を振つて言つた。

「俺が何やらうと君の知つたこつちやない！ 俺ア子供ぢやない。君だつて俺の乳母ぢやある

まい！ 氣に入らなげや、別に引き留めやしないぜ」

かう言ふと、グリゴリーは相手の女の腰を抱いて、何やら野蠻な踊りを始めた。

ややしばらく立つてゐたパボーションは、よろめくやうな足取りで戸口へ歩み寄り、街へ出た。もう夜は更けて、人の氣もなかつた。

朝、通行人は、死んだやうになつて酔つてゐるパボーションを見かけた。彼は支那人町の眞ん中の道路に、大の字になつて、ぐらぐら寝てゐた。通り掛つた支那人達は立ち止つて、頭を振り振り、口々に言つた。

「あ、パボーションカ！ 酷く悪くある！ 酔つてゐる！ それ、よくない。起きる宜し。我々、少々手傳ふある！」

しかし密林の豪傑には何も聞えず、町中に鼾聲をとどろかしてゐた。

翌る日晩く、グリゴリーは、まったく見覚えのない部屋で眼を覺ました。部屋の飾付は富裕な家の寢室を思はせた。

彼は寢臺の上で、綿入の絹夜著を被つて服を脱いで寝てゐた。

網模様の絹レースで出来たカーテンを透して、明るい太陽が覗いてゐた。壁の向ふで話が弾んで、忍び笑ひするのが聞えてきた。

目覚時計は正午を指してゐた。

彼はやうやく我に返つて、昨夜の出来事をすっかり憶ひ出した。頭が割れさうで、身體工合がどうも良くない。

「此處は何處だらう？」若い密林の男はかう考へながら、寢臺の傍の柔かい眩掛椅子の上にキチンとたたんであつた革の狩獵服を著た。

そのときドアを叩く音がして、料理屋の主人がはひつて來た。瘦せた背の高い老人で、横顔は猛禽に似てゐた。

「お早うございます！」丁寧に御儀しながら低い聲で言つた。

「おやすみになれましたか？　ご気分はいかがでございますか？」

グリゴリーは、すぐ事の次第と、いま自分の居る處を悟つて、返事した。

「有難う！　結構でした！　いやもう前後不覺に酔拂つてしまつて、あなたの寢室まで占領し

て、どうも濟みません！　しかし、みんなすぐ代金をお拂ひしますから！」

「どうぞ致しまして。どうぞ御心配なく。ゾートフさん！」と綺麗に並んだ白い齒を覗かせて、ジブシイの親爺は遮切つた。「もう全部頂いて居ります。チップまで入れて。ところで、朝の食事に食堂へお出ましをお願いいたしたのでございますが！」

すつかり身支度を整へて、冷水で顔を洗つたグリゴリーは、食堂へ出て行つた。食堂ではすでにフェーニヤが食器の音をさせて、眞鍮のコーヒーポットで茶碗に香りの高いコーヒーを注いで、食事の支度をしてゐた。

「お早うございます！」と彼女は客を迎へた。淺黒い顔にぼつと赤味が差した。

「今日は！」グリゴリーは設けられた席に腰かけて、彼女に答へた。そしてありふれた話を交はしたものの、昨日のことを憶ひ出すときまりが悪く、どうしていいか身の置き場に困つたが、しかしこの状態はながくは續かなかつた。手早くコーヒーを飲み終つた年寄りのジブシイは、轡子を被つて「晝食までには歸つて來る」と言ひながら外へ出た。

娘はそれを待つてゐたのだつた。父の姿が消えて扉がぱたんと閉まるのを見届けると、後か

らグリゴリーに近づいて、両手で彼の眼を抑へ、彼の顔を仰けにさせ、それを抱へるやうにして接吻をした。

148

密林の勇士は突然のことに面喰つてしまった。血が頭へのぼつてきた。そして、世の中のこととは何もかも忘れて、ジブシイ女を抱きしめたのである。

x

この時分、ナスターシヤは、良人を待ち侘びて、峻しい崖の上にある道の曲り角に、永いあひだ立ちつくしてゐた。下の方では溪流が狭い巖と巖の間で渦巻き沸き返りながら騒々しい音を立てて、眞晝の陽光を浴びて勢づいた優しい静かな密林の囁きを掻き消してゐた。春の花の香はしい匂ひに満ちた暖かい、水晶のやうに澄み切つた空気の中で、飛んで行く小鳥の啼聲が響いた。これらの響の中に生きる幸福と生の渴望が聞きとられた。これは莊重な自然の挽歌であり、愛と創造の永遠の歌であつた。

これらの響きに耳を澄まし、森と原のすがすがしい芳香を胸一杯吸ひこみながら、ナスターシヤはその歡びを共にすることが出来ず、うら淋しい氣持で遠くを眺めてゐた。青く煙つた廣

い谷間を道が曲りくねりながら續いてゐた。

(グリゴリーは今日も歸らないのかしら！ 出かけてから今日で四日目！ 何か間違ひでも起つたんぢやないかしら！ ひよつとすると、もうあたしを忘れて、嫌になつて、もう歸つて來ないのぢやないか！)

かういふ考へが、いま何べんも彼女の腦裡に浮んだ。すると、自分の良人の眼が不安氣で物思ひに沈んでゐたことを、次第に思ひ出して、彼の愛撫が以前に較べて冷やかで、言葉にも温かさや真心が籠つてゐない、といふ風に思はれてきた。

(それがどうだつて言ふんだらう！) 彼女は小屋の窓際に獨り腰をおろして、甘えるズメイカの頭を撫でながら考へた。(さうかも知れない！ あたしはもう昔のあたしぢやないんだもの！ あたしは片輪で、あの人は釣り合はない！ 事によると、あたしが嫌になつたのかも知れない！ あの人は、あの人のやうに健康で美しい別な女を見つけることだらう！ あたしは自分の美しさをあの手に捧げてしまった。何もあの人が悪いのぢやない！)

かういふ堪へ切れぬ悲しみと絶望の瞬間に、自殺、といふ考へが頭を掠めるのだつたが、眼

149

の前に展開してゐる絶妙な大自然の景色を一ト目見ると、さういふ考へは飛び去つてしまひ、生の執著、愛の要求といふ健康な感情が、それに代つて起るのでつた。すると、彼女は、過ぎ去つた昔がまた戻つてくるといふ希望、何もかもすんでしまつて行く時が来るだらうといふ希望によつて、自分を慰めるのであつた。

獨り居の淋しさに、彼女はズメイカを連れて、たびたび密林の中へ分け入つた。そして、何處か松林の端れあたりにある出張つた岩に腰かけて、神祕的で憂鬱なベイダヤンの青い遠景の上に聳え立つ、大頭頂子の岩だらけの頂における色彩と陰影の變化を、飽かず眺めた。

自然の美しさを眺めてゐる間、彼女は一時的に何もかも忘れ、悲しい思ひを紛らすことが出来たが、それでもやはり疑惑と嫉妬の蟲が、惱んでゐる彼女の心臓を噛みつけて、落著かせなかつた。

こんな散策のとき、彼女の目の前に野獸がひよつこり姿を現はすことがよくあつたが、彼女の獵銃は音も立てず、主人の意志に忠實なズメイカもその場を動かさず、離れて行く獲物の後姿を、身震ひしながら見送つてゐた。

あるとき、藪の中から、仔を連れた牝鹿を犬が追ひ出したことがある。牝鹿は一番悪い敵な人間を見ると、後返つて草藪の中へ逃げこんだ。仔鹿は、ナスタシーヤの三步ほど先きの草の中に隠れた。

犬を追ひのけて仔鹿に近づくと、彼女は両手で抱きあげ、優しく撫ではじめた。仔鹿は哀れつぽくピイピイ鳴いて、母に救ひを求めた。

母性愛は恐怖と自衛の感情に打克つた。牝鹿は草藪の中から出てきて仔鹿の方に近づいて來た。で、彼女は仔鹿を地べたにおろして、どうするか見てゐた。

彼女はズメイカの頸輪を押へて、五六歩脇へ退いた。牝鹿は仔鹿に近づいて鼻面を舐めてやり、仔鹿を先きにして追ひ立てながら草藪の中に隠れた。

この出來事はナスタシーヤの心を動かした。愛とは何であるか、愛の力は如何に偉大であるか、といふことを、彼女は理解したのだ。

(さうだわ、愛は自己犠牲だわ!)と彼女は思つた。そして柔いだ氣分で、愛する輕率な友の歸りを待つ氣で、家へ歸つて行つた。その晩は氣持よく眠れて、最近彼女を不安にしてゐた悪

夢も見なかつた。

グリゴリーは、一週間経つてやつと歸つてきた。

馬を降りると、グリゴリーはナスターシャに挨拶し、強く抱きしめて接吻した。彼女は淋しかつた心の情熱と思ひを罩めて抱き、良人から離れることが出来なかつた。

しかしながら、彼女は、グリゴリーの接吻と優しい眼差の中に、變化を直ぐ感じてしまひ、苦い疑惑が心に忍びこんだ。

彼女は自分の悲しみや孤獨について、當て擦すりめいたことを一度も言はなかつた。その青褪めた唇から、非難の言葉一つ洩れなかつた。

彼女は、自分が彼に不信を抱いてゐることは顔に表はさないで、以前に變らず優しく慎重であつた。

「ねえ、君にお土産を持つて來たよ！」グリゴリーは馬の鞍を外してから、大きな紙包を彼女に渡しながと言つた。

「あなた！ お土産なんか要らないのよ！ 無用ですわ！ あなたがあたしを愛してらつしやると、信じてるの。だから、あなたさへあれば外のものは何も要らないわ！」彼女は紙包を受け取つて、良人の頬に接吻して、かう答へた。

グリゴリーが馬の始末をしてゐる間に、彼女は小屋の内へはひつて、包を解いて、贈物を開いてみた。裁斷したドレス生地、リボン、人造眞珠、靴下、糖菓、それからハルピンの新聞などがはひつてゐた。

彼は彼女の頼みをみんな聽いてくれたし、表面は非常に優しく深切だが、鋭敏な女性の心は、虚偽と不誠實を感知したのである。

夕食後、寝る前に、たうとうグリゴリーが、歸りの遅くなつた理由を話した。

「ねえ、かうなんだ！」探るやうな彼女の視線を避けながら、彼は言つた。「袋角の賣り渡しが延び延びになるし、代金の方も差し支へが出来たりして、これより早くは出發出来なかつたんだよ」

ナスターシャは、何とも返事をせず、彼の口を手で抑へ、頭に接吻した。

グリゴリーが、ぐつすり赤ん坊のやうに眠つてしまつたとき、全財産が預けてある貯蓄銀



行の通帳が彼女の眼についた。

それを手に取つて、預金の差引残高を調べたが、袋角を有利に取引したにも拘らず、預金が少しも殖えてゐないどころか、大分減つてゐるのが、彼女の注意を惹いた。流石にこれには吃驚して、良人をすぐ揺り起して、その理由を糺さうか、と思つたのだが、後で、しばらく思案した結果、もう少し待つて、もつと都合のいい機会に持ち出すことにした。

もうかうなつては、良人が自分に對して、何か祕密を持つてゐることは間違ひなかつた。

x

牡鹿の鳴き聲が聞え始める九月、私はバボーションと二人、密江河シヤンハの上流へ向つて出發した。此處には四季を通じて住めるやうに設備した彼の山小屋があつた。

われわれの前には、アムール産のツングース種の愛犬シビルレートが細道を走つてゐた。犬のシルエットは、われわれの視野に現はれたり消えたりしながら、矮林や草叢などの黄緑色の背景の中で、くつきりと浮き出してゐた。

蒸々する眞晝だつた。太陽は一片の雲もない青空の奥できらきらと輝いてゐた。われわれは

樫の疎林に覆はれた海林山脈の峻しい峠を登りながら、のろのろと足を運んだ。

乾いた落葉がわれわれの足の下で騒いで、幸福な金色の秋の中でうとうとと睡つてゐる密林の静けさを破つた。

臭ひの強いパイプの煙がバボーションの背後へ流れるので、私は嚏して、かなりの間隔をおいて歩かねばならなかつた。

その時、シビルレートの烈しく吠える聲が聞えた。私は足を速めたが、友に追いつけなかつた。といふのは、彼は道をおりて犬の聲のする方へ曲つたからだつた。

細道の途中に立ち停つて、約束の合圖を待つてゐた。

犬の吠える聲は一つの處から響いてゐた。何か野獸を發見して木の上へ追ひあげたらしい。

可なり永いあいだ待たされたが、バボーションの口笛が尾を引いて響いたので、その合圖に私はしやんとなつて、茂つた樫ノ木林を突切つて行つた。

「こつちだ！ こつちだ！」私の友が叫んだ。すると直ぐ、瘤だらけの樫の古木の下で、何かの上に小腰をかがめてゐる彼の大きな姿が眼に映つた。シビルレートも其處に居て、憎々しげ

に吠えたり甲高く叫んだりしてゐた。

すつと傍へ寄つてみると、パボーシンは銃を木に立てかけて、人間の死體を覗きこんでゐた。

「シビルレートがゐなかつたら、うつかり通り過ぎただらうよ！」と彼は眼の前に横はつてゐる死骸を検べながら言つた。もうすつかり解體と腐敗の時期に達してゐた。

著衣と大きな赤い顎髻から判断すると、ロシア人の死體だ。褐色の亞麻織のルパーシカを着て、防水ズボンを穿いてゐた。死體に觸れないうちには別に臭ひもしなかつたが、一寸動かしたところ、堪らない位の腐臭が、ぶんと臭つた。

パボーシンはそんなことには構はず、自分でも臭い煙をぶかぶか吐き出しながら、死體をちちこつち轉がした。

身體ぢゆう隈なく調べてみて、頭蓋骨の耳の邊りに彈痕が二箇所、革ズボンのポケットに四十五ルーブル在中の財布が一箇發見され、その外に、何かの表書と略圖を描いた便箋が一枚あつた。これはみんな温つて、半ばボロボロになつて、手で引きちぎつてあつた。長靴は蟻に食

はれて、靴底が踵ごと残つてゐるだけだつた。

「紙ツ切れをしまつとけよ！」パボーシンが私に差し出して言つた。

「何かの役に立つかも知れん！ さア、こいつを埋葬しよう！ このまま放つとく譯に行かんよ。こいつ基督教徒で、しかも正教徒だ！ 胸に十字架を掛けてゐる！ 洗禮はすんでゐるんだよ！」

それからわれわれはひどく骨折つて穴を掘り、身許不明のロシア人の死體を穴に入れて、死體の上で祈りの文句を誦し、砂と石をかぶせたのである。

その邊を調べてみたが、犯罪の様子を知り、真相を明かにすることの出来る手掛りは、何一つ見つからなかつた。この人間は何者に殺害されたのか、この暗い祕密な事件を惹き起した事情は何であるか、われわれにはさつぱり見當がつかなかつた。

それからまた、新しい墓に腰かけてビスケットで元氣をつけてから、更に峠の方へ前進し、夕方近く小屋に辿り著いた。小屋は、截り立つたやうな花崗岩の崖の下から、急淵となつて奔流する谷川の岸邊にあつて、絶壁の上には暗い朝鮮松の巨木と樅が茂つてゐた。

さて寝ようと横になつたとき、ふと死體のポケットで見付けた紙片のことを憶ひ出し、薄暗い松明の明りで、その紙片を研究し始めた。これはコツピー鉛筆で一ぱい書き込んだる便箋の切れツばしだつた。

綿密な解剖と非常な苦心の末、つひに決定的な結果を得て、次ぎのやうに讀んだ。

「老爺嶺の廟より南東へ百六十歩、割れた石。西へ四百十歩、焼けた樫。ロジノフ」

本文の下に略圖が添へ書してあつたが、時と水たのめに殆ど消えてゐた。

「やつぱりさうか」煙草で煤けた指を上げて、友は言つた。「ロジノフだつたんだなア！あのときどうも奴に似てるな、とすぐ思つたんだが！何しろ顎髯と頭の毛がそっくりだからね！それにズボン吊りがロジノフのもんだし、眞鍮の留金がついて、ね。しかし、奴がどうして密林に姿を現したか、そして誰が殺つたか？この事件の祕密が解けないやうぢや、この俺はバポーシンぢやない、といふことになる！ロジノフはね、昔からの鑛山師なんだよ。俺たちシペリアッ子は能く知つてるんだ！材木業はこの滿洲だけの話でね、それが今、つまり金鑛探しを内職にやらうと思つて、やつたところさ。頭に二發、鐵砲玉を食らつて死んだッてことは

こいつは間違ひないが、さて、この鐵砲玉をブツ放した奴は誰か？——となると、こいつは誰だね！」

それからバポーシンは考へ込んだが、矢鱈にパイプをふかした。

「おい鼻眼鏡！いいかね！」しばらく考へた擧句に、言葉を續けた。

「あの彈丸を撃つばなしたのは、支那人でもなく匪賊でもない、ロシア人だ。それに極く近い距離で撃つてゐる。彈丸のはひつた孔を見れば判る。そればかりでなく、匪賊だつたら丸裸にして、ズボンを持つて行くだらう。ところがポケットに金がはひつてゐる！いや、こいつは物取りの仕業とは受け取れないよ！」

「まつたく君の言ふ通りだ、バポーシン」と私は密林の放浪者に答へた。「僕も同感だ。それから僕は思ふんだが、明日、紙ツ切れに示してある場所へ出かけて、金に關するわれわれの推察を確める必要がある！」

「勿論行くとも！」煙草を詰めた例のパイプをふかして彼が宣言した。「おい、鼻眼鏡、お互金満家になれるかも知れんぜ！」

一寸した沈黙の後、私は二本目の松明に火を點けた。赤味を帯びた強い明りは、貧弱な小屋の内部を隈なく照らした。

「假りにわれわれが金持になるとしてみよう！」と私は應じた。自分の富をどう處分するか、といふ問題に私は興味を抱いたのだ。

パボーシンは、すぐには返事しなかつた。彼の眉はしかめられ、パイプは猛烈に煙を吐いた。彼の頭腦は、私の提出した問題、これは彼には馴染みのないことで、本質的にはまるで縁のないことだが、こいつを頻りに考へてゐた。

パイプを吸ひ終ると、ぶうと吹いて、マツチの軸で掃除して、やつと返答にとり掛つた。

「そいつは、なかなか氣の利いた質問だ！ そんなことは一ぺんも考へたことがないね！ だが、富ツてやつは俺には何の役にも立たんと思ふよ！ どうしてか、といふに、俺は生きて行くのに必要なものは全部持つてるぢやないか！ たらふく食つてるし、寝てるし、穿いてるし、折々は一杯やるし、ぶかぶか吹かすし！ 富を持つて何にするんだ？ 石造りの邸宅や御殿、山海の珍味、高價な酒と女、僕婢、自動車、追従と欺瞞！ どつこい、そんなものはまツび

ら、願ひ下げだ！ そんなものはみんな失くなつちまへ、だ！ 俺は今ままで金持だよ！

俺は風のやうに自由だ！ 誰に借りがあるぢやなし、誰の世話になつてるぢやなし！ 御殿なんか要らんさ。俺の御殿は、掘立小屋に山小屋さ！ 俺の脚は自動車より好いぜ。ガソリンが要らんよ。外國の酒は飲まないが、我がロシアのウオツカに鹽漬胡瓜かパンの皮さ！ フリカセー、コンソメ、ゼリイなんて認めんよ！ 菜汁と粥があれば俺は何も要らん！ 有難いことに、著て、履いて、吸つて、折々は飲んでゐる！ この上に何が要るんだ！ 富ツてやつは悪魔から出たもんだ！ 富める者の天國に入るは、駱駝の針の穴を通るより難し！ 聖書に確かさう書いてあつたな？ おい鼻眼鏡！ 黄金で俺を誘惑するなよ。俺は黄金に對して關心を持たん」

かう言ふと、パボーシンは小屋の外へ出て、新月の靜かな光に照らされた素晴らしい原始林のパノラマを、しばらくの間無言で眺めてゐた。

密林は沈黙してゐた。その靜寂を破るものは牡鹿の鳴き聲だつた。その鳴き聲は、あたりに響き渡つて、斷崖の懷で木靈を繰り返しつづ谷間から運ばれてくるのだつた。

「まったくさ、君！」バボーションは私と一緒に己れの「獨りもの」、彼は自分の小屋をかう呼んでゐたが、それへ戻るとき、やつと口を開いた。「俺はお天道さまの光の中の金だけは認めるが、土の中の奴は認めんよ。尤もロジノフの情報を調べに、君と試掘に行くことは賛成なんだがね。だが、今ところ、一ト寝入しようぢやないか！」

一日経つと、われわれはすでに老爺嶺の峠にあつて、廟の傍で夜を明かしながら、ロジノフの書附に示してあつた場所の探索に當つてゐた。

石だらけの荒地に茂つた野葡萄や蔦かづらの藪が、われわれの探索の邪魔になつたが、やうやく正午過ぎて、相當な石英屑を伴つた花崗岩の露頭にぶつかつた。この中に金が屑をなしてゐる筈と想像されてゐたのだ。

「悪魔の奴、こんな處に財産を隠してやがつた！」疑ひもなく探掘した形跡のある石英屑を指差しながら、彼が言つた。「ここに、ロジノフの金鑛脈があるらしく思はれる。場所が符合してゐる！」バボーションは、かう言ひながら、背負うてゐた袋を地べたに下ろし、經驗の積んだ鑑定家のやうな手際で試掘に取り掛り、石を一つ一つ研究しはじめた。

その附近に、此處で金を掘つたロシア人の金鑛探検家が、夏住んでゐた小屋の址が見つかつた。掘り返して間もない土、金槌で碎かれた石英の屑などは、含金鑛石が豊富に在ることを證明してゐた。ある破片にはまだ金の痕跡が残つてゐて、破壊面に貴金屬がキラキラ光つてゐた。バボーションでさへこの仕事に興味を持つて、胼胝だらけの掌に唾をつけて、花崗岩の中に厚い層をなしてゐる石英脈を、斧の背で碎いてゐた。碎かれた屑の中に、針金状のもの、豌豆大又はそれ以上の塊の金をわれわれも発見した。「ほうれ、人間が金と呼んでゐるこのガラクタを、記念のために持つて行けよ！」と彼は言ひながら、さも賤しむやうに、黄色く輝いてゐる石英の破片を足蹴にした。

金を一ト握りポケットに入れた私は、たうとう抗議して、仕事をやめさせた。

「おい、バボーション！ もう止せよ！ いくらやつたつて、斧ちや山全體を掘返す譯には行かない！ 澤山だよ！ 鹿が鳴いてるぢやないか！ それよりは、小屋へ歸つて仕事にかからう！ 金の方は山靈に委しとけよ！」

「まったくだ！」密林の放浪者は斧を投げ出して、ジャケットの袖で、汗ばんだ額を拭いた。「悪

魔の奴、自分の玩具で俺を誘惑して詰らぬことをさせやがったよ！早く向ふへ行け！こんな金なんかどうなつたつていいさ！

一時間の後われわは密林の天井を震はせてゐる響きのいいその鳴聲を真似ながら、鹿を待ち伏せてゐた。

x

その年の冬、ハルビンへ行つたことがあつて、當時商賣をやつてゐた仲良しのM・M・ザイルスキイに、金鑛の話をしたのだが、彼は私の話に非常に興味を持ち、すぐ密林へ出掛けて、自分で金鑛の場所を調べたい、と言ひ出した。だが、私はパボーションの協力を約して彼の企てを避け、自分の家へ歸つた。

パボーションは密林の中に引こもつてゐたが、降誕祭になつて二日目に、突然私の家を訪れて、熊のやうに抱きついた。

「パボーションが酔つてる、と思ふな。心はまだ酔つてないぞ！」と彼は私の肩を叩いて喚び出した。「ロジノフをやつたなあ誰だか、たうとう突き止めたぜ！ グリーシカの仕業だ！ 奴、

俺に問ひ詰められて、白状したんだ。それはかういふ譯だ！

グリゴリーが不在の時、ロジノフが突然小屋を訪ねてきて、グリゴリーがナスターシヤを欺いてゐること、彼を誑らかしてゐるジプシイ女のフェーニヤのために、彼女を捨てる考へであることなど、グリゴリーについて何もかも喋べつてしまひ、そのあとで、自分はお前を愛してゐると告げ、一緒に逃げてくれ、離婚の手續が終つたら結婚式を挙げよう、といふやうなことを、ナスターシヤに提議したのである。小屋にゐたのは、ナスターシヤ獨りだつた。この厚かましい男の話を聞いてゐた彼女は「出て行け、卑怯者！」と嗚鳴つた。自分の力を頼んだ彼は「ふん馬鹿な女だ！」と、言ひながら彼女に飛び掛つた。力づくで連れて行く肚だつたのだ。しかし、ナスチャは負けてゐるやうな女ではない。猛烈な力で彼に拳固を食はしたのでロジノフは床に這つた。そして彼女は装填した獵銃を壁から外して彼を小屋の外へ追ひ出した。彼は馬に飛び乗ると、そのまま逃げて歸つたのだ。これは正午の出来事で、夕方グリゴリーが歸つた時、彼女は有りのままを語つたのだが、フェーニヤのことは、良人が隠してゐた話なので、このジプシイ女のことだけは口にしなかつた。

すつかり事情を知つたグリゴリーは、その晩、馬を飛ばしてロジノフの後を追うた。ロジノフは金を試掘してゐた小屋へ向つたのだ。

朝早グリゴリーはロジノフに追いついて、馬上から叫んだ。

「おい、人非人、停れ！ 一トこと言つてきかせることがある！」

ロジノフは恐ろしい敵の姿を見て、銃を執るなり發砲した。一發目でグリゴリーの馬を斃したが、後の弾丸はみんな彼の頭の上を唸つて過ぎた。グリゴリーもこれに應じて二發撃つたが、これは的を外れなかつた。その弾痕はわれわれがあのととき發見した、あれである。悪魔を殺して了ふと、グリゴリーは相手の馬を奪つて、日暮間近に小屋に歸つたが、ナスターシヤには一言も洩らさなかつた。彼女の方では聞かなくても、彼が間違ひをやる筈がないと思つてゐたので、何も訊かなかつた。翌日になつて、彼女が馬の始末や掃除をするとき栗毛のワシカが見えず、その代り、納屋には別な葦毛の馬がゐたので、すぐ何もかも覺つてしまつたが、知つて知らぬ顔をしてゐた。

パボーションが酷く酔拂つて疲れてゐるのを見て、私は書齋の床の上に寝かじつけた。といふ

のは、この男、寢臺の上に寝ると『塀の上の猫』のやうな氣持がする、床の上の方が遙かに氣樂で落著くと言ひ張つて、どんなことがあつても寢臺の上に寝ようとしなからである。

あくる朝早く、白むか白まないうちに眼を覺して、寒い中で冷水を桶で浴び、アルコールを一杯引つかけ、何もなかつたやうな顔をして好きな蜂蜜のはひつた茶を『柔げ』（原註・彼の表現である）にかかつた。

私が食堂にはひつた時、彼は十杯目を終つたところだつた。彼は汗がひどく流れるのをタオルで拭き拭き、幸福さうに微笑した。

私は彼に獵のことをいろいろ訊ね、ゾートフ夫婦の事件の成行に興味を持つて質問した。

「君はグリゴリーの家庭の現状は、一つも言はないぢやないか。いづれにしてもわれわれにとつて可なり重要なことだらう？」

ちよつと考へて、例のパイプをふかして彼は言つた。

「あの家庭問題は極めて良くないね！ フェーニヤはすつかりグリゴリーを迷はせて了ひ、どうせ祿な結果は望めないらしい。どうもあの女、惚れ薬を飲ませて、奴を自由に操つてゐる

らしく思はれる。みんなチユマコフの奴らが悪いんだ。奴等はジブシイ女を抱きこんで、奴にナスターシヤを捨てさせよう、といふ譯だ。そして老いぼれのベチン師とグルになつて、グリゴリーイを迷はせるやうに、娘のフェーニヤを買収したんだ。どうだい君！ 奴らのやる事は實に巧妙で悪智慧が働くぢやないか！ ちやんと奴等の計略は圖に當つて、グリシカの奴、あのガラクタのために、いつでも女房を捨てる肚でゐやがる！ ナスチヤは何もかも知り抜いてるんだが、眼をつぶつてさへ居れア、亭主を引き留めて置けると思つて、何も言はず小屋に住んでるんだ。部分的には彼女の考へも正しいが、結局捨てられるだらうぜ。近頃いよいよ瘦せて、咳はするし、悪くすると、肺病になるかも知れん。グリシカも馬鹿ぢやないから、みんな見て知つてるんだが、何しろ意志の力を失つて、女の言ふなりだからね、ナスチヤを可哀さうとは思つてゐるらしいが、今ぢや全然彼女に愛を持つてないのだ！ 女として彼女は何の魅力も……なア君、奴らのごてごては不潔で陰慘だよ……」

「うむ、よし！」私は相手を遮切つた。「それで君は、そのことをグリゴリーイと話したのか？ 懇々と説いてやつたのか？ 恥ぢ入つたかね？ 凡べてを捧げつくして命を救つてくれた恩人

のナスターシヤに對する奴の態度が、如何に卑劣で下賤であるか、證明してやつたかね？」

「いや、話したどころか君、ナスチヤの事から、すんでのことに撲り合ひになるところさ！

奴は自分で自分を卑劣漢と呼んでゐるんだが、誘惑と闘ふだけの力がないことを認めてゐる。

どうだ、女が男をしつかり掴んだら、到底引き離せるもんぢやないよ！ 嘘のやうだ！」

パボーシンの返事に私はすつかり満足して、それ以上この問題に深入りしなかつた。が、金鑛に關する友人ザゴールスキイの頼みを憶ひ出したので、パボーシんに訊ねた。

「パボーシン！ 話は違ふが、君もよく知つてゐる僕の親友で好人物のミハイル・ミハイロウイチ・ザゴールスキイね、あれと、鑛山技師のエドアルド・エドアルドウイチ・ブーネルドを、密林へ連れて行つて、金鑛を見せてやつて貰へないだらうか？」

古い山男は私を見おろし氣味に眺めたが、はははと窓硝子がびりびり震へたほどの聲を立てて笑ひながら答へた。

「鼻眼鏡！ 俺を何だと思つてるんだね！ 卑劣漢か悪魔の家來とでも思つてゐるのか！ 君の友人技師を、この古い密林の放浪者なる俺が、密林へ案内して金を見せてやる！ 飛んでもな



い、眞ッ平だよ！ そんなことはもう口にも出してくれるな。そんな考へは頭から追ッ出して  
了へー！ ミーシカ・ザゴールスキイなら知つてるさ！ 立派な人物で、シベリアで言ふ『好い  
若い者』だ。併し、それにしたつて呪はれた金鱧は見せてやらんよ。アーネルドなんかには言  
ふまでもない。判つたか。この俺は金鱧の案内者ぢやないんだぜ。すでに彼處では、ロジノフ  
が命を落してゐるんだ。それに君は自分の親友をまた送らうとするのか！ いやいや、この俺、  
年寄りの馬鹿者に、二度とそんなことを頼んでくれるな。君の頼みを叶へる譯には行かんよ！」  
それから一寸思索して、言葉をつづけた。

「君は覺えてゐるか、あのミハイル・ザゴールスキイはナスターシヤに夢中になつて、結婚し  
たがつてゐた程で、彼女が西瓜を持つて来てくれた時は、可哀さうに氣も狂はんばかり喜んで  
われわれが看護して、やつと癒つたぐらゐだつたよ。だが、今會つたら喜ぶかな？ 戀人をも  
う忘れてゐるかな？」

「何言つてるんだ！ あいつ、とうの昔に結婚して子供まであるんだぜ！ ナスターシヤのこ  
となんか憶ひ出しもしないさ！」

「それは結構だ！」私の話相手はかう言ひ添へて、話題を變へて訊ねた。

「何時密林にやつて来るかい？ 打合はしとかないと」

「この祭日が終つたら行くよ！」私は友に答へた。

「いやア、あしたの方がいいぞ！」と彼は異議を唱へた。「さもないと、俺はひよつとすると飲  
み出して、何處へ行くか見當がつかないぜ！」

私は承知して出發の準備に取り掛つた。

その日の夕方、市場でグリゴリーと出くわした。彼はわれわれを見ると、どきまぎして、  
心の動搖を押し隠さうと、人混みの中に、そそくさと姿を消した。

「ちえツ、女に甘え野郎さ！」バボーションは輕蔑するやうに言つて、横へ唾を吐いた。

「後暗いことをしてると思や、まともな人間の前には、出られまいさ！ どうしたつて、俺た  
ちの眼はゴマ化されないよ！」

われわれと遭つてのち、グリゴリーは山の小屋へ戻つて、ナスターシヤに對し、並々なら  
ぬ深切な思ひ遣りのある態度をとつた。だが、みんな肚から出たものでないことを經驗によつ

て知つてゐた彼女は、また何か不愉快なことが起るのではなからうか、と用心した。彼に對する信頼はとうの昔に失つてゐたのだ。

その晩、寢ようと横になつたとき、グリゴリーは彼女を抱いて、明らかに興奮した様子で言つた。

「ねえ、俺は君の健康状態が心配で堪らないんだ。治療しなきゃならんのだが、この密林ちやそれが出来ない。だから、停車場の親許へ歸つたら、それが一番良いと思ふんだが。良くなつたら、また此處に歸つてくるさ。俺はもう君のおつかさんに話したんだ。おつかさんも同じ意見で、君を待ち兼ねてるんだが、君はどう思ふ？」

ナスターシヤは良人の言葉を注意深く聴き終ると、良人の抱擁から逃れて、輝いたその眼で凝つと彼を見詰めながら、激昂をやつと抑へて言つた。

「グリゴリー！ どうせそんなことを、あなたの口から聞くだらうと、前から待つてたんです。だから別に驚きもしません。あなたが用心深く隠してゐることは、何もかも知つてゐます。あなたはあたしに嫌氣がさして、外の女に見代へたんです。それも仕方がない。愛は強制

出来ませんもの！ どうぞお好きのやうに！ あたしはあなたを愛してゐて、持つてゐるものはすべてあなたに捧げました。今だつて愛してゐます。しかし私の愛はあなたに取つて不要なんです。あたしを停車場へやつて、全く自由になるお積りでせうが、あたしはあなたを誰にも譲らないし、何處へも行きませんから、そのお積りでどうぞ！ あなたは力づくであたしを追ひ出すことが、やらうと思へば出来るけれど、前もつてお断りして置きますが、あなたの愛人をそのまま生かしちや置きませんから。あたしが生きてゐる間はあなたとあの女は幸せになりつこありませんよ、あなたがあの女と一緒にになれるのは、あたしの死體を乗り越えてからです」かういふと、ナスターシヤは、両手で顔を覆うて慟哭し出した。永いあいだ極度に緊張しつづけた彼女の神経は、もはや堪へられなくなつたのである。

彼女の告白と強硬な態度にすつかり驚いたグリゴリーは、精神的に打ちのめされ、またすべて自分に罪があるといふことを意識して、これからどうしたものか判らず、血の滲むほど唇を噛みながら、追ひ詰められた野獸のやうに、部屋を隅から隅へ歩いてゐた。そして自分のお蔭で、精神的にも肉體的にも苦しみ果てた女の方を見る勇氣がなかつた。彼は何か思案してゐ

たが、永い沈黙の後、つひに、妻の頭に片手をのせて、改めて口を切つた。

「ナスチャ！ それは感違ひだ！ 俺があれに惹かれてゐるのは一時的のもので、夕立のやうに直ぐ通り過ぎるものなんだ。俺は君に大變恩になつてゐる。君は女として出来る限り、いやそれ以上、俺に盡してくれた！ 俺は君の前に頭を下げる。以前通り君を愛してゐる。だが、今すぐあの女から離れる譯には行かぬ。俺の力ではとても出来ない……」

最後の言葉が耳にはひると、ナスターシャは頭をあげた。

涙に濡れた青白い彼女の顔の中で、美しい受難者の双つの眼が、心の火のために輝いた。その眼はグリゴリーイの魂を突き刺した。彼は、傷ついた牝虎の怖ろしい眼と向き合つてゐるやうな氣がして、その眼の奥に、自分に對する宣告を読み取つた。

「グリゴリーイ！」妻は彼を遮切つた。「最近あなたが、のべつに言つてゐた嘘と同じく、それも嘘です！ 今ではあなたの言ふことは一ト言も信じません！ 恐らくあたしの命も長いことはなからうと思ひます。死期が近づいてゐるのを自分で感じます！ 停車場へ行くのは嫌です。あなたの浅ましい行ひを見たくないからです。あたしをソツとして置いて頂戴。あなた

は愛人の許へいらつしやい。そしてあたしの存在を忘れて下さい。神様がお裁きになるでせう。

あたしは許してあげます！」

かう言ふと、彼女は良人の頸に腕を巻きつけて、永い、熱情の籠つた接吻のまま、しばらくは動かなかつた。これは、女の大きな愛情、深い魂をことごとく傾けた彼女の最後の接吻であつた。

やがて、彼女は良人を押しのと、半シューズを纏つて戸外へ出た。此處で犬達が彼女を取り巻いて、肩へ飛びついて、自分らの愛情と忠實さを表はさうと努めた。彼女は犬の廣い額を撫でたり、毛の密生した毛皮を叩いたりした。犬はそれに應へて、嬉しさうに吠えたり叫んだりした。

今や彼女にとつては、何もかも明らかになつた。何の疑ひもなかつた。彼女の偶像、彼女が己れの魂を捧げたグリゴリーイは、永久に彼女から離れ去つたのだ。彼の眼の表情、彼の聲の調子によつて、また、今までかつて間違ひのなかつた心の感覺によつて、彼女は直ぐに悟つたのである。

峻しい河の岸に出ると、彼女はしばらく断崖の上に立つて、さまで遠くもない幸福な過去を憶ひ浮べた。涙が流れて、雪の上にはふり落ちた。彼女は涙を休へようともしなかつた。誰も見てゐる者がなく、ただ暗い夜空の底で、無心な星が煌めいて、瞬きしながら地上を見てゐるだけだつたからである。

半シユーバの裏まで沁み通る寒さが、やうやく彼女を小屋の内へ戻らせた。

グリゴリーは、両手を後で組みながら、まだ隅から隅へ歩きつづけてゐた。同じやうに彼も、凡てが終つた、ナスタシーヤは永久に自分から離れ去つた、と悟つて、堪へがたい空虚が心の中に忍びこんだ。彼は自身の無力をしみじみ感じたが、これがまた更に心を締めつけるのだつた。

この晩、二人は眠れなかつた。眠氣がちつともささなかつた。將來に對する不安が、二人の空虚になつた心に落著きを與へなかつたのだ。

彼はいろいろと不愉快なことを考へながら、一ト晩ちゆう小屋の内を、あちこちしてゐた。彼女は聖書を讀んでゐたが、出口のない自分の悲しみを慰める二三の賢い言葉を見出した。

そのまま夜が過ぎて、夜が明放れるころ、惱みと不眠で疲れ切つた二人は、寒さ防ぎに半シユーバを被つて、假睡みはじめたのであつた。

そののちグリゴリーは、小屋に五日ほど滞在してゐた。その間に近くの丘で二頭の野猪と鹿一頭を撃ちとめ、それを持つて停車場へ出掛けた。

ナスタシーヤと別れる時、接吻しようとしたが、彼女は拒んだ。「あなたの接吻は要りません！ あたしを放つといて、あなたの心を惹きよせてゐる處へいらつしやい！」

歪んだきまり悪げな薄笑ひを浮べて彼女の傍を離れた彼は、楯にのると、振り向きもせず馬を走らせた。

彼女はながい間その後姿を見送つてゐたが、ふツと憂鬱になり、悲しさを帯びた眼差に、憎悪の炎が燃えあがつた。その時の彼女は、仔を持つて行かれた時の牝虎を思はせるものがあつた。

暇を潰し、淋しさを紛らすために、彼女は犬をつれて神の世界の美しさを眺め、自然のままの状態における野獸の生活を觀察しながら、山野を歩き廻ることがよくあつた。

彼女が自然と結ばれてゆくと、當時あれほど大きく、堪へ切れないと思はれた一身上の悲しみも、知らず知らずのうちに薄らいでいつた。彼女は宇宙の大きさにしみじみと打たれ、人間の存在のちつぽけなことを悟つた。すべての過去が遙かに遠い悪夢のやうに思はれ、惱み抜いた彼女の魂は、安らかさと忘却を得て、和らぐことができた。

しかし、小屋に戻ると、過ぎ去つた幸福の場面が生々と眼の前に現れて、悲愁と絶望のために身の置きどころが無くなるのであつた。

それで彼女は、小屋にはただ犬に食べ物をやつたり、カマドを焚いたりする時だけしかあひなかつた。そのほかの時間は、附近の山林を歩き廻ることにしてゐた。

この山林の徘徊と、自然との融合は、暗い想念を拂ひのけてくれた。たとへ少しでも悲しみを忘れるために、どうしても必要なものであつた。

## 仔をつれた牝虎

私とパボーシンは、仔をつれた牝虎の足跡を、二日も追跡したが、つひに追ひ付くことが出来なかつた。われわれが追跡するのを悟つた牝虎は、狡智を働かせて、その邊を一ト廻りしては足跡を混乱させたり、殆ど垂直の斷崖を攀ち登つたりした。この斷崖でわれわれの道は遮られ、十露里以上の遠廻りを餘儀なくされ、勿論これで永い間足止めを食つたことになつたのだ。

われわれは犬をつれてゐなかつた。だから頼みとするのは自分の根氣と脚だけだつたが、その脚が野獸に比べて遙かに弱いのは、言ふまでもない。牝虎は生後六ヶ月足らずの仔虎二匹をつれてゐた。仔虎は何處へ行くにも母について行つて、野猪、特に猪の子の獲り方を母に教へ込まれた。猪の子は、直接牝虎の看視の下に、仔虎が獨力で襲撃するのだつた。

この狩獵は夜行はれてゐた。晝間は一家族揃つて、何處か高い、日當りのいい岩山の上で休息してゐた。そこからは四方が見渡され、逸早く危険を知つて追撃を避けることが出来た。

かやうにして、われわれは、猛獸のために落著く暇もなく、密林の奥へ奥へと追ひ込んで行くうちに、たうとう、夕日の紫紅色の光を浴びた大頭頂子の高い岩の頂が、地平線の上に忽然

と現はれた。

「なあおい、鼻眼鏡！」バポーシンはハイリンのある峠で足を停めて言つた。「此處まで來ると、グリゴリーイの小屋は近いが！訪ねて見ようか？近頃ナスターシヤはどうしてゐるだらう？男の方は大抵横道河子にぶらぶらしてゐる日が多いだらうが、女の方は獨り密林の中で淋しがつてゐるだらう。まつたくグリーンシカは卑劣漢だな！ナスターシヤみたいな女を、あんなガラクタに見代へるなんて！牝虎も丁度小屋のある方へ行つたから道筋に當る譯だ。今日は何處かこの邊に野宿して、明日ゾートフの小屋へ出かけよう。そして犬を借りて來て、改めて虎を追ふことにしよう！」

バポーシンはかう言つて、深い谷の方へ大股で降りはじめた。彼の豫想によると、匪賊に掠奪された支那人獵師の小屋の毀れかけたのが、そこに在る筈だつた。

私は彼が歩いた跡を歩くやうに努めて、やうやく彼について行けた。といふのは、何しろ雪が非常に深い上に、雪が融けて凍つたのが厚い層をなして雪の上を覆うてゐたからだ。間もなくその小屋が見付かつた。われわれは先づ修繕を施して、どうやら人間の住居らしい恰好にし

た上で、その晩泊ることになつた。煖爐と煙の通路も直つたらしいので、小屋の外に山ほど積んであつた薪で、カマドを焚きはじめた。

すつかり暗くなつて、われわれは暖かくなつた<sup>シヤ</sup>炕の上に腰掛けて、茶を飲みながら、密林の音や狼の聲に耳を澄ました。われわれの想ひは樹海の密林の彼方に残して來た凡ゆる文化の世界と遙かにかけ離れたものだつた。

われわれの居る處は、外の世界から何一つ物音の通らない魔境だつた。

小屋の内はヤケに熱くて、バポーシンは一枚一枚著てゐるものを脱いで、たうとう襯衣一枚になつてしまつた。

炕の上にごろりとなつて、のんびりした彼は、この破屋<sup>くはや</sup>の主の悲惨な身の上を語つてきかせた。

「この小屋の主は、朝鮮人の金といふ男で俺は顔見知りだつた。この男は朝鮮から稼ぎにやつて來て、死んでしまつたんだ。冬は黒貂や栗鼠を捕へ、夏は川で砂金を掘つてゐたが、妙な奴で、金をみんな手許に持つてゐた。これを支那人に嗅ぎつけられ、匪賊に金を持つて行かれちま

つたのさ。後で知り合ひの獵師たちの言ふところでは、その砂金はドロップの空罎に入れて、川の底に隠して置いたんださうだが、火で拷問されても秘密を喋べらなかつたといふ。そこで釋放して、何かの藥草を入れた白酒バイチュウをご馳走したところが、譯が分らなくなるほど泥酔してしまひ、砂金の隠し場所を喋つちまつた譯だ。支那人たちは砂金を手に入れると、朝鮮人を小屋に抛り込んで立ち去つたが、翌る日、眼が覺めて我に返つた朝鮮人は、砂金がすでに失くなつてゐるのに氣がつき、悲しさのあまり首をくくつたんだが、場所は砂金の匿してあつたその眞上の木だよ。その後、俺は奴の骸骨を發見して、その川岸に埋めてやつた。さて一方の匪賊たちだが、四、五日経つと、砂金の分け前から仲間割れがして刃傷沙汰になり、生き残つたのは、たつた一人で、この男も深傷が因で死んでしまつた。ところで砂金は、最後の一人が泊つた小屋に住んでゐた獵師たちの手にはひつたといふのだ。これは二年前の話で、砂金が匿してあつた場所に、ちよいちよ朝鮮人の幽霊が現れる、と支那人達は言つてゐるが……あの砂金を持つてちや祿なことはないさ！ だが、もう寝よう！ ずつかりくたびれた！」かう言ふと、彼は寢返りを打つて、死んだやうにすぐ眠つてしまつた。

私もまたいつ寢込んでしまつたか、自分でも判らなかつた。

虎を追跡してゐるうちに判つたのだが、睡眠と休息を取らない仔虎は酷く弱つてしまひ、落伍しないやうに牝虎が後から追ひ立ててゐた。最初仔虎は母親の後について行つたが、終ひには母親が仔虎の後について、仔虎の足跡を自分の足跡で消してゐた。

「見ろ！」バボーションは野獸の足跡を指差して言つた。「子供の方は疲れたぜ！ 眠むたいんだがおふくろが眠らせないで、遅れないやうに追つ立てるんだ！ いいか。俺達が追ツついたら、おふくろの方だけ撃つんだ。子供の方は放つとかう！ 生かしかう！ 殺すのも可哀さうだ！ まだ何も解らないんだからなア！」

その時われわれは虎の足跡の上に立停つて、バボーションはパイプをふかしてゐた。

われわれの計算によると、夕方近くなつて追ひ付く筈だつた。いま夜が明けたばかりだ。

バボーションの意見を知つて、私は自分の考へを述べて返事した。

「まつたくだ。仔虎は可哀さうだ！ だが、まだホンの子供だし經驗もないから、母親がなけれど、いづれにしても死んちまふぜ！ いつその事、みんな放つといつて、この足でグリゴリー

イの小屋へ行つた方がいいぜ。十露里(二里半)とあるまいよ、いまグリゴリーも小屋にゐるかも知れん！」

「へえ！ 俺もその事を考へてゐたんだが、言ひ出せなかつたんだぜ！ 君がさういふ意見なら、俺たちのやる事は、ゾートフの小屋のお客になりに行くことだけだ！ ことによるとグリシヤは歸つてないぞ。例の別嬪の處に沈没だぜ。なに、かへつてその方がいいよ。どうせ獨りぼつちで淋しがつてゐるだらうから、餘計喜ぶからね。さ、行かう！」かう言ふと、虎の足跡を離れて、小屋のある東の方を指して雪の堆積の間を降りはじめた。

それから五露里も行かないうちに、聞き覚えのある犬の聲を耳にした。

「あれはゾートフの犬だぜ！」古い狩獵家が斷定した。「ナスターシヤも一緒らしい。急がう！」

小さな山の背一つ越えると、樅林に陽の當つてゐる處で、犬に取り巻かれた人影が眼にはひつた。われわれが近づくと、犬が飛んできて甘えはじめた。

ナスチャは遠くからわれわれに氣付いて、近づいてきた。

「こんにちは、別嬪さん！」バポーションは銃を上挙げて、嬉しそうに微笑しながら喚びいた。

「近頃どうだね？ 獵に出たのかい？ 獲物はどれだい？」

「いいえ、獵に來たんぢやないの！」獵銃を肩に掛けながら彼女は答へた。「家にゐるのが嫌で堪らないので、犬をつれて山を歩き廻つて、淋しさを忘れてますの！ グリゴリーとは滅多に會ひませんわ。最近はずつと出たつきりですの。いらして下さつて、ほんとに嬉しいわ、これから朗かになれますわ、あたし」

それからすこし話して、われわれは小屋へ向つた。彼女は歩きながら、良人のことになるべく觸れないで、自分の面白くない生活状態を語つた。われわれは良人について質問したのであるが。

私はながい間彼女を見なかつたが、何だかすこし健康が回復して丈夫になつたやうに思はれた。以前蒼白かつた顔はいくらか陽に焼け、凹んだ頬には健康さうなバラ色が現れてゐた。大きな眼には、今まで全然失はれてゐた生命力の火が燃えてゐた。

「若返つて見えるよ、ナスチェンカ！ 前と違つてきた！」バポーションは彼女と一緒に歩かう



と努めながら、かう言つた。

「ええ、グリゴリーと別れたあの頃からすると、身體工合がずつと好いし、それに今の境遇を諦めましたわ。あの人がそれほど悪い譯ぢやないんです。あなた達男ツてみんな同じですわ——あなた達にスカートを見せたら理性を失つてしまふんです。グリゴリーは馬鹿ぢやないけれど、蠟のやうに心が弱くて、どんなものでも捏ねて作れるんです！ あの人は私を停車場へやらうといふんですけど、承知しなかつたんですの？ 誰の指金だか、判つてゐるんです！ 何も起らないやうに、あたしは小屋に残つてますの！」

「それが本當だ！」とパポーションは自分のパイプの煙を彼女の傍から追ひのけながら頷いた。「奴らは君を停車場におびき出さうとしてゐるが、行つたが最後、二度とグリゴリーに會へないぜ。なアに、ナスターシャ、奴等に負けるな、何も恐れることはない！ 萬一の場合は俺達が附いてゐるから、指一本差させやしないよ！」

「有難う、パポーション！」ナスチャは顫へを帯びた聲で答へた。

「誰も恐れないわ？ あたし、臆病者ぢやないもの！ それに、あの人達の手からグリゴリー

イを奪ひ返すためだつたら、もう一度命を捨ててもいいと思ふの！ 最初、あの女を殺してやらうかと思つたけれど、今ちやそんな氣もなくなつたわ！ だつて、どうせグリゴリーがあたしにとつて永久に失はれた今となつては、そんな事したつて何もならないもの。愛は煙のやうに消えて、もう返りツこありません！ 何もかも運命のなすがままですわ！ どうならうと、その用意は出来てますの、あたし！」

それからわれわれは無言のまま小屋まで歩いて行つた。小屋には前夜驛から歸つたグリゴリーが、われわれを迎へた。

ナスチャは彼に對して慇懃ではあつたが、控目にしてゐた。彼は明らかにわれわれに對してきまりが悪かつたらしく、われわれの視線を避けるやうにして、次第に無口になつていつた。パポーションは彼に對してこれ見よがしに無遠慮だつたが、それに對し、彼の方では、わざとらしい無關心と冷靜さをもつて應じた。

夕食のとき、われわれが前の晩見た牝虎の足跡に、話に移つた。仔虎が可哀さうで追跡をやめたといふことを知つて、グリゴリーがひどく驚いて、焦立たしげに言つてのけた。

「けだものを可哀さうと思ふなら、獵に行くのは無意味なことだ！ われわれ獵師はセンチメンタルな空想に従ふべきでなく、専ら實際的に動くべきだ。野獸はわれわれの生業の對象物であり、パンの一塊なんだ！ もしわれわれが野獸を哀れむとすれば、われわれは餓死するだらう」

これを聞いてバボーションは皮肉な笑ひを浮べ、私に向かつて片眼をつぶつて見せて、それに反對した。

「君の説によると、狩獵家は、良心の苛責なしに牝や仔を殺さねばならぬ皮剥ぎと同じだといふのか？ それに、仔虎を殺すのは萬更實際的でもないぜ。一年か二年経つたら成長して、直段は十倍になるからね！ 牝虎を殺すんだつて利口とは言へない。あれが居なけりや仔虎は死んで了ふからね。人間は甲蟲であらうと虎であらうと、すべて生き物を愛し、哀れまねばならん！ 生き物を愛しない者は、何ものをも、人間さへも愛してゐない。ただ自分一箇だけ愛してゐるんだ。そんな人間はどんな残忍な野獸より悪く、一文の値打もない！」かう言つて挑發するやうな風に相手を見た。

グリゴリーも負けてはゐないで靜かに答へた。

「その通り、われわれ狩獵家は、皮剥ぎ人だ。ただ生き皮を剥がないで、死んだ獸の皮を剥ぐだけの違ひさ！ もし牝と仔を全部哀れむとなれば、商賣替へするより外はない。俺も折々可哀さうと思ふことがある、が、仕方がないさ。やり掛けた以上、やつて終はなきやならんからね！」

バボーションが返答しようとしたが、どうも喧嘩になりさうなこの無益な議論を中止させたいと考へて、私は誰の方にも向かず、その議論に割り込んで、かういふ意見を述べた。

「おい君達！ 詰らん議論はよし給へ！ 君達は何れも自分なりに正しいんだ！ 生き物を愛し、無鐵砲な絶滅を救ふことは必要だ！ 教養のある狩獵家は利己的な感情だけでなく、一見非實際的と思はれても、他の考へに従はねばならない。野獸は獲るべきである。が同時に、思慮のない狩獵は野獸の絶滅を來たすから、保護すべきだ！ 個人的に言ふと、僕は牝と仔を殺したことは一度もない。僕とバボーションは、仔虎をつれた牝虎を獲るのは譯なかつたんだが、止めたんだ。無論これは見解の問題だが」

ナスターシヤはわれわれの話に口を出さなかつたが、全體の様子から察すると、われわれに賛成らしく、バポーシンの意見に對し、是認するやうに頷いてゐた。

「君達はお好きなやうに」とグリゴリーが言葉をついだ。「だが俺は明日、犬をみんな連れて獵に行く」

私とバポーシンは一緒に行くのを斷り、家に残つて休養したい、と希望を述べた。

良人が一人で獵に行くと聞いて、彼女は自分も行く、と言ひ出した。グリゴリーが反對すると、それを遮切つて、抑へるやうに言つた。

「いいわ。あなたが連れて行かないと言ふんなら、あなたの後から、いづれにしても跟いて行きます。あたしはもうすつかり丈夫になつたし、ちつともお邪魔いたしません。ひよつとすると、お役に立たないものでもありませんわ。あたしはあなたのお傍にゐなけりやいけない、とそんなことを、何ものが心の奥で囁いてゐるんです。留めたつて駄目です。何もなりませんから！」

それから、良人の返事も聞かず、彼女は犬に食べ物をやりに戶外へ出た。さつきから犬は落

著かぬ聲で吠えたり唸つたりして、空腹を懇へてゐた。

犬と馬に食べ物と水を與へてから、彼女は小屋に戻り、食器の後片附にかかつた。

グリゴリーは未來の夢のために、矢車菊を浸した酒を一杯引つけて、みんなより先きに床の上の熊の皮に横はり、みんなに「お休みなさい」と言つて、ぐろぐろ眠つてしまつた。

間もなくバポーシンもそれに倣つて、十分も経たぬうちに、喇叭のやうな聲が聞え出して、貧弱な小屋の壁を震はせた。

ナスターシヤは、それからしばらくは臺所仕事に忙しかつたが、やがて鹿の皮のカーテンを引いて、寢臺の上に横になつた。が、彼女の寢臺の上に掛けてある救世主クリストの像の前で膝まついて、永いあいだ熱心に祈禱してゐる氣配がしてゐた。

私は最後に灯を消して、すぐ寢てしまつた。

朝、まだ明け切らぬうちに、ナスターシヤに起された。若い猪で朝食がもう出來て、大きな湯沸しが沸騰してゐた。

バポーシンが川から汲んできた冷たい水で顔を洗ふと、われわれは食卓について、薄暗い灯

の下で、腹いっぱい食べた。

美味しい肉と、グリゴリーが横道河子から持つて来た新しいパンとを片ツ端から平げた私とバボーションは、臺所仕事に取り掛り、ゾートフ夫婦は、獵銃と彈藥帯を調べて、犬を呼びながら、山をさして出發した。

二人を送り出す時、われわれは山の挨拶どほり、「うんと獲物を持つていらつしやい！」と言つた。

ハイリンの山々の北側の傾斜面を、暗いまでに一面に覆うてゐる朝鮮松の密生地帯に隠れるまで、ナスターシヤとグリゴリーのすらりとして恰好のいい姿が、疎らに木の生えてゐる低地の向ふで、朝焼の光を受けながら、長いあひだもちついてゐた。

バボーションは小屋の内にはひると、先づ浸し酒を二杯引かけて、一ト寝入りしようと、横になつた。

「鼻眼鏡！ 俺をアル中と思はんでくれ。俺はただ魂の要求に従つて飲むんだ！ 笑つちやいけない！ 魂が鬱いでゐたら、宥めなきやならん。でないと後が悪いからな！」古い密林の放

浪者はパイプの灰を叩き出しながらかう言つて、毛皮の夜著を被つた。

私は眠くなかつた。で、小屋の戸をびつたり閉めて、外へ出た。

太陽はすでに遠方の背達嶺の上に昇つてゐた。黄金いろの夜明けの太陽に照らされた大頭頂子の双頭の頂が、透きとほつた朝霧の中で、やうやくそれと見別けられた。その向ふの薑色の煙霧の中に、鋸の齒のやうな白いベイダヤンの高峰が、薄ぼんやり見えた。

茫漠とした深山の静寂を破る物音は何一つなく、ただ何處か遠くの斷崖の上で狼が吠えてゐるだけであつた。

私は原始的な大自然のこの莊嚴極まりない景色から眼を離すことが出来ず、その美しさに打たれて、流れが凍つて虹のやうに輝く谷川へ降りられる峻崖の端に、ただ惘然と突立つてゐた。

この原始的自然の素晴らしい神殿にあつて、人生の意味を悟り、肉體的にも精神的にも回復したナスターシヤの心境の變化が、はつきりと理解されたのである。

x

グリゴリーとナスターシヤは凍つた川に出ると、右岸には氷上噴水の凍つた箇所や氷の融